

目次

CONTENTS

はじめに……002

第1章 プログラムについて……003

- 1 プログラムの概要……004
- 2 カリキュラムと修了要件……005
- 3 プログラムメンバー構成……008
- 4 履修生に対する経済的支援……011
- 5 応募状況と合格者数……013

第2章 2013年-2014年度教育活動……015

- 1 講義群……016
- 2 演習……022
- 3 合宿……031
- 4 国際・産学活動……033
- 5 シンポジウム……034
- 6 研究会・セミナー……037
- 7 環境整備……038

第3章 2015年度教育活動……039

- 1 講義群……040
- 2 演習……046

3 合宿……059

4 国際・産学活動……061

5 シンポジウム……062

6 研究会・セミナー……064

第4章 若手研究者による研究成果……067

- 1 論文等……068
- 2 受賞歴……089
- 3 コース生による研究成果……090
- 4 コース生受賞歴……107

第5章 広報活動……109

- 1 プログラム・パンフレット……110
- 2 学生募集チラシ、ポスター……112
- 3 ホームページ……113
- 4 シンポジウム・ポスター……114

[添付資料] 2015年度学生募集要項……117

はじめに

GLAFS プログラムが採択されて、ほぼ3年間の経過しました。本冊子はGLAFSのこれまでの活動状況と成果の概要報告書です。

GLAFSは、そのタイトルのとおり、世界中のさまざまな場所で、活力ある超高齢社会を、さまざまな分野の専門家や地域住民とともに共創する力を備えた博士レベルの人材を養成するための、修士博士一貫の大学院プログラムです。活力ある超高齢社会を構想し実現するためには、人間の加齢にともなうさまざまな現象、人口と社会の年齢構成の変化にともなうさまざまな現象とその機序（メカニズム）を理解し、問題を特定し、問題を解決するための方法を考案し、その方法を実現するためのさまざまな物的・社会的要素技術を研究開発し、それら諸要素技術をたくみに組み合わせたシステムをデザインし、それを実社会において試行・改良し、実装・普及させていくことが必要になります。こうした一連の仕事は、さまざまな分野の専門家がチームを組んで分野横断的に取り組む必要がありますし、そもそも高齢社会の問題に取り組むためには、高齢者を含む地域社会で暮らす人々のかかえる多様な問題や要求を深く正確に理解する必要があります。

GLAFSでは、こうした仕事を担える人材が育つよう、各自の専門分野に関する深い研究能力を各自が所属する専攻における学習と研究を通じて育成すると同時に、GLAFS固有の教育プログラムを通じて、高齢社会に関する分野横断的・俯瞰的な最先端の知見を講義やセミナーを通じて修得し、多分野の専門家のチームと地域住民と協働で現実の地域社会の課題の解決・改善に取り組む能力を実践的なフィールド型プロジェクト演習を通じて育成し、多様な高齢者や地域住民と向き合い・ふれあい・真のニーズをつかむ能力を地域医療や介護の現場を体験する実習を通じて開発する、複合的・統合的な教育カリキュラムを提供しています。

本プログラムの、これまでの3年間の実践を通じて、われわれは何をやろうとし、何ができて、何ができなかったのか、われわれは、どこから来て、どこまで行こうとし、今、どこまで来ているのか、そうした道程を振り返り、その情報を関係する学生・教員および学外の関係者の間で共有し、よりよい進め方を検討するために、本冊子を活かしていきたいと思っております。

2016年9月

東京大学高齢社会総合研究機構・機構長 教授

大方潤一郎

1. プログラムについて

1. プログラムの概要

本プログラムの目的

日本は、2030年には人口の1/3が高齢者、1/5が後期高齢者という超高齢社会になることが予想されている。また、韓国やシンガポールも2040年には高齢者人口が1/3を超え、中国も2060年には高齢者人口が1/3に達することが予測される。こうした超高齢社会は世界の歴史に先例のない未知の領域である。高齢化最先進国としての日本には、世界に先駆け、活力ある超高齢社会の姿を構想し実現する責務がある。本プログラムは、高齢者が活力を持って地域社会の中で生活できる期間をより長く、要介護期間や施設収容期間を最小化することを通じて、高齢者自身の生活の質を高め、家族と社会の負担を軽減し、社会全体の活力を維持向上するため、東京大学の高齢社会総合研究機構（IOG）を中核に9研究科29専攻（図1）の総力を結集し、修士博士一貫の大学院教育により、活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダーを養成しようとするものである。

活力ある超高齢化社会を実現するためには、都市や地域での市民生活を支える生活環境基盤の3領域、すなわち、

1. 【い（医）】ケア・サポート・システム：医療・看護・介護・みまもり・保育・子育て・福祉等の統合的システム
2. 【しょく（食・職）】社会的サポート・システム：社会的包摂・社会参加・コミュニティ活動等の促進体制
3. 【じゅう（住）】物的空間的生活環境システム：居住環境・歩行環境・交通環境・街並環境・商業環境・コミュニティ交流施設・オープンスペースや生活支援システム

をリデザインし組み替えていく必要がある。こうした新しい超高齢社会のための社会システムを構想し実現する取り組みを世界各地の現場で主導する、高度な人材を養成することが本プログラムの目的である。



図1：本プログラムの組織
※ IOG：高齢社会総合研究機構

本プログラムの特色

本プログラムでは、本学の1機構9研究科29専攻の教員や連携企業・自治体および海外の大学等のサポートの下で、選り抜かれた大学院生が、

1. 高齢社会問題に関する講義を通じ、高齢社会問題に関する俯瞰的総合的な知識を獲得し
2. 多様な分野の専門家とチームを組んで課題解決に取り組むフィールド・アクション・スタディ演習や、国際的チームワーク力を育成するグローバル演習によって、現実社会における課題解決能力を養い
3. 高齢社会の実態や真のニーズを反映した独創的で質の高い博士研究を成し遂げること通じ、活力ある超高齢社会を共創するための能力

すなわち、

1. 自身の専門分野に関する専門的学術研究能力
2. 高齢社会問題に関する幅広い俯瞰力
3. 多分野の専門家チームを主導して問題解決に取り組む実践的課題解決能力

の3つの能力を兼ね備えた、グローバルなリーダーシップを発揮できる人材を養成する。

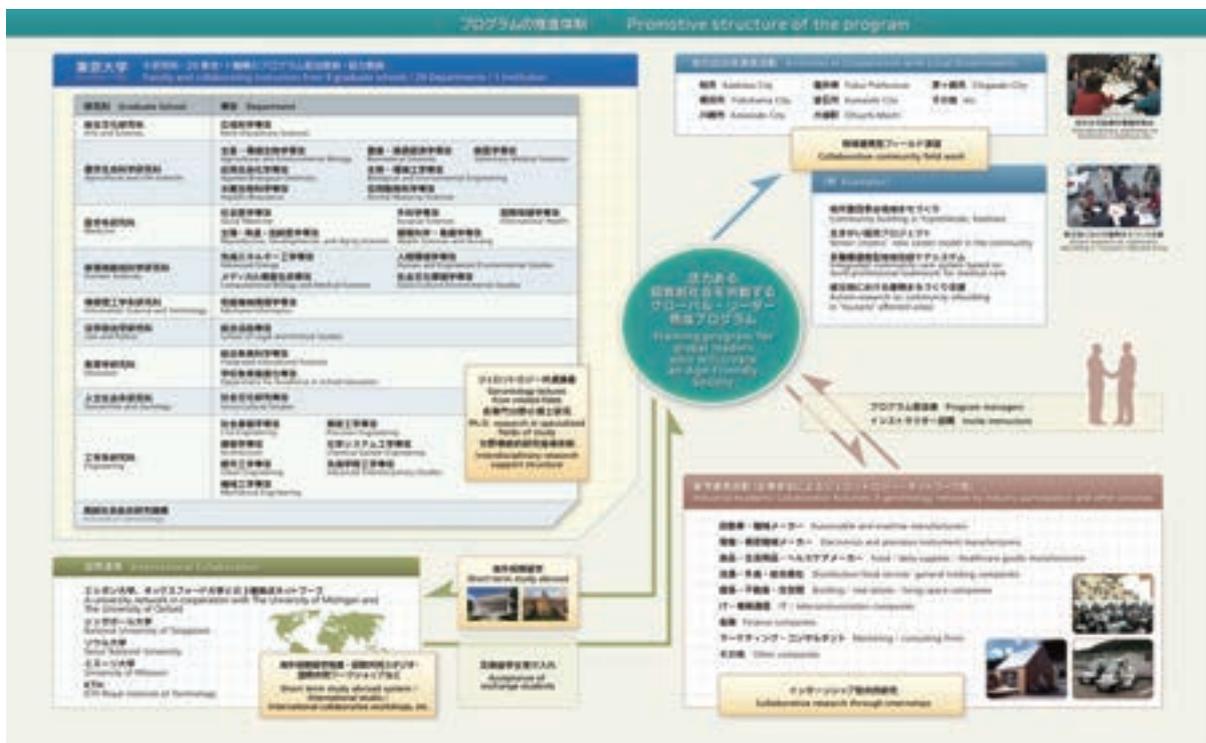


図2：プログラムの特色

2. カリキュラムと修了要件

カリキュラム

本プログラムでは次のような「講義」と「演習」による独自のカリキュラムを組んで、超高齢社

会を共創していくリーダーを育成する。

【俯瞰力を養う高齢社会総合研究学・講義群】

9 研究科・29 専攻・1 機構の教員が連携し、様々な角度から超高齢社会の課題を講義。

■ 高齢社会総合研究学概論 I および II

■ 高齢社会総合研究学特論

高齢社会の社会制度

高齢社会の住まい・まちづくり

高齢社会のケア・サポート・システム

高齢者法

高齢社会の人文学・社会科学

高齢者の食と健康

ジェロンテクノロジー

【分野横断的にアプローチする演習】

■ 実践的課題解決能力を養うフィールド演習

演習指導には企業・行政等の現場の実務家をインストラクターとして招請。

F 演習 1：分野横断的チームを組んで地域社会の現実の課題に取り組むコミュニティ・アクション型（地域連携）

F 演習 2：多様な高齢者や市民に寄り添い心を通わせるケア・システム実習型（対人ケア実習）

F 演習 3：企業・行政等の現場で先端的課題に取り組むインターンシップ型（産学連携）

■ グローバルなリーダーシップを養うグローバル演習

高齢社会総合研究に関する世界トップの教育拠点であるミシガン大学とオックスフォード大学、そして東京大学が連携。

G 演習 1：英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション

G 演習 2：海外短期留学制度（留学生は海外または国内インターンシップ）

G 演習 3：国際共同ワークショップ・スタジオ、外国人特別講義／セミナー

■ 分野横断的研究指導を行うコアセミナー

他分野の教員やインストラクター、学生等による分野横断的なディスカッションの場を通じて学際的な研究指導の体制を確保。

CS1：専攻での専門的研究が、現実の高齢社会問題の解決に資するものとなるよう、視野を広げ、発想を深める研究指導

CS2：様々な現場で活動されている第一人者の方をお招きし、お話を伺い、ディスカッションするケーススタディ

履修要件

本プログラムのコース生は、所属専攻の履修要件を満たすと同時に、本プログラムの提供する科目について20単位（講義10単位・演習10単位）以上、ただし、4年制博士課程に所属するコース生は18単位（講義10単位・演習8単位）以上を、博士後期課程入学時から本プログラムに編入したコース生は16単位（講義10単位・演習6単位）以上を取得し、所属専攻における博士論文の審査に合格し、本プログラム固有の博士論文の審査に合格した場合、「高齢社会総合研究プログラム修了証」が授与されるとともに、所属専攻が授ける博士の学位記に「高齢社会総合研究プログラム修了」という認定が付記される。

なお、博士前期課程（修士課程）において（4年制博士課程においては2年次年度末までに）12単位（講義8単位・演習4単位）以上を取得することが必要とされる。ただし、博士後期課程入学時から本プログラムに参加したコース生は博士後期課程修了時までには16単位（講義10単位・演習6単位）以上を取得するものとする。（2015年度シラバスより）

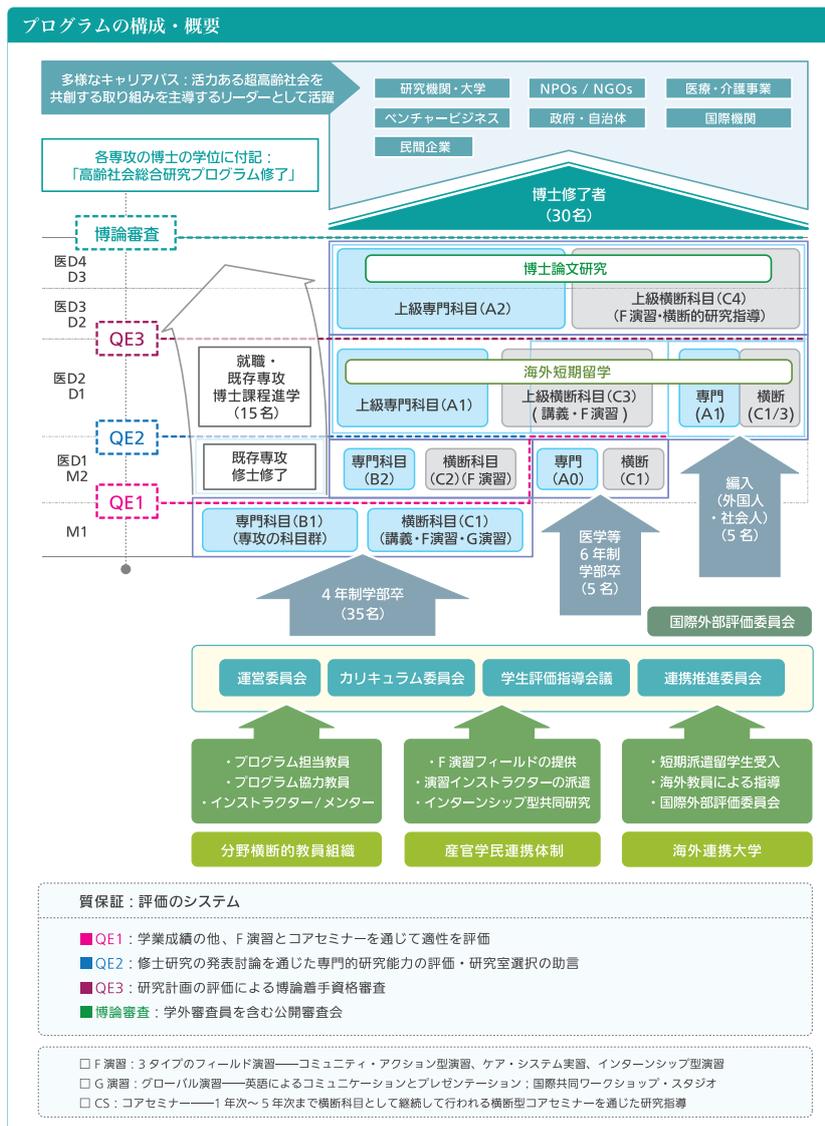


図3：プログラムの枠組み

3. プログラムメンバー構成

プログラム担当教員

氏名	所属（研究科・専攻等）・職名	専門	役割分担
(プログラム責任者)			
原田 昇（～2015.3）	大学院工学系研究科長・教授	都市交通計画	事業総括、居住環境分野担当
光石 衛（2015.4～）	大学院工学系研究科長・教授	医用工学、生産工学	事業総括、プログラムの企画推進調整
(プログラム・コーディネーター)			
大方 潤一郎	大学院工学系研究科都市工学専攻・教授／高 齢社会総合研究機構・機構長	都市計画	プログラムの企画推進調整、運営委員 会委員長、居住環境分野担当
(プログラム担当教員)			
秋山 弘子	高齢社会総合研究機構・特任教授	老年学	社会システム分野担当、カリキュラム編 成担当、国際連携推進担当
辻 哲夫	高齢社会総合研究機構・特任教授	在宅医療、ケア政策、 社会保障政策	ケアシステム分野担当、カリキュラム編 成担当、産官学民連携推進担当
田中 敏明	高齢社会総合研究機構・特任教授（前先端科 学技術研究センター・特任教授）	リハビリテーション科 学、理学療法、福祉 工学	生活サポートシステム分野担当
飯島 勝矢	高齢社会総合研究機構・准教授	老年医学、老年学	ケアシステム分野担当、カリキュラム編 成担当
武川 正吾	大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻・ 教授	福祉社会学	社会システム分野担当
白波瀬 佐和子	大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻・ 教授	社会学	社会システム分野担当
牧野 篤	大学院教育学研究科総合教育科学専攻・教授 ／高齢社会総合研究機構・副機構長	社会教育学、生涯学習 論	社会システム分野担当、カリキュラム編 成担当
東郷 史治	大学院教育学研究科総合教育科学専攻・准教 授	教育生理学	ケアシステム分野担当、プログラム評価 担当
北村 友人	大学院教育学研究科学校教育高度化専攻・准 教授	教育政策、国際教育開 発論	社会システム分野担当、国際連携推進 担当
加藤 淳子	大学院法学政治学研究科総合法政専攻・教授	政治学	社会システム分野担当、国際連携推進 担当
樋口 範雄	大学院法学政治学研究科法曹養成専攻・教授	英米法、医事法、信託 法	社会システム分野担当、国際連携推進 担当
岩村 正彦	大学院法学政治学研究科法曹養成専攻・教授	社会保障法	社会システム分野担当、カリキュラム編 成担当
岩本 康志	大学院経済学研究科現代経済専攻・教授	公共経済学	社会システム分野担当、カリキュラム編 成担当
荒井 良雄	大学院総合文化研究科広域科学専攻・教授	人文地理学	社会システム分野担当、フィールド演習 企画担当
原田昇（2015.4 プログラム 責任者交替）	大学院工学系研究科都市工学専攻・教授	都市交通計画	居住環境分野担当
羽藤 英二	大学院工学系研究科社会基盤学専攻・教授	都市計画・交通計画	居住環境分野担当
大月 敏雄	大学院工学系研究科建築学専攻・教授	建築計画	居住環境分野担当、カリキュラム編成 担当

中尾 政之	大学院工学系研究科機械工学専攻・教授	生産技術、ナノ転写、失敗学	生活サポートシステム分野担当、産官学民連携推進担当
浅間 一	大学院工学系研究科精密工学専攻・教授	ロボット工学	生活サポートシステム分野担当
大久保 達也	大学院工学系研究科化学システム工学専攻・教授／総括プロジェクト機構プラチナ社会総括寄付講座・教授（兼務）	プラチナ社会、化学工学、ナノ材料	生活サポートシステム分野担当
巖淵 守（2015.4～）	先端科学技術研究センター・准教授	支援工学	生活サポートシステム分野担当
安永 円理子	大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構・准教授（同研究科生物・環境工学専攻兼任／生産・環境生物学専攻兼任）	ポストハーベスト工学	食分野担当
阿部 啓子	大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻・特任教授	食品科学、味覚科学、遺伝子科学	食分野担当、産官学民連携推進担当
佐藤 隆一郎	大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻・教授	食品生化学	食分野担当、プログラム自己評価・外部評価担当
潮 秀樹	大学院農学生命科学研究科水圏生物科学専攻・教授	水産化学・食品科学	食分野担当
中嶋 康博	大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻・教授	農業経済学、フードシステム論	食分野担当
関崎 勉	大学院農学生命科学研究科食の安全研究センター長・教授（同研究科応用動物科学専攻兼任、獣医学専攻兼任）	獣医細菌学、食品病原微生物学	食分野担当
橋本 英樹	大学院医学系研究科社会医学専攻・教授	医療経済学、社会学	ケアシステム分野担当、社会システム分野担当、フィールド演習企画担当
秋下 雅弘	大学院医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻・教授／高齢社会総合研究機構・副機構長	老年医学	ケアシステム分野担当、カリキュラム編成担当
小川 純人	大学院医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻・准教授	老年医学	ケアシステム分野担当
本間 之夫	大学院医学系研究科外科学専攻・教授	泌尿器外科学	ケアシステム分野担当
芳賀 信彦	大学院医学系研究科外科学専攻・教授	リハビリテーション医学	ケアシステム分野担当
神馬 征峰（2015.4～）	大学院医学系研究科国際保健学専攻・教授	国際保健・ヘルスプロモーション	ケアシステム分野担当
永田 智子	大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻・准教授	地域看護学	ケアシステム分野担当
森 武俊	大学院医学系研究科ライフサポート技術開発学（モルテン）寄附講座・特任教授	看護工学	ケアシステム分野担当、生活サポートシステム分野担当
堀 洋一	大学院新領域創成科学研究科先端エネルギー工学専攻・教授	電気工学、制御工学	生活サポートシステム分野担当
菅野 純夫	大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻・教授	ゲノム医科学	ケアシステム分野担当
加藤 直也	医科学研究所先端ゲノム医学分野・准教授／大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻・兼任	消化器内科学	ケアシステム分野担当、フィールド演習企画運営担当
鎌田 実	大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻・教授	生活支援工学	プログラムコーディネーター補佐、生活サポートシステム分野担当、産官学民連携推進担当
飛原 英治	大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻・教授	熱工学、冷凍空調工学	生活サポートシステム分野担当
大野 秀敏（～2015.3）	大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・教授	居住環境設計学	居住環境分野担当
岡部 明子（2015.4～）	大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・教授	建築環境教育	居住環境分野担当
檜山 敦	大学院情報理工学系研究科知能機械情報学専攻・特任講師	ヒューマンインターフェイス	生活サポートシステム担当

*職名は2015年度末現在

学外プログラム担当者

氏名	所属 (研究科・専攻等)・職名	専門	役割分担
Toni Claudette Antonucci	ミシガン大学・副学長 (Associate Vice President for Research, Social Sciences and the Humanities)	ジェロントロジー	国際連携アドバイザー
David English	ミズーリ大学法科大学院・教授	高齢者法	国際連携アドバイザー
Sarah Harper	Director, Oxford Institute of Population Ageing / Professor of Gerontology and Senior Research Fellow, Nuffield College, Oxford University	ソーシャルジェロントロジー	国際連携推進担当
Gyounghae Han	Professor, Division of Consumer Studies and Child and Family Studies, College of Human Ecology, Seoul National University	Family Study	国際連携推進担当
Angelique Chan	Associate Professor, Department of Sociology, National University of Singapore and Duke-NUS Graduate Medical School	社会学	国際連携推進担当
大内 尉義	国家公務員共済組合連合会・虎の門病院・院長／東京大学・名誉教授	老年医学、老年学	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
永田 久美子	社会福祉法人浴風会認知症介護研究・研修東京センター・研究部部長	認知症ケア、当事者ネットワーク	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
太田 秀樹	医療法人アスミス・理事長	高齢者・障害者医療	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
秋山 正子	(株)ケアーズ 白十字訪問看護ステーション・統括所長	地域看護、在宅医療連携	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
小山 剛 (~2015.3)	社会福祉法人長岡福祉協会・理事・評議員・執行役員・こぶし園総合施設長	高齢者ケア、地域包括ケアシステム	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
木村 昌平	一般社団法人日本家庭教育協会・会長／益子昌平塾・塾長／セコム株式会社・前会長	社会の安全安心の確保	産官学民連携アドバイザー
野呂 順一	(株)ニッセイ基礎研究所・代表取締役社長	保険数理、年金数理、経済統計	産官学民連携アドバイザー
濱 隆	大和ハウス工業(株)・取締役常務執行役員／環境エネルギー事業担当	高齢者住宅開発、スマートコミュニティ開発	産官学民連携アドバイザー
小林 仁 (~2015.3)	(株)ベネッセホールディングス・取締役／(株)ベネッセスタイルケア・代表取締役社長	介護事業の経営	産官学民連携アドバイザー
滝山 真也 (2015.4~)	(株)ベネッセホールディングス・執行役員／(株)ベネッセスタイルケア・代表取締役社長	介護事業等のグループ経営	産官学民連携アドバイザー
関根 千佳	(株)ユーディット・会長兼シニアフェロー／同志社大学政策学部・大学院総合政策科学研究科・教授	ユニバーサルデザイン	産官学民連携アドバイザー
大熊 由紀子	国際医療福祉大学大学院・教授	医療福祉ジャーナリズム	産官学民連携アドバイザー
南 砂	(株)読売新聞東京本社・取締役調査研究本部長	医療・医学、科学技術政策、メディア論	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
河出 卓郎	(株)毎日新聞東京本社・企画編集室／東京都健康長寿医療センター・非常勤研究員	社会保障論	産官学民連携アドバイザー
John Creighton Campbell	ミシガン大学・名誉教授／高齢社会総合研究機構・客員研究員	ジェロントロジー	国際連携推進アドバイザー
宮島 俊彦	岡山大学・客員教授／日本介護経営学会・理事	高齢者ケアシステム	産官学民連携アドバイザー

*職名は 2015 年度 4 月 1 日現在

特任講師・特任助教

氏名	所属（研究科・専攻等）・職名	専門
菅原育子（2015.6～）	高齢社会総合研究機構・特任講師	社会心理学、社会老年学
村山洋史（2015.4～）	高齢社会総合研究機構・特任講師	社会疫学、公衆衛生学、老年学
後藤純	高齢社会総合研究機構・特任助教（～2015.3）、特任講師（2015.4～）	都市計画、まちづくり、地域包括ケアシステム、総合老年学
木全真理	高齢社会総合研究機構・特任助教	在宅看護
堤可奈子	高齢社会総合研究機構・特任助教	都市計画、まちづくり
三浦貴大	高齢社会総合研究機構・特任助教	福祉工学、ヒューマンインターフェース、アクセシビリティ、音響工学
荻野亮吾	高齢社会総合研究機構・特任助教	社会教育、生涯学習
孫輔卿	高齢社会総合研究機構・特任助教	老年医学
室山良介	高齢社会総合研究機構・特任助教	消化器内科学
御子柴直子	高齢社会総合研究機構・特任助教	がん看護、緩和ケア
晁丁丁（～2015.3）	高齢社会総合研究機構・特任助教	システム科学
福井康貴	高齢社会総合研究機構・特任助教	社会学
西上治（～2015.3）	高齢社会総合研究機構・特任助教	行政法
朴孝淑	高齢社会総合研究機構・特任助教	労働法
畑中綾子（～2015.3）	高齢社会総合研究機構・特任助教	民法・医事法
西野亜希子	高齢社会総合研究機構・特任助教	建築計画、住宅改修
橋詰力	高齢社会総合研究機構・特任助教	分子生物学、栄養学

*職名は2015年度末現在

4. 履修生に対する経済的支援

奨学金制度

優秀な学生が経済的な理由から博士課程への進学を断念することのないよう、学生の希望と能力に応じ奨励金を支給する制度が用意されている。2014年度、2015年度は、博士前期課程（博士課程）2年次のコース生には、概ね授業料に相当する額、博士後期課程のコース生には、学業成績等に応じ月額20万円を上限とした額と定めた。

留学制度

原則として全学生を第3年次（医学系等4年生博士課程にあっては第2年次）の夏休み（8月）から冬学期の間、6ヶ月以内の海外短期留学で派遣し、その旅費を支給することとした。以下がその概略である。

■ミシガン大学：1学年30人の博士後期課程学生のうち20人がミシガン大学においてジェロントロジー・コースを1学期間履修することを想定。本プログラムの海外連絡オフィスを開設し、スタッフを常駐。

■ミズーリ大学：主に高齢社会問題について法学分野の研究を遂行する学生を想定。

■オックスフォード大学：海外企業等でのインターンシップ型留学や、自身の専門分野に強い大学への留学を希望する学生については、予備的留学先としてジェロントロジー・サマースクールに派遣。

■アジア地域における高齢社会問題を研究したい学生のためにはシンガポール大学、ソウル大学等と連携。

■その他：上記に限らず学生は、博士研究のテーマに適した留学先への留学が可能。

*海外短期留学には、大学への留学だけではなく、海外の企業等におけるインターンシップ型留学を含む。

5. 応募状況と合格者数

各年度の応募状況と合格者数は以下の表の通りであった。

	平成 26 年度	平成 27 年度	
プログラム募集定員数 (実数)	35 人	35 人	
① 応募学生数	38 人	34 人	
	うち留学生数	4 人	5 人
	うち自大学出身者数	18 人 (0 人)	16 人 (0 人)
	うち他大学出身者数	20 人 (4 人)	18 人 (5 人)
	うち社会人学生数	10 人 (0 人)	8 人 (2 人)
	うち女性数	19 人 (3 人)	13 人 (2 人)
② 合格者数	36 人	32 人	
	うち留学生数	4 人	4 人
	うち自大学出身者数	17 人 (0 人)	15 人 (0 人)
	うち他大学出身者数	19 人 (4 人)	17 人 (4 人)
	うち社会人学生数	10 人 (0 人)	8 人 (1 人)
	うち女性数	19 人 (3 人)	12 人 (1 人)
③ ②のうち受講学生数	27 人	28 人	
	うち留学生数	4 人	4 人
	うち自大学出身者数	9 人 (0 人)	13 人 (0 人)
	うち他大学出身者数	18 人 (4 人)	15 人 (4 人)
	うち社会人学生数	10 人 (0 人)	8 人 (1 人)
	うち女性数	16 人 (3 人)	12 人 (1 人)
プログラム合格倍率 (①応募学生数 / ②合格者数) (小数点第三位を四捨五入)	1.06 倍	1.06 倍	
充足率 (合格者数 / 募集定員)	103.00%	91.00%	
【備考】 ※編入学生： 平成 26 年度：博士後期課程 1 年次に編入学 11 名 平成 27 年度：博士後期課程 1 年次に編入学 12 名 ※ () は留学生の人数 ※各年度 3 月 31 日現在			

2. 2013 年度-2014 年度 教育活動

1. 講義群

2014年度には以下のような必修・選択必修のほか、20の選択講義が行われた。

■ 高齢社会総合研究学概論 I（高齢者の体と心：老いとつきあう）

わが国では、団塊世代の高齢化と出生率の低下により、2030年には65歳以上の高齢者が人口の約1/3を占め、75歳以上の「後期高齢者」も倍増して人口の約1/5を占める超高齢社会が到来する。また、韓国、シンガポールも、日本にやや遅れて2040年には高齢者人口が1/3を超え、中国でも2060年には高齢者人口が約1/3に達することが予測されている。こうした急激な人口構成の変化に対応し、医療、介護、社会保障、居住環境、社会的インフラ、就業形態をはじめとした社会システムを組み替える必要性が目前に迫っている。この社会全体の変化を見通し、超高齢社会にむけて社会システムをリ・デザインする取り組みを直ちに開始し、若い人、現役世代、高齢者の誰もが、人間としての尊厳と生きる喜びを享受しながら快活に生きて行ける、活力ある超高齢社会の実現に向けて挑戦していかなければならない。

本授業ではこれら課題に対して、主として高齢者の体と心について、国内のトップ講師からの講義を受け、老いとつき合うとはどういうことであるのか、その基礎を分野横断的に学ぶことが狙いである。本講義を通じて、高齢者の健康寿命を延ばし、経済活動・地域活動への参加を促すことによって高齢者が快活に暮らし、社会の支え手となって活躍する活力ある超高齢社会について考えていく。

【授業日程】

- 4/16 第1回 ジェロントロジー：長寿社会を支える学際科学（秋山弘子：高齢社会総合研究機構特任教授）
ガイダンス（大方潤一郎：高齢社会総合研究機構機構長・工学系研究科教授）
- 4/23 第2回 おひとりさまの老後（上野千鶴子：東京大学名誉教授）
- 4/30 第3回 高齢者と生涯学習（牧野篤：教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
- 5/7 第4回 疾病・障害とヘルスプロモーション（秋下雅弘：医学系研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
- 5/14 第5回 身体機能を補う福祉工学機器（伊福部達：東京大学名誉教授・高齢社会総合研究機構特任研究員）
- 5/21 第6回 栄養とエイジング（阿部啓子：東京大学名誉教授・農学生命科学研究科特任教授）
- 5/28 第7回 総合討議（教員と学生のディスカッション）
- 6/4 第8回 次世代高齢者の価値観とライフスタイル（斎藤徹：(株)電通）

- 6/11 第9回 高齢者と看護学(山本則子：医学系研究科健康科教授)
- 6/18 第10回 高齢期の社会関係(小林江里香：東京都健康長寿医療センター研究所主任研究員)
- 6/25 第11回 高齢化の人口学(白波瀬佐和子：人文社会系研究科教授)
- 7/2 第12回 知的機能の変化と適応(高山緑：慶応義塾大学教授)
- 7/9 第13回 死をめぐる諸問題(清水哲郎：人文社会系研究科特任教授)
- 7/16 第14回 総合討議：教員と学生のディスカッション

■ 高齢社会総合研究学概論Ⅱ(高齢社会のリ・デザイン)

本授業では超高齢社会の課題に対して、主として社会システムおよび、それを支える居住環境システムについて、国内のトップ講師からの講義を受け、高齢社会のリ・デザインについて分野横断的に学ぶことが狙いである。本講義を通じて活動レベルが低下して介助が必要になった後も、施設収容により対応するのではなく、住み慣れた地域社会の中で、できるだけ自立的に活力を維持しながら暮らせる社会システム及び居住環境システムについて考える。

【授業日程】

- 10/1 第1回 生涯現役社会をめざして(横石知二：(株)いろどり代表取締役社長)
ガイダンス(大方潤一郎：高齢社会総合研究機構機構長・工学系研究科教授)
- 10/8 第2回 シニア社会を支える担い手づくり(牧野篤：教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長)
- 10/22 第3回 身体・認知機能を活かしたコミュニティビジネス(戸枝陽基：全国地域生活支援ネットワーク代表)
- 10/29 第4回 人口減少社会における年金と社会保障財政(岩本康志：経済学研究科教授)
- 11/5 第5回 年齢に基づく雇用システムと高齢者雇用(濱口桂一郎：労働政策研究・研修機構統括研究員)
- 11/12 第6回 超高齢社会の都市計画・まちづくり(大方潤一郎：高齢社会総合研究機構機構長・工学系研究科教授)
- 11/19 第7回 総合討議：教員と学生とのディスカッション
- 11/26 第8回 高齢期の住まい方(大月敏雄：工学系研究科教授)
- 12/3 第9回 高齢者の移動を支える(鎌田実：新領域創成科学研究科教授)
- 12/10 第10回 高齢者と法：自己決定と本人保護(樋口範雄：法学政治学研究科教授)
- 12/17 第11回 超高齢社会のソーシャルワーク(柴田範子：NPO 法人「楽」理事長)
- 1/7 第12回 21世紀の医療・介護・福祉のかたちを考える(辻哲夫：高齢社会総合研究機構特任教授)
- 1/14 第13回 シニア×ICT(廣瀬通孝：情報理工学系研究科教授)
- 1/21 第14回 総合討議：教員と学生とのディスカッション

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅱ（超高齢社会の住まい・まちづくり）

超高齢社会の諸課題に対応した地域社会の物的・社会的な生活環境について、多面的に講義を行う。

【授業日程】

- 4/8 第1回 高齢社会対応の都市空間とは（大方潤一郎：高齢社会総合研究機構機構長・工学系研究科教授）
超高齢社会の住まい・まちづくり（後藤純：高齢社会総合研究機構特任助教）
超高齢社会における高齢者の住まい（廣瀬雄一：高齢社会総合研究機構特任研究員）
- 4/15 第2回 高齢者の住まい（西野亜希子：高齢社会総合研究機構特任助教）
高齢者関係市民活動等の事例検討（堤可奈子：高齢社会総合研究機構特任助教）
- 4/22 第3回 高齢者転倒予防講座、立位バランス・歩行支援機器開発、高齢者・障害者の姿勢制御に関するトレーニング方法の研究について（田中敏明：先端科学技術研究センター特任教授）
転倒経験者と非経験者の歩き方の違いとその知見に基づく転倒リスク評価装置の開発および転倒の実態解明を目指した異常検出技術に関する研究（小林吉之：（独）産業技術総合研究所）
階段での転倒事故（古瀬敏：静岡文化芸術大学名誉教授）
建築日常災害の話（直井英雄：東京理科大学名誉教授）
- 5/13 第4回 バリアフリーのまちづくりと先進的事例（高橋儀平：東洋大学ライフデザイン学部人間環境デザイン学科教授）
住宅改修（西野亜希子：高齢社会総合研究機構特任助教）
バリアフリー・ユニバーサルデザインのすまいまちづくり（大月敏雄：工学系研究科教授）
- 5/20 第5回 地域循環居住（大月敏雄：工学系研究科教授）
住宅地における地域年齢構造の推計と制御に関する研究（李鎔根：横浜国立大学研究員）
- 5/27 第6回 近居のひろがりが必要とされる住宅供給のあり方（軽部徹：工学系研究科博士課程）
空き家再生から始まるまちのリノベーション（片岡八重子：ココロエー級建築士事務所）
- 6/3 第7回 インフラの長寿命化社会における廃棄物処理の多様化（北垣亮馬：工学系研究科講師）
- 6/10 第8回 世帯構成を考慮した交通行動特性の把握とそれに基づく将来交通需要の推計／Mobility Design for Age Friendly Society（原田昇：東京大学副学長・工学系研究科教授）
高齢社会の交通計画（大森宣暁：工学系研究科准教授）

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅳ（高齢社会のケア・サポート・システム）

本科目では、超高齢社会で要介護状態になっても住み慣れた地域で住み続けられるシステムを構築していくため、高齢者の特性や生活を理解し、体系的に高齢社会における高齢者へのケア・サポート・システムを学ぶ。

本講義は高齢者の医学的な特徴、その特徴を踏まえたケア・サポート、そして高齢者を支える医療・介護を中心とした社会システムについて、最新の知識や技術を理解し、実社会に役立つ手法を考える。

【授業日程】

- | | | |
|------|---------|---|
| 5/8 | 第1回 | 老化のプロセス：生理的老化と病的老化（大田秀隆：医学系研究科特任講師） |
| | 第2回 | 高齢者に特有の病態1：転倒・骨折とサルコペニア（小川純人：医学系研究科准教授） |
| 5/15 | 第3回 | 高齢者に特有の病態2：認知症（亀山祐美：医学系研究科助教） |
| | 第4回 | 高齢者に対する医療提供の考え方：生活習慣病管理から終末期医療まで（小島太郎：医学系研究科助教） |
| 5/22 | 第5回 | 高齢者と家族（永田智子：医学系研究科准教授） |
| | 第6回 | 高齢者へのケア1：退院支援と意思決定支援（永田智子：医学系研究科准教授） |
| 5/29 | 第7・8回 | 高齢者へのケア2：ケアマネジメントと介護予防（成瀬昂：医学系研究科助教） |
| 6/5 | 第9・10回 | 高齢社会の社会保障制度（岩村正彦：法学政治学研究科教授） |
| 6/19 | 第11・12回 | 超高齢社会の地域包括ケアシステム（辻哲夫：高齢社会総合研究機構特任教授） |

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅵ（高齢者法）

すべてではなくとも、現場や実務を知るゲストを招いて、下記のようなテーマで、まず問題状況の把握と、法がどのような役割を果たせるかを考える。

【授業日程】

- | | | |
|-------|-----|---|
| 10/6 | 第1回 | 高齢者法の概要と倫理的配慮（島崎謙治：政策研究大学院大学教授） |
| 10/20 | 第2回 | 医療上の決定（会田薫子：人文社会系研究科特任准教授） |
| 10/27 | 第3回 | 在宅での医療（伊藤雅治：社全国訪問看護事業協会理事長） |
| 11/10 | 第4回 | 高齢者への医療給付制度・介護保険制度など（辻哲夫：高齢社会総合研究機構教授） |
| 11/17 | 第5回 | 高齢者の住まい、特養・療養施設など（小野太一：国立社会保障・人口問題研究所政策研究調査官） |
| 12/1 | 第6回 | 高齢者の住宅問題（中田裕人：国土交通省住宅局安心居住推進課） |
| 12/8 | 第7回 | 成年後見と成年後見に代わる制度（牛嶋勉：弁護士） |

- 12/15 第8回 財産管理と信託・相続（早坂文高：三井住友信託銀行(株)法務部）
 12/22 第9回 年金（中嶋邦夫：(株)ニッセイ基礎研究所）
 1/5 第10回 高齢者と職業・社会参加（小野太一：国立社会保障・人口問題研究所）
 1/19 第11回 情報化の進展と高齢者（檜山敦：情報理工学系研究科講師）
 1/26 第12回 高齢者と移動 交通（鎌田実：新領域創成科学研究科教授）
 1/27 第13回 高齢者虐待・高齢者と犯罪（野崎薫子：弁護士）

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅷ（高齢社会の人文学・社会科学）

高齢社会・超高齢社会における人口構造、社会構造、社会政策、ライフコース、生涯学習などについて、人文学および社会科学的なアプローチにより、活力ある超高齢社会を研究するうえでの基本的な知識を得ることを目標とする。

【授業日程】

- 10/1 第1回 長寿社会に生きる（秋山弘子：高齢社会総合研究機構特任教授）
 10/8 第2回 高齢化の仕組み：人口学的アプローチ（白波瀬佐和子：人文社会系研究科）
 10/15 第3回 人口高齢化の国際比較：経済格差に注目して（白波瀬佐和子：人文社会系研究科教授）
 10/22 第4回 高齢社会の家族と社会保障制度（白波瀬佐和子：人文社会系研究科教授）
 10/29 第5回 シンポジウム
 11/5 第6回 生涯学習が課題化される社会：高齢社会と生涯学習（牧野篤：教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
 11/12 第7回 地域コミュニティと生涯学習：高齢社会の「学習」的基礎（牧野篤：教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
 11/19 第8回 セカンドライフの人生設計（秋山弘子：高齢社会総合研究機構特任教授）
 11/26 第9回 超高齢社会の社会政策①：年金と医療（武川正吾：人文社会系研究科教授）
 12/3 第10回 超高齢社会の社会政策②：介護（武川正吾：人文社会系研究科教授）
 12/10 第11回 超高齢社会の社会政策③：地域福祉（武川正吾：人文社会系研究科教授）
 1/7 第12回 ケアの現象学（榊原哲也：人文社会系研究科教授）
 1/14 第13回 臨床心理学の視点（高橋美保：教育学研究科准教授）
 1/21 第14回 高齢者に対する人生の最終段階のケア（清水哲郎：人文社会系研究科特任教授）
 1/28 第15回 まとめ

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅸ（高齢者の食と健康〈維持〉）

超高齢化を目前にして、いつまでも自立して自分らしく生きる為に、より早期からの健康維持～虚弱予防が重要な鍵となる。そこには本人自身の意識変容・行動変容と良好な社会環境の実現の両面が必要であり、高齢者の様々なプロダクティビティの増進が期待される。そこで、本講義では虚

弱（フレイル：Frailty）の最たる要因である加齢性筋肉減少症（サルコペニア）を予防する為に、『食』を中心に据えた高齢期に置ける早期からの健康維持を包括的な視点から、その予防対策に関する最新知識を学ぶ。

【授業日程】

- 10/23 第1回 筋肉減弱症（サルコペニア）を中心に考える虚弱化とは：高齢者の食力の評価、そしてその維持・向上に向けて（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構准教授）
- 10/30 第2回 栄養—運動—口腔管理の三位一体が織りなす包括的介護予防とは（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構准教授）
- 11/6 第3回 生活習慣病予防のための食生活、そして虚弱予防のための食生活（潮秀樹：農学生命科学研究科教授、小林久峰：味の素株）
- 11/13 第4回 栄養成分と体組成①（潮秀樹：農学生命科学研究科教授、古泉雄史：株ニチレイ）
- 11/20 第5回 食品の機能性と高齢者に向けての食育：食生活と健康（佐藤隆一郎：農学生命科学研究科教授、Gerard Vinyes Pares：ネスレ日本株、小野昭宣：ハウス食品株）
- 11/27 第6回 栄養成分と体組成②（佐藤隆一郎：農学生命科学研究科教授、高宮満：キューピー株、福井篤子：株龍角散）

■ 高齢社会総合研究学特論X（ジェロンテクノロジー）

ジェロンテクノロジー（Gerontechnology）とは、高齢者を支援するためのシステムを扱う研究分野である。本科目では、高齢者の生活や社会活動などを支援するための情報・機械システムについて、オムニバス形式で講義を行う。本講義の内容は次の通りである。

- ・衰えた運動器・感覚器の機能補助を行うための運動支援・認知機能支援システム
- ・日進月歩での発展が著しい情報機器を用いた支援手法と、それら機器の使用の支援手法
- ・高齢者就労など社会的課題に対応するための仕組みとシステム

【授業日程】

- 10/17 第1回 高齢者就労における ICT の役割（廣瀬通孝：情報理工学研究科教授、檜山敦：情報理工学研究科特任講師）
- 10/24 第2回 感覚・コミュニケーションを支援する福祉工学（伊福部達：東京大学名誉教授・高齢社会総合研究機構特任研究員）
高齢者のための認知神経科学（上田一貴：工学系研究科特任講師）
- 10/31 第3回 高齢者を支援するシステム（鎌田実：新領域創成科学研究科教授、二瓶美里：新領域創成科学研究所講師）
(1) 高齢者にやさしい自動車
(2) 認知症高齢者への情報支援
- 11/7 第4回 高齢者の生体・行動モニタリング（森武俊：医学系研究科特任准教授）

人間親和型モーションコントロール～パワーアシスト車椅子への応用～（堀洋一：新領域創成科学研究科教授）

11/28 第5回 ①アクティブシニアの活動を支える ICT のユニバーサルデザイン

②人生を変えるジェロントロジー（関根千佳：(株)ユーディット会長兼シニアフェロー・同志社大学政策学部教授）

12/5 第6回 身体の運動と認知における脳機能のモデリングとリハビリ応用（浅間一：工学系研究科教授）

2. 演習

高齢社会総合研究学演習は本プログラムの中核をなす必修科目である。本演習は通年で以下のよう
に実施された。

フィールド演習

■ フィールド演習 1（コミュニティ・アクション型）

グループ共同研究

コミュニティ・アクション型のグループ共同研究では、テーマごとに分野横断的チームが生まれ、実際に現場に出かけフィールドワークを行った。異なったバックグラウンドの学生がチームを組んで課題に取り組むことにより、他の専門分野の知識や、ものの見方を肌で知り、フィールドに出て人と接することで、実社会の真のニーズを理解し、多様な分野の専門家チームを率いることができる課題解決能力を身に着けるのが目的である。2014年度には次のような6グループが研究活動を行った。

共同研究 1「高齢者の終末期にむけた意思決定支援方法の検討」グループ

近年、高齢者が認知能力や身体能力が低下し、十分なコミュニケーションが取れなくなる前に高齢者本人の価値観や意思を明示しておく事前指示書（Advance directive）を作成しておくことが推奨される。事前指示書の普及に向け、高齢者に必要な支援について検討することを目的とする。

共同研究 2「在宅介護で暮らし続けられる条件の検討」グループ

特養待機者や入居者の調査データの2次分析を通じ、在宅介護の条件を探り、他の施設入居者へのインタビューを実施する。

共同研究 3「住み続けられる住居の研究」グループ

事故（転倒骨折・脳卒中発作など）で寝たきりにならない住宅、障がいを負っても自立的に暮らせる住宅・

地域環境をデザインする。

共同研究4「コミュニティ活動のファシリテーション」グループ

複数のコミュニティ活動への支援とフィードバックから、より良いコミュニティ形成のツールを開発する。

共同研究5「都市部における高齢期の農ある暮らしに関する共同研究」グループ

農ある暮らしに関心のたかい高齢者のライフスタイルやニーズを的確に把握することで、少子高齢化によってより深刻になる都市の空地問題や農村の耕作放棄地問題の有機的な解決に結びつけること。



聞き取り調査をする「都市部における高齢期の農ある暮らしに関する共同研究」グループのメンバー

共同研究6「高齢者の食と栄養の研究」グループ

人生の最後まで“その人らしい人生を送る”サポートをするため、人間が生きる根本である「食と栄養」に着目。高齢者の食と栄養について多様な視点（高齢者、介護者、医師、看護師、歯科医師等）を織り交ぜて網羅的に調査し、高齢者が好きなものを、介護者に負担無く提供できる手段を提唱すること。

また、これら共同研究の他にも東京のベッドタウンから東日本大震災の被災地まで、様々なフィールドで多様な住民と触れあうことができる場を提供した。

岩手県大槌町フィールド演習

2014年度は全3回にわたって東日本大震災で被災した岩手県上閉伊郡大槌町、及び釜石市平田地区の仮設住宅団地で調査活動を行った。演習の狙いは、コミュニティの居住環境が高齢者にとって暮らしやすいものとなっているか、地域の現状・課題を特定し多角的に分析することにある。本演習では、住民とともにコミュニティ住環境点検マップを作成し、今後地元自治組織として積極的に取り組めるテーマを発見し、そのための取り組みを検討することとした。

3回の演習は、全7カ所の仮設住宅団地にて、いずれも同じプログラムで実施した。

〈参加人数〉

第1回演習（柵内・小槌）：10名（GLAFS学生）、7名（GLAFS/IOGスタッフ他）

第2回演習（褔岩・安渡）：4名（GLAFS学生）、14名（GLAFS/IOGスタッフ他）

第3回演習（中村・和野・釜石平田）：3名（GLAFS学生）、10名（GLAFS/IOGスタッフ他）

〈演習の様子〉

8月22日～23日、29日～31日、9月5日～7日の8日間の日程で、震災以降、同地域で研究活動を継続してきたチームに同行し、本プログラムから29名（特任助教8名、特任研究員等5名、修士課程大学院生11名、博士課程大学院生4名、聴講生1名）が参加。高齢者をはじめとした住民と積極的に触れ合いながら、暮らしの課題等について共に考える機会とした。

演習スケジュール

8月22日	征内（大槌仮設団地）
8月23日	小槌（小槌第4仮設団地）
8月30日	袈岩（大槌第9仮設団地）
8月31日	安渡地域
9月5日	中村（小槌第12仮設団地）
9月6日	和野（大槌第5仮設団地）
9月7日	釜石・平田地区コミュニティケア型仮設住宅団地（平田第6仮設団地）

演習の内容

移動！暮らし保健室



高齢者の関心の高い健康をテーマに、血圧測定やストレスチェック、体組成計測などの簡単な健康チェックを行った

住環境点検



フォーカスグループインタビューを行い、団地の暮らしやすさ、暮らしにくさをチェック。この3年間で変わったことや困っていることなどについて、住民の皆さんと話し合った

発表会兼懇談会



住環境点検の結果を踏まえて、住民自身でできることなどを話し合った



スケジュールの合間にも高齢者の皆さんと会話したり、グループインタビューの結果をまとめたりと、積極的に演習に取り組んだ



柏市豊四季台団地フィールド演習：一人暮らし高齢者対象「懇談と昼食会」

柏市豊四季台団地の一人暮らし高齢者のための昼食会（「懇談と昼食会」豊四季台地区社会福祉協議会主催）が10月13日に行われた。毎年200名ほどの住民が参加するこのイベントで、本プログラムの学生及び教員、産学ネットワーク「ジェロントロジー」のメンバーなど総勢50名がスタッフとして活動。高齢者の考え方や接し方を学び、また暮らしの実態や課題への認識を深めるための演習とした。

〈演習の目的〉

本演習は、柏市豊四季台地域において地元地区社会福祉協議会・民生員が定例主催するイベント運営へ参加するものである。演習の狙いは、実際に高齢者と接し、高齢者との対話の中から暮らしの状況や課題、ニーズを把握する手法やコミュニケーション方法を学ぶことにある。また地域のイベントを地元関係主体と連携実施することで、地域活動団体に対する理解を深めると同時にイベント運営手法を実践的に学ぶ。

〈参加人数〉

20名（GLAFS学生）、21名（GLAFS/IOGスタッフ）



会場の様子

■ フィールド演習 2 (ケア・システム実習型)

診療・介護・看護を受けながら地域で生活する高齢者の実態や、診療・看護・介護といった多職種の実態を把握するための実習を行った。コース生は高齢者ケアセンターなどの施設を見学するだけでなく、訪問診療・訪問看護・訪問介護にも多専攻のコース生がグループとなって同行した。

〈実習の目的〉

1. 介護・看護・診療を受けながら地域で生活する高齢者とその家族の生活状況を理解すること。
2. 介護・看護・診療を受けながら地域で生活する高齢者を支援する多職種の役割や法制度・システム（地域づくり）の意義を理解すること。

〈実習の目標〉

1. 介護・看護・診療を受けながら地域で生活する高齢者の健康状態とその環境を知る。

介護・看護・診療を受けながら地域で生活する高齢者の（1）健康上の問題や環境を知り、（2）家族の健康や生活を考え、（3）支援の必要性を考える。

2. 地域で生活する高齢者に行う介護・看護・診療の実際を知る。

地域で生活する高齢者に行う介護・看護・診療の（1）実践を知り、（2）留意点を学び、（3）果たしている役割を考える。

3. 地域で生活する高齢者に提供する介護・看護・診療のシステムや連携を考える。

介護・看護・診療の（1）機能を考え、（2）連携や各職種の役割を知る。

〈実習先と日程〉

2015年1月	
地域密着型介護老人福祉施設、小規模多機能型居宅介護など「社会福祉法人長岡福祉協会（長岡市）」	
9：00～9：30	オリエンテーション
9：30～12：00	座学「施設概要の説明、地域包括ケアの現状と課題」
12：00～13：00	昼食
13：00～15：00	A 施設見学
15：00～15：20	移動
15：20～16：00	B 施設見学
16：00～17：00	まとめ

訪問看護「(株)ケアーズ」	
9:00～10:30	オリエンテーション
10:30～11:00	移動
11:00～12:00	D利用者宅
12:00～12:30	移動
12:30～13:30	昼食
13:30～14:00	移動
14:00～15:00	E利用者宅
15:00～15:30	移動
15:30～17:00	カンファレンス
訪問診療「医療法人アスミス」	
9:30～11:30	患者宅訪問 (5～7件)
11:30～12:30	昼食
12:30～13:00	移動
13:00～16:00	患者宅訪問 (5～7件)
16:00～	質疑応答

2015年2月	
地域密着型介護老人福祉施設、小規模多機能型居宅介護など「社会福祉法人長岡福祉協会（首都圏）」	
9:00～9:30	オリエンテーション
9:30～12:00	座学「施設概要の説明、地域包括ケアの現状と課題」
12:00～13:00	昼食
13:00～15:00	C施設見学
15:00～15:20	移動
15:20～16:20	まとめ

■ フィールド演習3（インターンシップ型）

産学ネットワーク「ジェロントロジー」（自動車、電機、住宅、食品、生活用品関連等の企業が約30社参加）が主催する年2回（6/6、3/26）の全体会、及び合宿（9/7～8）に学生も参加。企業のスタッフとディスカッション・交流をした。



職種や世代を超えて高齢社会の課題について話し合う
産学ネットワーク「ジェロントロジー」の合宿に学生も参加

グローバル演習

■ グローバル演習 1：英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション

国際的なコミュニケーション能力と多文化・多分野の専門家とチームを組んで課題解決に取り組む「グローバル演習」を開講した。開講時に英語運用能力測定試験を実施し、3段階の能力別クラス分けを行い、1クラス6名×6クラスの少人数クラスにて指導を行った。プログラムの内容は、リスニング、スピーキング、プレゼンテーション、論理的会話力、ファシリテーションの能力を向上させる英語学習の研修プログラムと、語学を活用し、リーディングプログラムの趣旨に沿った高いコミュニケーションスキル、グローバルマインドを向上させる研修プログラムによって構成され、年間22回×3時間、合計66時間のコースで、英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション能力の育成を図った。また、終了時にも英語運用能力測定試験を実施し、学生へのフィードバックを行った。

■ グローバル演習 3：国際共同ワークショップ・スタジオ、外国人特別講義／セミナー

2014年度の実績は以下のとおりである。

7/16 国際ワークショップ「ヨーロッパ福祉国家における高齢者ケア：変わりゆく家族の役割」

本郷キャンパス工学部第11号館1階講堂にて、本プログラム主催の国際ワークショップ「ヨーロッパ福祉国家における高齢者ケア：変わりゆく家族の役割」を開催した。ヨーロッパと日本のケア・システムの相違点や各国がどの方向に向かおうとしているかが比較できる、実りの多いワークショップとなった。

〈講演内容〉

「ヨーロッパ福祉国家の新概念：家族による介護労働」

Birgit Pfau-Effinger（ハンブルグ大学グローバリゼーション・ガバナンスセンター教授・南デンマーク大学福祉国家研究センター教授）

「民間型と公共型の家庭的ケア：ドイツの変わりゆく包括ケア提供形態」

Hildegard Theobald（ヴェヒタ大学老年医学研究所教授）

討論者：上野千鶴子（東京大学名誉教授）

司会：John Creighton Campbell（ミシガン大学名誉教授・高齢社会総合研究機構客員研究員）

コアセミナー

専攻での専門的研究が、現実の高齢社会問題の解決に資するものとなるよう、視野を広げ、発想を深める研究指導（CS1）と様々な現場で活動されている第一人者の方をお招きし、お話を伺い、ディスカッションするケーススタディ（CS2）を下記のような日程で行った。

〈スケジュール〉

	内容	テーマ	講演者と肩書 または研究指導	区分
4月26日	高齢社会総合研究機構が行う分野横断型実証プロジェクトについて講義。新しい高齢社会を創るには何が必要か、学生全員でGWを実施した。	高齢社会に関する研究の理解	GLAFS 教員	CS1
5月10日	高齢社会総合研究機構が行う分野横断型実証プロジェクトについて講義。GWを行い、GLAFS生の研究関心とCSへの期待について討議した。	高齢社会に関する研究の理解と、GLAFS生の期待	GLAFS 教員	CS1
5月17日	「い・しょく・じゅう」のグループに分かれ、GLAFS生が分野横断で行う共同研究のアイデアを検討。	共同研究に向けた取り組み1	GLAFS 教員	CS1
5月24日	「い・しょく・じゅう」のグループに分かれ、GLAFS生が分野横断で行う共同研究のプログラムを検討した。	共同研究に向けた取り組み2	GLAFS 教員	CS1
5月31日	「い・しょく・じゅう」のグループに分かれ、GLAFS生が分野横断で行う共同研究の研究計画書を策定。WHOのAge Friendly Cityに関するテキストを輪講。	共同研究に向けた取り組み3 超高齢社会に関する輪講	GLAFS 教員	CS1
6月7日	「い・しょく・じゅう」のグループに分かれ、GLAFS生が分野横断で行う共同研究について全体共有。6つの共同研究テーマを決めた。	共同研究に向けた取り組み4	GLAFS 教員	CS1
6月14日	アメリカのシニアコミュニティの入居契約書と日本のサービス付き高齢者住宅の標準約款について講義。これらの比較検討を通し、日米の制度文化の違いについてGWを実施した。	入居契約書、標準約款における日米の制度文化の違い	樋口範雄（法学政治学研究科教授）*	CS2
6月28日	社会保障政策の形成過程、社会保障政策や介護保険の国際比較等の講義に加え、産業界から講師をお招きして、博士課程卒業後のキャリアパスについて、お話を伺った。	社会保障政策の形成とその過程での審議会・研究家の役割	岩村正彦（法学政治学研究科教授）*	CS2
		How different countries allocate LTC benefits to users	J.C.Campbell（高齢社会総合研究機構客員研究院）*	CS2
		博士人材のキャリアパス・グローバル人材とは	石岡祥男（元日立製作所・産学ネットワーク「ジェロントロジー」特別会員）	CS2
7月5日	高齢者の住まい（近居）や家族についての講義と、地域診断やそれに関連する研究手法についての講義。その後、高齢者体験セットを装着し、高齢者の虚弱を体験・測定。講演者と共に支援方法について検討した。	地域居住に関して	大月敏雄（建築学専攻教授）*	CS2
		地域診断について	永田智子（健康科学・看護学専攻准教授）*	CS2
		高齢者体験	GLAFS 教員	

7月12日	在宅介護の現場から見た、高齢者とのかかわり方や支援方法について、お話を伺った。	在宅介護支援の現場	大向一成 (株)ジャパンケアサービス)	CS2
	学生による研究の進捗の発表と教員からのフィードバック。	個別研究指導	GLAFS 教員	CS1
7月19日	小規模多機能事業所について、実際の事例を紹介し、高齢者が地域で暮らし続けるために小規模多機能事業所が目指すものについて、お話を伺った。	地域密着サービスと介護保険制度	柴田範子 (NPO 法人「楽」理事長)	CS2
	学生による研究の進捗の発表と教員からのフィードバック。	個別研究指導	GLAFS 教員	CS1
8月23-24日 8月29-31日 9月5-7日	仮設住宅で、高齢者へのインタビュー、健康チェックを実施し、高齢者の居住環境について「い・しょく・じゅう (医・食・住)」の観点からアセスメントを行った。	岩手県大槌町、釜石市、住環境点検	GLAFS 教員	CS1
10月18日	大田区の高齢者見守り、支えあいネットワーク等について、お話を伺った。	高齢者支援の現場について	澤登久雄 (大田区地域包括支援センター長)	CS2
	テレビ、新聞、雑誌の立場から、シニアへの情報の伝え方やコンテンツに関する話題を提供後、「高齢期の暮らしとコミュニティを豊かにするにはいかなる情報をいかなる手段で伝えればよいか」をパネルディスカッションした。	シニア×メディア 高齢社会における情報伝達とニーズ	河出卓郎 (株)毎日新聞社)* 岡田宏記 (株)フジテレビジョン報道局専任局長) 川村容子 (高齢社会総合研究機構)	CS2
11月1日	ドイツと日本の介護保険制度の成り立ちとそれぞれの違いについて講義。	ドイツと日本の介護保険制度の誕生	J.C.Campbell (高齢社会総合研究機構客員研究員)*	CS2
11月8日	工学系研究科建築計画研究室主催、GLAFS 共催の国際シンポジウムに参加。	超高齢社会に対応した地域空間計画の再考	建築計画研究室 GLAFS 教員	CS2
11月15日	川崎市の生活保護者、障がい者、貧困家庭の子ども等、その実態についてお話を伺った。	大都市の高齢者支援施策について	広岡真生 (川崎市健康福祉局生活保護自立支援室)	CS2
11月22日	法廷後見制度、任意後見制度についての説明、認知症高齢者の事例など、成年後見制度の実情についてお話を伺った。	成年後見制度について	牛嶋勉 (牛嶋、寺前、和田法律事務所)	CS2
	学生による研究の進捗の発表と教員からのフィードバック。	個別研究指導	GLAFS 教員	CS1
11月29日	老人ホームや特養の現場の話を中心に、施設の問題点、サービス付き高齢者住宅の施設化、在宅老人ホームについて、お話を伺った。	高齢者の住まいのあり方について	橋本俊明 (株)メッセージ会長)	CS2
	学生による研究の進捗の発表と教員からのフィードバック。	個別研究指導	GLAFS 教員	CS1
12月6日	高齢者のニーズにあった旅のコーディネーションや、カラオケでの介護予防についてお話を伺った後、高齢者のアミューズメント・トレンドを考える GW を実施した。	超高齢社会を豊かにする旅のコーディネーションと魅力ある地域	北 功 (東日本旅客鉄道 (株))	CS2
		アクティブシニアから要介護者までを対象としたエンターテインメント&レクリエーションプログラム	戸塚圭介 (株)第一興商)	CS2
12月13日	企業の立場から超高齢社会の課題に対する取り組みを紹介。	超高齢社会の課題に対するダイワハウスグループの取り組み	濱 隆 (ダイワハウス工業 (株)取締役常務執行役員)*	CS2
		超高齢社会の到来とビジネスモデルの考察	野呂順一 (株)ニッセイ基礎研究所代表取締役社長)*	CS2
1月17日	フィールド演習 2・ケアシステム実習にあたって、在宅医療・訪問看護・ケアマネジメント・福祉施設の実態を理解するためのオリエンテーション。	在宅医療・訪問看護・施設実習のオリエンテーション	木全真理 (GLAFS 特任助教)* 御子柴直子 (GLAFS 特任助教)*	CS2

1月24日	新宿戸山団地「暮らしの保健室」の見学を通して、地域で支える訪問看護を現場学習。	地域を支える訪問看護	秋山正子（株）ケアーズ 白十字訪問看護ステーション統括所長* CS2
2月14日	学生による研究の進捗の発表と教員からのフィードバック。	個別研究指導	GLAFS 教員 CS1

*はプログラム担当者

3. 合宿

8月2日、3日の2日間にわたり、奥湯河原にある青巒荘で合宿を開催した。参加者は、延べ65名（プログラムオフィサー1名、学内教員10名、学外教員4名、産学ネットワーク「ジェロントロジー」メンバー2名、行政関係者2名、特任助教13名、特任研究員等7名、修士課程大学院生14名、博士課程大学院生11名、聴講生1名）。プログラム教員やゲストの講演、コース生の研究発表等、過密なスケジュールだったが、大変充実した内容の合宿となった。

〈合宿スケジュール〉

1日目	
12:00	集合
12:00~12:10	開会の辞（原田昇：東京大学副学長・工学系研究科教授・プログラム責任者*） 全体スケジュール説明
12:10~13:00	講演1 関根千佳* （株）ユーディット（情報のユニバーサルデザイン研究所）会長兼シニアフェローでプログラム教員でもある関根千佳先生による講演。会社を立ち上げた経緯や、何故、ITの分野でユニバーサルデザインを実現することを目指しているのか等についてお話しいただいた。
12:10~13:10	休憩、会場移動
13:10~15:30	院生研究発表（質疑等含む） コース生の個人研究発表は7名ずつ、2部屋に分かれて実施された。教員からは、研究の前提となる価値観や概念、研究方法、ジェロントロジーにおける位置づけ等について、多くの質問・アドバイスが寄せられた。
15:45~16:00	産学ネットワーク「ジェロントロジー」活動紹介 笈田幹弘（高齢社会総合研究機構特任研究員） ワーキンググループのひとつで、高齢者向け住宅を研究している「ジェロントロジー住宅」グループの活動紹介。
16:00~17:10	講演2 太田秀樹（医療法人アスムス理事長）* テーマは「地域包括ケアシステムの構築に向けて〈出前医療24年 町医者への挑戦〉」。在宅医療の可能性について豊富な実例をもとに解説しながら、それを推進するためには地域包括システムの構築が重要であること等をお話しいただいた。
17:10~17:30	休憩、チェックイン

17:30~18:30	グループワーク（住み替え双六） 「住み替え双六で考える超高齢社会とキャリア形成」と題したグループワークが行われた。コース生と教員、ゲストがチームになり、「ゆりかごから墓場まで」のライフイベントを考えた。
18:30~21:30	夕食、懇親会
2日目	
8:00	朝食
9:00~9:50	講演3 松本直樹（柏市福祉政策課） 演題は「厚生労働省と柏市からみた公務員の役割」。厚生労働省から柏市に出向している松本氏、省庁での論理的な政策づくりの経験と、柏市での地元密着型の仕事の経験の両面から、公務員の仕事の面白さについてお話いただいた。
9:50~10:00	休憩、会場移動
10:00~12:30	院生 研究発表（質疑等含む） 2日目の研究発表も2班に分かれ、計13名のコース生がそれぞれの自己紹介と研究概要、キャリアパスについて発表した。
12:30~13:10	昼食
13:10~13:40	産学ネットワーク「ジェロントロジー」活動紹介 石岡祥男（特別会員）、廣瀬雄一（高齢社会総合研究機構特任研究員） ワーキンググループ「高齢者のニーズ・ライフデザイン」と「コミュニティプレイス研究」の活動を報告。
13:40~14:50	共同研究進捗報告 前日のワークの成果発表
14:50~15:00	プログラムオフィサー・熊田孝恒先生（京都大学情報学研究科教授）のコメント 大方潤一郎プログラム・コーディネーター*の総括
15:00	解散

*はプログラム担当者



合宿最終日

4. 国際・産学活動

国際セミナー・学会等参加状況

9/14 環太平洋大学協会（APRU）第5回高齢社会研究シンポジウム

環太平洋大学協会（The Association of Pacific Rim Universities、略称 APRU）の第5回高齢社会研究シンポジウムが、9月14日～17日、南カリフォルニア大学で開催され、開催国のアメリカをはじめ、高齢社会に向けた政府の取り組みが課題となっている中国、香港、シンガポール、インド、インドネシア、韓国などが参加。本プログラムからは秋山弘子特任教授と橋本英樹教授が報告。日本は経済発展しながらも肥満率が抑えられ、平均寿命が長いという国際的にも珍しい例であることや、高齢社会総合研究機構が取り組む柏市の高齢者のコミュニティ形成などに多くの関心が集まった。

10/16 ワシントン大学国際シンポジウム

10月16日～19日にワシントン大学で開かれた、マクドネル国際スカラールアカデミーが主催する大学間の国際連携プログラムに、助教2名、学生1名が参加。学際的な研究・教育プログラムにおける専門ごとのディシプリンの違いをどう乗り越えるかや、ジェロントロジーの専門家として養成される博士人材を社会でどのように生かすかという点についてポスター発表を行った。



会場となったワシントン大学

10/17 国際会議「都市の国際ラウンドテーブル 高齢社会におけるレジリエントな都市」

富山市で開催された、OECD（経済協力開発機構）と富山市の主催による国際会議「都市の国際ラウンドテーブル 高齢社会におけるレジリエントな都市」に学生1名が参加。ヘルシンキ、リスボン、マンチェスター、横浜、京都、富山などの高齢化に取り組む都市や、東京大学、千葉大学、富山大学の研究者、国や民間企業、OECD、WHO（世界保健機関）、ITF（国際交通フォーラム）といった国際機関によって、活発な議論が交わされた。

5. シンポジウム

3/15 国際シンポジウム「活力ある超高齢社会へのロードマップ—2030/2060」

リーディングプログラム創設にあたり、国際的なリーダーの方々を招聘し、活力ある超高齢社会に向けた課題解決の道筋について、世界のトップリーダーからの提言と分野横断的なディスカッションを通じて検討するキックオフシンポジウムを開催した。

有楽町・東京国際フォーラムにて、GLAFSの学生、教員・研究者のみならず、各国からの参加者、産学官民連携で高齢社会問題に取り組む方々など、200名を超える参加者を集め、活発な議論が行われた。

〈プログラム〉

はじめに

第1部 基調講演

「超高齢社会の到来と日本の社会的活力」

西村周三（国立社会保障・人口問題研究所所長）

「2030年の高齢化社会に向けた計画における課題とチャンス：アメリカの事例より」

トニ・アントヌッチ（ミシガン大学副学長・教授）

第2部 パネルディスカッション

Session 1 「長寿社会に生きる」

コーディネーター：牧野篤（教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）

コメンテーター：ハン・ギョンヒ（ソウル大学教授）

パネリスト：トニ・アントヌッチ（ミシガン大学副学長・教授）

アンジェリーク・チャン（シンガポール国立大学准教授）

秋山弘子（高齢社会総合研究機構特任教授）

濱崎貞弘（奈良県農業総合センター統括研究員）

Session 2 「次世代の社会保障制度と地域包括ケアシステム」

コーディネーター：秋下雅弘（医学系研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）

コメンテーター：ジョン・C・キャンベル（ミシガン大学名誉教授）

パネリスト：デビッド・イングリッシュ（ミズーリ大学教授）

ベルント・シュルテ（ドイツ法律専門家・コンサルタント）

グンナー・アクナー（オレブロ大学教授）

樋口範雄（法学政治学研究科教授）

辻哲夫（高齢社会総合研究機構特任教授）

Session 3 「Age Friendly Society の生活空間と生活支援技術」

コーディネーター：大野秀敏（新領域創成科学研究科教授）

コメンテーター : 廣瀬通孝 (情報理工学系研究科教授)
 パネリスト : トーマス・ボック (ミュンヘン工科大学教授)
 原田昇 (工学系研究科研究科長・教授)
 インゲラ・ブロムベルイ (スウェーデン王立工科大学元准教授)
 森雅志 (富山市長)

まとめ

3/7 国内シンポジウム 2015 「活力ある超高齢社会へのロードマップ NEXT STEP」

第1部では、フィールド演習プログラムや学生による共同研究の発表、第2部では、折り返し地点を迎えた超高齢社会のモデルづくりについて、高齢社会総合研究機構が取り組む「い・しょく・じゅう」の各プロジェクトの現在の到達点が整理され、活力ある超高齢社会に向けた取り組みの方向性が議論された。

〈プログラム〉

10:00 ~10:30	開会挨拶・趣旨説明 GLAFS のカリキュラム紹介	大方潤一郎 (高齢社会総合研究機構機構長・工学系研究科教授・プログラム・コーディネーター)
10:30 ~10:50	GLAFS 2014 年度 フィールド演習の実際	木全真理 (高齢社会総合研究機構特任助教) 目麻里子 (医学系研究科博士課程) 内山瑛美子 (情報理工学系研究科修士課程)
10:50 ~11:50	GLAFS 生による共同研究プロジェクト 6 グループの研究成果報告	
	高齢者の終末期に向けた意思決定支援方法の検討	藤井文香 (医学系研究科修士課程)
	要介護高齢者の在宅療養継続—家族関係と経済状況に着目して—	長谷田真帆 (医学系研究科博士課程) 麦山亮太 (人文社会系研究科修士課程)
	住み続けられる住居の研究—転倒を予防する居住空間を探る—	松本博成 (医学系研究科修士課程)
	総合的コミュニティ活動の支援—柏市豊四季台団地での実践と検証—	菊岡里美 (新領域創成科学研究科博士課程)
	高齢期の再社会化を促進する【農ある暮らし】に関する研究	吉田真悟 (農学生命科学研究科修士課程) 浜田麻里奈 (工学系研究科修士課程)
	高齢者の食と栄養—市販介護食品調査から浮彫りになったこと—	佐藤浩 (教育学研究科修士課程)
11:50 ~12:00	第1部の総括	大方潤一郎
13:15 ~13:20	第2部プログラム説明	
13:20 ~13:55	【い (医)】 ケア・サポート・システム 「い (医=ケア・サポート環境)」に関する実践報告と最前線の取り組み	辻哲夫 (高齢社会総合研究機構特任教授) 飯島勝矢 (高齢社会総合研究機構准教授)

13:55 ～14:30	【しよく（食・職）】社会的サポート・システム ・ セカンドライフ就労の取り組み —概要と今後の展望— ・ 生涯学習を通じたコミュニティづくり —豊四季台くるるセミナーの取り組み—	秋山弘子（高齢社会総合研究機構特任教授） 牧野篤（教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
14:30 ～13:55	【じゅう（住）】物的空間的生活環境システム ・ 超高齢社会に対応した地域空間計画の再考 ・ 安全安心住宅（住環境）研究 G3 の取り組み ・ 在宅介護のサービス基盤整備に向けた考察 ・ サービス付き高齢者向け住宅の現状と課題 ・ 被災地におけるコミュニティ形成支援について	大方潤一郎 西野亜希子（高齢社会総合研究機構特任助教） 廣瀬雄一（高齢社会総合研究機構特任研究員） 西川亮（高齢社会総合研究機構特任研究員） 後藤純（高齢社会総合研究機構特任助教）
15:05 ～15:15	質疑応答	
15:15 ～15:30	休憩	
15:30 ～16:55	【パネルディスカッション】 ○ パート1「閉じこもらず、外に出かけたくなるまち」 ○ パート2「最後まで安心して暮らせるまち」 ○ パート3「活力ある超高齢社会への新たなロードマップ」	辻哲夫 飯島勝矢 秋山弘子 大方潤一郎 ファシリテーター：後藤純
16:55	閉会挨拶	大方潤一郎



国内シンポジウム会場

【その他のシンポジウム】

〈2013年〉

12/14 一般市民向けシンポジウム

「白熱討論・活力ある超高齢社会へのロードマップ 2030 / 2060」 （東京大学本郷キャンパス）

〈2014年〉

10/29 国際専門家会議

「転換期におけるエイジング：オランダの経験に学ぶ」（東京大学本郷キャンパス）

11/8 国際シンポジウム

「超高齢社会に対応した地域空間計画の再考」（東京大学本郷キャンパス）

12/2

第4回「高齢者クラウド」シンポジウム（後援）

「高齢社会を豊かにする科学・技術・システムの創成」（日経カンファレンスルーム）

6. 研究会・セミナー

イブニングサロン

関係者の学術的な交流と親睦を深めることを目的とし、話題提供者の話に耳を傾けつつ、自由に意見交換ができる場を2014年度に計7回設けた。

〈各回の話題提供者とテーマ〉

7/17 第1回 西上治（高齢社会総合研究機構特任助教）

「介護施設での高齢者の転倒、骨折事故の裁判例」

9/25 第2回 笈田幹弘（株LIXIL）

「住み続けられる住まい、ってどんな住まいだろう？」

10/9 第3回 西川亮（高齢社会総合研究機構特任研究員）

「野菜を食べながら団地の未来を考えよう」

11/13 第4回 鈴木美穂（医学系研究科助教）、五十嵐歩（医学系研究科助教）

「コンビニ発の高齢者ケア：地域包括ケアシステムづくりは地域から」

11/25 第5回 松本博成（医学系研究科修士1年）

「大槌町で感じたCBPRの可能性」

内山瑛美子（情報理工学系研究科修士1年）

「福祉施設の在り方とは（介護等体験を終えて）」

12/18 第6回 朴孝淑（高齢社会総合研究機構特任助教）

「これからの高年齢者雇用のあり方について——日本と韓国の『定年制』を素材として——」

1/15 第7回 安藤絵美子（医学系研究科博士1年）

「自分でつくるすこやかなところとからだ——リラクゼーション基本のキ——」

吉田真悟（農学生命科学研究科修士1年）

「農業哲学 Cafe のススメ」



（左）第7回イブニングサロンの様子（中・右）報告をするコース生たち

7. 環境整備

2014年度には下記のような目的で環境整備に取り組んだ。

1. 講義・演習のセミナー室については、各専攻のある本郷・柏・弥生・白金の各キャンパスをつなぐ遠隔講義システムを整備。
2. 多くの専攻等に所属する学生・指導教員陣が、自身の専門分野だけでなく、広範な関係分野の文献・資料・データ等にたやすくアクセスでき、また、日常的な議論を深めるための談話・相談・交流スペースともなる「交流ライブラリースペース」（24時間開放）を設置。このスペースには、地理情報・空間情報等の画像データや動画データの処理・加工・表示等についても十分な性能を有するICT機器を必要数配備した。
3. 研究成果等のプレゼンテーションやディスカッションが効果的・効率的に行えるプレゼンテーション・ルームを設置。
4. フィールド演習において使用するICT機器、高齢者体験セット、実験・計測機器などを整備。
5. フィールド演習の拠点施設として活用するため、岩手県大槌町に開設した地域活動実習拠点（コミュニティ・サポート・センター）、柏市豊四季台地区の地域活動実習拠点（空き店舗活用）を整備。

3. 2015 年度教育活動

1. 講義群

2015年度には以下のように必修・選択必修をさらに充実させ、このほかにも20の選択講義を設けた。

■ 高齢社会総合研究学概論Ⅰ（高齢者の体と心：老いとつきあう）

本授業では高齢社会におけるさまざまな課題に対して、主として高齢者の体と心について、国内のトップ講師からの講義を受け、老いとつき合うとはどういうことであるのか、その基礎を分野横断的に学ぶことが狙いである。本講義を通じて、高齢者の健康寿命を延ばし、経済活動・地域活動への参加を促すことによって高齢者が快活に暮らし、社会の支え手となって活躍する活力ある超高齢社会について考えていく。

【授業日程】

- 4/15 第1回 なぜ老いる？ならば上手に老いるには？（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構准教授）
- 4/22 第2回 老化と生物学（橋詰力：高齢社会総合研究機構特任助教）
- 5/7 第3回 ジェロントロジー：長寿社会を支える学際科学（秋山弘子：高齢社会総合研究機構特任教授）
- 5/13 第4回 ケアの当事者学（上野千鶴子：東京大学名誉教授・NPO法人ウィメンズアクションネットワーク（WAN）理事長）
- 5/20 第5回 疾病・障害とヘルスプロモーション（秋下雅弘：医学系研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
- 5/27 第6回 栄養とエイジング（阿部啓子：東京大学名誉教授・農学生命科学研究科特任教授）
- 6/3 第7回 高齢者と看護学（山本則子：医学系研究科教授）
- 6/10 第8回 身体機能を補う福祉工学機器（伊福部達：東京大学名誉教授・高齢社会総合研究機構特任研究員）
- 6/17 第9回 高齢期の社会関係（小林江里香：東京都健康長寿医療センター研究員）
- 6/24 第10回 知的機能の変化と適応（高山緑：慶応義塾大学教授）
- 7/1 第11回 シニアの学ぶ、働く、遊ぶ（牧野篤：教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
- 7/8 第12回 死をめぐる諸問題（清水哲郎：人文社会系研究科特任教授）
- 7/15 第13回 次世代高齢者の価値観とライフスタイル（斎藤徹：(株)電通）

■ 高齢社会総合研究学概論Ⅱ（高齢社会のリ・デザイン）

本授業では超高齢社会の課題に対して、主として社会システムおよび、それを支える居住環境シ

システムについて、国内のトップ講師からの講義を受け、高齢社会のリ・デザインについて分野横断的に学ぶことが狙いである。本講義を通じて活動レベルが低下して介助が必要になった後も、施設収容により対応するのではなく、住み慣れた地域社会の中で、できるだけ自立的に活力を維持しながら暮らせる社会システム及び居住環境システムについて考える。

【授業日程】

- 9/30 第1回 生涯現役社会をめざして（横石知二：(株)いろどり代表取締役社長）
- 10/7 第2回 高齢化の人口学（白波瀬佐和子：人文社会系研究科教授）
- 10/14 第3回 人口減少社会における年金と社会保障財政（岩本康志：経済学研究科教授）
- 10/21 第4回 年齢に基づく雇用システムと高齢者雇用（濱口桂一郎：労働政策研究・研修機構統括研究員）
- 10/28 第5回 超高齢社会の都市計画・まちづくり（大方潤一郎：高齢社会総合研究機構機構長・工学系研究科教授）
- 11/4 第6回 高齢期の住まい方（大月敏雄：工学系研究科教授）
- 11/11 第7回 高齢者の移動を支える（鎌田実：新領域創成科学研究科教授）
- 11/18 第8回 シニア×ICT（廣瀬通孝：情報理工学系研究科教授）
- 11/25 第9回 自己決定と本人保護（樋口範雄：法学政治学研究科教授）
- 12/2 第10回 社会福祉とコミュニティケア—歴史と理論—（武川正吾：人文社会系研究科教授）
- 12/9 第11回 フューネラルビジネスの可能性（吉岡慎一：月刊フューネラルビジネス編集部）
- 12/16 第12回 身体・認知機能を活かしたコミュニティビジネス（戸枝陽基：社会福祉法人むそう）
- 1/13 第13回 21世紀の医療・介護・福祉のかたちを考える（辻哲夫：高齢社会総合研究機構特任教授）
- 1/20 第14回 超高齢社会を支えるコミュニティ（後藤純：高齢社会総合研究機構特任講師）

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅱ（超高齢社会の住まい・まちづくり）

超高齢社会の諸課題に対応した地域社会の物的・社会的な生活環境について、多面的に講義を行う。

【授業日程】

- 4/7 都市とすまい
 - 第1回 都市空間と高齢社会対応のまちづくり（大方潤一郎：高齢社会総合研究機構機構長・工学系研究科教授）
 - 第2回 高齢社会と地域循環居住（李鎔根：横浜国立大学研究員）
- 4/14 交通とまちづくり
 - 第3回 高齢社会と交通（原田昇：工学系研究科教授）
 - 第4回 高齢者の移動とまちづくり（大森宣暁：宇都宮大学教授）
- 4/21 地域に住む
 - 第5回 高齢社会の住まい—近居—（大月敏雄：工学系研究科教授）

- 第6回 空き家再生からはじまるまちのリノベーション（片岡八重子氏：ココロエー級建築士事務所代表）
- 4/28 バリアフリー環境とまち
- 第7回 バリアフリーのまちづくり（高橋儀平：東洋大学教授）
- 第8回 弱視者にとってのバリアフリー（松田雄二：工学系研究科准教授）
- 5/12 高齢者の住まい1
- 第9回 シルバーステージの住まい（番場美恵子：昭和女子大学講師）
- 第10回 建築系と福祉系の住まいに関する政策（大月敏雄：工学系研究科教授）
- 5/19 高齢者の住まい2
- 第11回 安全で安心して住み続けられる住宅（西野亜希子：高齢社会総合研究機構特任助教）
- 第12回 認知症高齢者の転倒と骨折（三浦研：大阪市立大学准教授）
- 5/26 高齢者の転倒実態
- 第13回 高齢者の転倒予防ほか（田中敏明：先端科学技術研究センター特任教授）
転倒の実態解明（小林吉之氏：産業技術総合研究所）
- 第14回 屋内外の階段の転倒（古瀬敏：静岡文化芸術大学名誉教授）
日常災害（直井英雄：東京理科大学名誉教授）
- 6/2 高齢社会のコミュニティ活動——健康づくり・コミュニティビジネス・多目的集会所——
- 第15回 住民主体の協働によるまちづくり（後藤純：高齢社会総合研究機構特任講師）
- 第16回 住民参加による地域自治活動（堤可奈子：高齢社会総合研究機構特任助教）

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅳ（高齢社会のケア・サポート・システム）

高齢者の特性や生活を理解し、体系的に高齢社会における高齢者へのケア・サポート・システムを学ぶ。

【授業日程】

- 5/21 第1回 高齢者に対する医療提供の考え方：生活習慣病管理から終末期医療まで（小島太郎：医学系研究科助教）
- 5/21 第2回 老化のプロセス：生理的老化と病的老化（孫輔卿：高齢社会総合研究機構特任助教）
- 5/28 第3回 老年症候群（小川純人：医学系研究科准教授）
- 5/28 第4回 認知症の理解（亀山祐美：医学系研究科助教）
- 6/4 第5回 エンド・オブ・ライフケア：状態別の経過の理解（山本則子：医学系研究科教授）
- 6/4 第6回 高齢者のリハビリ（五十嵐歩：医学系研究科助教）
- 6/11 第7回 高齢者のがんと緩和ケア（山花令子：医学系研究科特任助教）
- 6/11 第8回 高齢者のケアマネジメント（成瀬昂：医学系研究科助教）
- 6/18 第9回 高齢者の退院支援（永田智子：医学系研究科准教授）

- 6/18 第10回 地域アセスメント（永田智子：医学系研究科准教授）
- 6/25 第11回 超高齢社会の地域包括ケアシステムの実際：訪問診療を中心に（太田秀樹：医療法人アスムス理事長）
- 6/25 第12回 超高齢社会の地域包括ケアシステムの実際：訪問看護を中心に（秋山正子：(株)ケアーズ 白十字訪問看護ステーション統括所長）

■ 高齢社会総合研究学特論VI（高齢者法）

高齢者に関わる法制度や政策課題についてオムニバス形式での講義、およびディスカッションを行う。

【授業日程】

- 9/14 第1回 イントロダクション 高齢者法の概要と意義
- 9/21 第2回 高齢者問題—法と弁護士の役割
- 9/28 第3回 名古屋高裁事件 高齢者の徘徊事故と責任のあり方
- 10/5 第4回 高齢者と医療1
- 10/12 第5回 高齢者と医療2
- 10/19 第6回 成年後見制度
- 10/26 第7回 高齢者の住まい1
- 11/2 第8回 高齢者の住まい2 CCRCと日本版CCRC
- 11/9 第9回 年金 高齢者の経済的基盤 リバース・モーゲッジ
- 11/16 第10回 相続・遺言・信託
- 11/30 第11回 信託について（Joshua C. Tate：Southern Methodist University 教授）
- 12/7 第12回 その他の高齢者問題1 高齢者虐待
- 12/14 第13回 その他の高齢者問題2 祖父母の孫に会う権利など 国際的な視野
*講義は第11回を除き、すべて樋口範雄：法学政治学研究科教授

■ 高齢社会総合研究学特論VIII（高齢社会の人文科学・社会科学）

高齢社会・超高齢社会における人口構造、社会構造、社会政策、ライフコース、生涯学習などについて、人文学および社会科学的なアプローチにより、活力ある超高齢社会を研究するうえでの基本的な知識を得ることを目標とする。

【授業日程】

- 9/10 第1回 ・長寿社会に生きる
・セカンドライフの人生設計
（秋山弘子：高齢社会総合研究機構特任教授）
- 9/17 第2回 ・高齢化の仕組み：人口学的アプローチ
・人口高齢化の国際比較：経済格差に注目して

(白波瀬佐和子：人文社会系研究科教授)

- 9/24 第3回 ・ケアの現象学①：現象学とは何か
・ケアの現象学②：現象学によるケアへのアプローチ
(榊原哲也：人文社会系研究科教授)
- 10/1 第4回 ・臨床心理学の視点
(高橋美保：教育学研究科准教授)
- 10/8 第5回 ・高齢者に対する人生の最終段階のケア①
・高齢者に対する人生の最終段階のケア②
(清水哲郎：人文社会系研究科特任教授)
- 10/15 第6回 ・生涯学習が課題化される社会：高齢社会と生涯学習
・地域コミュニティと生涯学習：高齢社会の「学習」的基礎
(牧野篤：教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長)
- 10/22 第7回 ・超高齢社会の社会政策①：年金と医療
・超高齢社会の社会政策②：介護・地域福祉
(武川正吾：人文社会系研究科教授)

■ 高齢社会総合研究学特論IX (高齢者の食と健康〈維持〉)

超高齢化を目前にして、いつまでも自立して自分らしく生きる為に、より早期からの健康維持～虚弱予防が重要な鍵となる。そこには本人自身の意識変容・行動変容と良好な社会環境の実現の両面が必要であり、高齢者の様々なプロダクティビティの増進が期待される。そこで、本講義では虚弱(フレイル：Frailty)の最たる要因である加齢性筋肉減少症(サルコペニア)を予防する為に、『食』を中心に見据えた高齢期に置ける早期からの健康維持を包括的な視点から、その予防対策に関する最新知識を学ぶ。

【授業日程】

- 11/5 第1回 虚弱化におけるサルコペニアとその包括的予防アプローチ
第2回 サルコペニア研究の最前線：世界の動向から
(飯島勝矢：高齢社会総合研究機構准教授)
- 11/12 第3回 健康増進における歯科口腔機能の重要性
(平野浩彦：東京都健康長寿医療センター研究所)
第4回 虚弱期まで包含した口腔ケアの意義と実践
(平野浩彦：東京都健康長寿医療センター研究所、江口徹：サンスター(株))
- 11/26 第5回 食べる事の意義と今後の食育のあり方
(田中弥生：駒沢女子大学教授)
第6回 健常期から虚弱期までの栄養管理
(田中弥生：駒沢女子大学教授、不二靖弘：(株)明治、渡邊慎二：日清オイリオ)

- グループ(株)、藤井洋光：(株)大塚製薬工場、沖村剛：伊那食品工業(株)
- 12/3 第7回 栄養疫学研究から見た日本人の栄養摂取
(佐々木敏：医学系研究科教授)
- 第8回 高齢期における身体活動と運動習慣
(宮地元彦：国立健康・栄養研究所)
- 12/10 第9回 高齢者の栄養と転倒・骨折
(小川純人：医学系研究科准教授)
- 第10回 官民一体的な健康増進活動～先進的取り組みから学ぶもの～
(野口みどり：尼崎市市民協働局ヘルスアップ戦略担当)
- 12/17 第11回 超高齢になるまでの食習慣
- 第12回 ユニバーサルフード
(潮秀樹：農学生命科学研究科教授)

■ 高齢社会総合研究学特論X (ジェロンテクノロジー)

ジェロンテクノロジー (Gerontechnology) とは、高齢者を支援するためのシステムを扱う研究分野である。本科目では、高齢者の生活や社会活動などを支援するための情報・機械システムについて、オムニバス形式で講義を行う。本講義の内容は次の通りである。

- ・衰えた運動器・感覚器の機能補助を行うための運動支援・認知機能支援システム
- ・日進月歩での発展が著しい情報機器を用いた支援手法と、それら機器の使用の支援手法
- ・高齢者就労など社会的課題に対応するための仕組みとシステム

【授業日程】

- 10/2 第1回 高齢者就労における ICT の役割 (廣瀬通孝：情報理工学研究科教授)
高齢者の遠隔就労・社会参加とテレプレゼンス技術 (檜山敦：情報理工学研究科特任講師)
- 10/9 第2回 感覚・コミュニケーションを支援する福祉工学 (伊福部達：東京大学名誉教授・高齢社会総合研究機構特任研究員))
高齢者のための認知神経科学 (上田一貫：工学系研究科特任講師)
- 10/16 第3回 高齢者のための福祉・リハビリテーション工学 (田中敏明：先端科学技術研究センター特任教授)
臨床現場におけるリハビリ工学の実際 (吉田直樹：リハビリテーション科学総合研究所主任研究員、関西リハビリテーション病院リハビリテーション・エンジニア)
- 10/30 第4回 高齢社会のモビリティ構築に向けて (鎌田実：新領域創成科学研究科教授)
認知症高齢者の情報支援 (二瓶美里：新領域創成科学研究科講師)
- 11/6 第5回 福祉機器実用化における課題～福祉ロボットなどの実例からわかること (手嶋

教之：立命館大学教授)

11/13 第6回 高齢者の行動計測・見守りモニタリング (森武俊：医学系研究科准教授)

11/20 第7回 ①アクティブシニアの活動を支える ICT のユニバーサルデザイン

②人生を支えるジェロントロジー (関根千佳：(株)ユーディット会長兼シニアフェロー・同志社大学政策学部教授)

12/4 第8回 医療・介護・健康分野で期待されるサービスロボティクス (浅間一：工学系研究科教授)

2. 演習

フィールド演習

■ フィールド演習 1 (コミュニティ・アクション型)

グループ共同研究

2015年度には前年から継続となった1~6のグループに共同研究7「高齢社会を支援するロボティクス」が加わった。

共同研究1「高齢者の終末期にむけた意思決定支援方法の検討」グループ

共同研究2「在宅介護で暮らし続けられる条件の検討」グループ



2015年11月4日から6日まで、長崎県長崎市で開催された第74回日本公衆衛生学会総会において、ポスターセッションで共同研究を説明

共同研究3「住み続けられる住居の研究」グループ

共同研究4「コミュニティ活動のファシリテーション」グループ

共同研究5「都市部における高齢期の農ある暮らしに関する共同研究」グループ

共同研究6「高齢者の食と栄養の研究」グループ

共同研究7「高齢社会を支援するロボティクス」

高齢者およびその支援者を支援するロボット技術について、様々なケースで調査を行った上で、現場への導入支援のための指針の提案を目指す。

また、千葉県柏市で地域の単身高齢者約 200 名が集うイベントへの参加、東日本大震災の被災者が暮らす岩手県大槌町の仮設住宅団地で住民の体力測定・まちづくりワークショップの開催も引き続き行われた。

岩手県大槌町フィールド演習

演習の狙いは、多様な分野の学生がチームになって、具体的なフィールドにおける課題を特定し、多角的に分析、具体的な解決策を地元提案、そして実証を行うことにある。なお、この演習は高齢者をはじめとした地域住民とともに、地域課題を解決することを目指して、住民自らが生きがいづくりやコミュニティ活動・コミュニティビジネスとして取り組めるよう支援することを長期目標とするものである。2015 年度は次のような全 3 回の演習を行った。

- 第 1 回 4/24～26 コミュニティ居住環境点検を通じたニーズ調査・現地踏査を行い、本年度取り組むべき問題設定を行う。
- 第 2 回 7/18～19 地域の主要関係主体のインタビュー調査を行い、初回を踏まえた現状把握（分析）および目標設定を行う。さらにこの目標に対して具体的な課題解決策のアイデアを検討する。
- 第 3 回 11/14～22 これまで検討してきた具体的な課題解決案を踏まえ、具体的なイベントプログラムを企画し実施する。地元関係主体の評価を得ながらプログラムの課題を明らかにし、次なるアプローチを提案する。

〈参加人数〉

- 第 1 回演習：19 名（GLAFS 学生）、5 名（GLAFS/IOG スタッフ他）
- 第 2 回演習：19 名（GLAFS 学生）、6 名（GLAFS/IOG スタッフ他）
- 第 3 回演習：22 名（GLAFS 学生）、9 名（GLAFS/IOG スタッフ他）

〈演習の様子（第 1 回）〉



大槌町のこれまでの取り組み概要と現状、今回の合宿の調査方法についてレクチャーを受ける

4/24		大ケ口多世代交流会館主催：認知症サポーター養成講座の受講（希望者のみ）
4/25	20 分	合宿案内

	60分	<p>コミュニティ・アウトリーチ活動</p>  <p>周辺を歩きながら、地元住民へのアウトリーチ活動を実施。ここで得た情報を整理</p>
	60分	健康チェックイベント（移動！暮らし保健室）の予行演習
4/26	300分	<p>1. 健康チェックイベント（移動！暮らし保健室）</p> <p>2. フォーカスグループインタビュー</p>  <p>健康チェックイベント「移動！暮らし保健室」のなかで、フォーカスグループインタビューを行い、暮らしについての困り事や対応策について話し合う</p>
	60分	<p>3. 被災地視察</p> <p>調査結果を踏まえた課題整理</p>  <p>2日間で得られた住民のインタビュー調査の結果などを振り返り、情報整理を行う</p>

柏市豊四季台団地フィールド演習：一人暮らし高齢者対象「懇談と昼食会」

10月12日開催。イベントに参加した高齢者は約220名。産学ネットワーク「ジェロントロジー」のメンバーなど、企業の協力のもと、学生及び教員の他、総勢70名がスタッフとしてイベント運営に参加した。高齢者と直接触れ合うことで、暮らしの実態や課題への認識を深めるための演習となった。



助教や学生が各テーブルにつき、高齢者と語り合った

■ フィールド演習 2 (ケア・システム実習型)

診療・介護・看護を受けながら地域で生活する高齢者の実態や、診療・介護・看護といった多職種の実態を把握するためのフィールド演習では、高齢者ケアセンターなどの施設を見学するだけでなく、訪問診療・訪問看護に同行した。多専攻のコース生がグループとなって、各自が参加する目標を設定し、下記のとおり行われた。介護は全コース生参加、訪問診療と訪問看護は希望者のみの参加であった。

〈実習先と日程〉

2015年11月	
小規模多機能型居宅介護など「NPO法人「楽」」	
9:00~12:00	事業所の概要説明と見学
12:00~13:00	昼食
13:00~16:00	利用者宅に訪問（移動中に地域を散策）
16:00~17:00	目標達成の振り返りと質疑応答
地域密着型介護老人福祉施設、小規模多機能型居宅介護など「社会福祉法人長岡福祉協会（長岡市）」	
10:00~11:00	法人の概要の説明
11:00~12:00	A 施設の見学
12:00~13:00	昼食
13:00~15:00	B・C 施設の見学
15:00~16:00	目標達成の振り返りと質疑応答
2016年1月	
訪問看護、看護小規模多機能型居宅介護「(株)ケアーズ」	
9:00~10:30	事業所の概要と訪問利用者の説明
10:30~12:30	D 利用者宅に訪問同行
12:30~13:30	昼休み
13:30~15:30	E 利用者宅に訪問同行／看護小規模多機能型居宅介護を見学
15:30~17:00	目標達成の振り返りと質疑応答
訪問診療「医療法人アスミス」	
13:00~16:00	患者宅に訪問同行（5件程度）
16:00~17:00	目標達成の振り返りと質問応答
2016年2月	
地域密着型特別養護老人ホーム、小規模多機能型居宅介護など「社会福祉法人長岡福祉協会（港区）」	
9:30~10:00	F 施設の見学
10:00~11:30	法人の概要の説明
11:30~13:00	昼食と移動
13:00~15:00	G 施設の見学
15:00~16:00	目標達成の振り返りと質疑応答

〈参加したコース生の感想〉

角川由香 医学系研究科健康科学・看護学専攻修士課程1年

今回私たちは、新潟県長岡市で地域に密着した高齢者サービスに先駆的に取り組んでいる事業体を訪問しました。私たち GLAFS の学生は、超高齢社会を支えるシステムのひとつとして、地域包括ケアに関する学習をこれまで行ってきました。今回はその学びを踏まえ、高齢者を支える生活支援・介護・医療などについて、実際の現場に出向き、より現実的な地域包括ケアシステム構築に向けた示唆を得ることを目的としています。実際に見学に出かけた学生は、それぞれの専門分野の立場から、高齢者に対するケアの現場を知り、そして今後の展望を学びとってきました。多領域の学生がともに実際の現場を把握することで、多様な立場から高齢者ケアについてディスカッションできたことが大きな学びとなりました。さらに、自分が安心できる場所で、人生の最期まで穏やかに住み続けられる社会の構築に向けて、高齢者それぞれにパーソナライズされたケア提供のあり方を模索していく必要性を感じ取ってきました。

石井絢子 医学系研究科健康科学・看護学専攻修士課程1年

訪問看護実習には、分野横断的に計11名の希望した学生が3日間に分かれて参加しました。各日2名ずつの訪問に同行し、医療処置を必要とする方の在宅での療養について見学しました。訪問看護とは、医療処置だけでなく、社会面・心理面・家族など利用者の方を取り巻く多様な視点でのアセスメントが必要となります。この点において、今回参加学生の専門分野が様々であることは強みでした。私は看護師資格を有しており、最初に対象とするのは“ヒト”になります。一方で、建築系は建物、情報理工や工学系などは医療機器など同じ場でも着目する対象の視点が異なりました。各々の視点から、訪問看護や在宅医療における疑問点や課題を抽出し、実習最後のカンファレンスで共有し討議を行いました。今回、私の専門分野であるため、実習リーダーを行いました。専門外の学生に対する説明や取りまとめを行ううえで、分野が異なるとリーダーシップも異なることも学び、単に実習だけでなくリーダーシップの在り方などを学ぶ貴重な経験となりました。

後藤大地 医学系研究科健康科学・看護学専攻博士課程1年

対人ケア実習プログラムの一環である訪問診療実習にリーダーとして参加する機会を得ました。メンバーの中には訪問診療で活躍するICT機器やロボット利用の可能性を探りたい工学系の学生や、自国における訪問診療等、地域医療システムの現状との比較を通して学びを深めたい中国人留学生などもおり、普段では決して生まれにくい、大変興味深いディスカッションが行われました。一方で私自身としては、共通言語を持たない者同士のやり取りをスムーズにファシリテートするため、また他分野の学生が慣れない在宅医療の現場で最大限の学びを得るために、私達医療系の学生には何ができるのかという点に思考を向け、かつて行った看護学部での実習とはひと味もふた味も違った困難さや学びを経験することが出来ました。実習後には、私も含め良い意味で未知でセンセーショナルな経験をした学生が多く、超高齢社会に今後どのように貢献するかという各人のアイデアを、より深く、より鮮明に具現化することが出来た実習になったと感じました。

■ フィールド演習3 (インターンシップ型)

2011年に設立された産学ネットワーク「ジェロントロジー」(自動車、電機、住宅、食品、生活用品関連等の企業が約30社参加)と連携。年2回の全体会(7/3、3/10)、及び合宿(9/25~26)

に学生も参加。企業のスタッフとディスカッション・交流をした。

〈第1回全体会・講演内容〉

講演1 「日本の地域包括ケアについて」

宮島俊彦（内閣官房社会保障改革担当室長・前厚生労働省老健局長）

講演2 「URの今後の少子高齢化対応への取組について」

間瀬昭一（独立行政法人都市再生機構 ウェルフェア推進事業部ウェルフェア推進戦略チーム チームリーダー）

〈第2回全体会・講演内容〉

講演1 「『食』からみた高齢者のフレイル化—戦略的学術研究から地域への運動論へ—」

飯島勝矢（高齢社会総合研究機構准教授）

講演2 「ビッグデータ数値をベースにした高齢者の食行動予測」

道江美貴子（管理栄養士・(株)ウィット「あすけん」事業統括責任者）

講演3 「高齢者と社会を繋ぐ『食場（しょくば）』の有用性～スマイルデイズの活動を通して～」

小山裕喜（ハウス食品株）

パネル・ディスカッション

道江美貴子、小山裕喜、大方潤一郎（高齢社会総合研究機構機構長・工学系研究科教授）

〈合宿〉

講演1 「健康カラオケ～地域高齢者が楽しく集える場の提供を目指して～」

戸塚圭介（(株)第一興商 執行役員 エルダー事業開発部部长）

講演2 「ケアローソンについて」

林泰生（(株)ローソン ヘルスケア本部ライフケア推進部部长）

講演3 「女性だけの健康体操教室・カーブスの目指すもの」

増本岳（(株)カーブスジャパン代表取締役会長兼 CEO）

パネル・ディスカッション

増本岳、戸塚圭介、林泰生、大方潤一郎（高齢社会総合研究機構機構長・工学系研究科教授）

2日目には サービス付き高齢者向け住宅「ゆいま～る那須」を見学



「ゆいま～る那須」を訪れた時の様子

グローバル演習

■ グローバル演習 1：英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション

国際的なコミュニケーション能力と多文化・多分野の専門家とチームを組んで課題解決に取り組む「グローバル演習」を開講した。開講時に英語運用能力測定試験を実施し、3段階の能力別クラス分けを行い、1クラス6名×前期5クラス／後期6クラスの少人数クラスにて指導を行った。なお、定員に欠員が生じたため、1期生の希望者より一部の者を参加可能とした。プログラムの内容は、リスニング、スピーキング、プレゼンテーション、論理的会話力、ファシリテーションの能力を向上させる英語学習の研修プログラムと、語学を活用し、リーディングプログラムの趣旨に沿った高いコミュニケーションスキル、グローバルマインドを向上させる研修プログラムによって構成され、年間22回×3時間、合計66時間のコースで、英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション能力の育成を図った。また、終了時にも英語運用能力測定試験を実施し、学生へのフィードバックを行った。

■ グローバル演習 2：海外短期留学制度（海外または国内インターンシップ）

〈短期留学〉

留学先① コペンハーゲン大学（デンマーク）

プログラム：IARU Global Summer Program 2015

COP2: Interdisciplinary Aspects of Healthy Aging

実施期間：2015年7月7日～2015年7月26日

参加学生：佐藤浩 教育学研究科総合教育科学専攻 修士2年

杉本南 医学系研究科公共健康医学専攻 修士2年

留学先② ミシガン大学（アメリカ）

プログラム：ICPSR

Summer Program in Quantitative Methods of Social Research

実施期間：2015年7月11日～2015年8月1日

参加学生：安藤絵美子 医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士2年

〈長期留学〉

留学先：Boston Children's Hospital

プログラム：インターンシップ

実施期間：2015年8月10日～2016年2月10日

参加学生：中川慶之 工学系研究科化学システム工学専攻 博士1年

海外留学報告

化学システム工学専攻
GLAFS2 期生 中川 慶之

GLAFS 海外派遣プログラムによるご支援をいただき、2015 年 8 月 8 日～2016 年 2 月 13 日の約半年間にわたり、留学をさせていただきました。その間、ハーバード大学医学部ボストン小児病院（米国）の Daniel S. Kohane 教授の研究室において Student Intern として研究に従事いたしました。その詳細につきまして下記のとおりご報告いたします。

1. 留学先の概要

留学先のボストン小児病院は、ハーバード大学医学部の関連医療施設であり、140 年以上の歴史のある米国最大級の小児医療施設です。ハーバード大学医学部キャンパスをはじめ、ジョスリン糖尿病センター、ブリガム&ウィメンズ病院などの多くのレベルの高い医療機関・研究施設が集積するロングウッド・メディカルエリアに位置しているということもあり、様々な実験装置や研究施設に容易にアクセスできるという恵まれた研究環境にありました。



ボストン小児病院

その中でも私が訪問した Daniel S. Kohane 教授の研究室は、化学や化学工学、材料科学、バイオ工学、生物学、医学など様々なバックグラウンドを有する研究者が世界中から集まる、極めて多様性に富んだ環境を特長としています。理学・工学系の研究者も臨床の傍ら研究を行う医師も互いに自分の専門をいかして教えあいながら、小児関係に限らず幅広い疾患の治療に役立つ医療材料や医療デバイスの研究を行っておりました。医用工学・医工連携の先進事例を体感できる環境と言っても過言ではありません。

さらに、Kohane 教授自身がボストン小児病院のみならずマサチューセッツ工科大学（MIT）やハーバード大学医学部にも所属を有しているということもあり、これらの研究施設にも行き来しながら研究することができるという非常に贅沢な環境でした。

2. 留学準備

応募

指導教員である伊藤大知先生から Kohane 教授をご紹介いただき、渡航の半年ほど前に Kohane 教授宛てにメールにて Application letter と CV を送付し、留学をさせていただけないか伺いました。また、指導教員の伊藤先生に加えて私の修士論文の専任副査をつとめてくださった化学システム工学専攻の酒井康行先生にも推薦状をお願いし、大変有り難いことにご快諾をいただくことができました。お二人の先生方から Kohane 教授に推薦状を送っていただけたことが非常に大きな力となりました。

その後、電話にて Kohane 教授および数名の博士研究員（ポスドク）の方との面接が行われました。この電話面接の最後において、Kohane 教授が私を受け入れてくださるとおっしゃってくださいました。

渡航前の準備（研究面）

留学中にたずさわる研究プロジェクトは渡航のおよそ4か月前には決まっていました。しかし、知的財産権などの都合上だと思いますが、渡航前の段階では研究プロジェクトの内容については簡単な概要の説明を受けるにとどまりました。そのため、研究プロジェクトに関連した論文を自分なりにチェックしたり、近年 Kohane 研究室から出ている論文を読んだりといったことしかできなかったというのが正直なところです。

一方、留学準備と直接は関係ありませんが、渡航前に早めに学術誌への論文投稿を済ませておいたことが功を奏しました。実際、6月上旬に論文を投稿して6月終わりに査読者からの疑問点・改善点の指摘を受け取り、7月終わりまでに追加実験を行った上で修正した原稿を送り、8月上旬に渡米するという流れとなりました。もし論文投稿が1か月遅れていたとしたら、論文修正のための追加実験を行うことが現実的に不可能となるところでした。気持ちよく留学に挑戦するためには、留学前に計画的に博士課程における自分の研究を進めておくことも渡航前の準備としては実は重要なことではないかと思います。どちらかという、こちらの方が大変だったように感じました。

渡航前の準備（生活面）

渡航前の準備のメインはアメリカに滞在するためのビザの申請手続きでした。私の場合は J1 ビザ（交流訪問者用のビザ）の申請を行いました。Kohane 研究室の秘書さんとのやり取りから始まり、留学のスポンサーとなるハーバード・インターナショナル・オフィスとのやり取り、その後のアメリカ大使館への申請書提出、大使館面接があるなど、とても長い道のりでした。

また、留学中に滞在する部屋も渡航前に探しました。ボストンの家賃相場は異常に高いことで知られております。治安が安定している地域だと、古いアパートでも月 1500-2100 ドル（およそ 19-26 万円）は必要となります。ホームステイだとしても最低でも 800 ドル（およそ 10 万円）はかかります。現実的に多くの人はそのような金額を支払うことはできないので、ボストンでは学生はルームシェアをするのが普通とのことです。私もインターネット上の掲示板を通してルームメイト募集中の部屋を探して、月 500 ドル程度（62,000 円程度）で住むことができる部屋を見つけることができました。

他にも、ボストン小児病院の病院内へのアクセス許可を得るために、大学の保健センターにお願いして予防接種を受けさせていただいたり、診断書を発行していただいたりしました。また、工学系研究科への研究指導委託書の提出を指導教員の先生にお願いすることや留学保険の加入、日本から現地へ送金するための準備などを行いました。

3. 留学期間中

研究生活

留学先の Kohane 研究室では、ポスドクの Dr. Shutao Guo が取り組んでいるプロジェクトに参加するという形で研究に取り組みました。また、月に一回程度、Kohane 教授とミーティングを行い、研究の進捗状況を報告するとともに研究の進め方について議論を行いました。さらに、週1回の研究室ミーティングにも参加しました。研究室ミーティングでは毎週二人ずつ研究室のメンバーが自分の研究プロジェクトの進捗状況を報告するとともに、その内容について議論を行うということになっていました。私もこの研究室ミーティングで発表をする機会を2回いただき、非常に活発な議論をさせていただきました。



Kohane 教授と

私が主に取り組んだのは、高分子マイクロ粒子を用いた抗緑内障剤の開発です。緑内障は、超高齢社会を迎える我が国においても患者数の増加が見込まれる疾患です。現在、緑内障治療は点眼薬により眼圧を下

げることが主流とされています。しかし、点眼薬は効果の持続時間が短いため毎日の点眼が欠かせないうえ、服用が難しく、特にADL（日常生活動作）の低下した高齢者の場合負担が少なくありません。そこで、患者への負担がより低い方法で投与可能な新たな抗緑内障剤の開発を目指しました。

このような研究プロジェクトに取り組む中で、多くの研究室のメンバーから実験技術を学んだり、助言を受けたりすることができました。そればかりでなく、ハーバード大学医学部の実験施設をはじめ、マサチューセッツ工科大学（MIT）やマサチューセッツ眼科耳鼻科病院、ノースイースタン大学などのボストン内の優れた研究施設も行き来しながら研究プロジェクトを進めるといった贅沢な経験を積ませていただきました。

もちろん、英語でコミュニケーションをとりながら研究を進めることは容易なことではありませんでした。当初は、英語でメールを打ってアポ取りをしたり、問い合わせをしたりするのも慣れておらず、時間がかかってしまいました。しかし、数をこなせば慣れるもので、その点は大きく成長できたと思います。一方で、早口で話されるネイティブスピーカーの方との口頭での打ち合わせは最後まで苦労しました。特に、動物実験も行うので動物実験施設のスタッフと打ち合わせを行うことが多かったのですが、彼らは多忙ということもあって非常に早口で説明されました。ただでさえルールが多くそれを理解して覚えるだけでも大変という状況だったので、何度も聞き返したり確認したりせざるを得ませんでした。帰国してからもこのような状況にも対応できるよう英語学習の努力を続けていかねばと痛感いたしました。

Kohane 研究室は非常に和気あいあいとした明るい雰囲気の研究室でした。Kohane 教授が非常にジョークを好む方で、上記の研究室ミーティングでもいつも皆を笑わせてくださいました。そういうこともあってか、笑みの絶えない研究室でした。しかし、研究室のメンバーの研究に対する取り組みからはプロフェッショナルなものを強く感じました。研究経験が豊富なポスドクの研究員の方や研究医の方が多く占める研究室だからというものもあるのかもしれませんが、それぞれが素晴らしい専門性を持っていらっしゃる、多様な専門家が互いに協力しあい、異分野の専門家との交流を楽しみながら、全員が前向きで精力的に研究に取り組んでいる姿が印象的でした。私もそういったポジティブでプロフェッショナルな研究者になれるよう今後も精進していきたいと感じました。

現地での生活

ボストンは地下鉄やバスといった公共交通機関が充実しており、中心街も比較的コンパクトなので、自動車がなくても容易に様々な場所に移動できるという点が魅力的でした。加えて私の場合は、ボストン小児病院の福利厚生でボストンを走る地下鉄とバスが乗り放題の定期券を割引料金で購入することができたので、交通費も抑えることができました。

食事の面ですが、外食をすると東京と比べ物にならないほど非常にお金がかかってしまいますし、せっかくお金をかけたとしても食事の内容もあまり満足できるものでないことも多々あります。そこで、私は基本的に自炊をしていました。私は意外に感じたのですが、ボストンでも日本の調味料や食材は容易に手に入りますので、家で日本の家庭料理を味わうことができました。また、現地のスーパーで買い物をするとボストンで暮らす人々の生活に触れることができ興味深く感じました。加えて、英語で食材の名前を自然に覚えるので良い勉強にもなりました。

一方で、風邪をひいても日本のようにすぐに家や大学の近くの診療所に行って診てもらい、お薬を処方してもらおう、というわけにはいかないというのが少し不便に感じました。私は日本で留学保険を申し込んでいたのですが、その保険を利用できる診療所はボストンで1件だけでした。その上、電話での予約が必要です。咳が長引いて一度だけ電話での予約を試みたこともありましたが、2週間後まで予約でいっぱいでした。薬局で販売されている市販薬で乗り切るのが一番でした。



ボストン地下鉄グリーンライン

余暇の過ごし方

トータルで考えると、研究プロジェクトを何とか進めなければと、休日でも病院の図書館ないしカフェで黙々と調べものをしたり書類作成をしたりしていることが多くなってしまったのですが、もちろん楽しい思い出もたくさんつくることができました。

特に、日本でもよく知られているメジャーリーグ球団のボストン・レッドソックスの試合を観戦したことは忘れられない体験です。本拠地であるフェンウェイパークはメジャーリーグの球場の中でも最も古く、伝統があることで知られ、レッドソックスファンは非常に熱狂的であることで有名です。その球場の独特な雰囲気、選手と観客席の近さ、そして国家斉唱から始まるいかにもアメリカらしいひととき、その全てが感動的なものでした。そして、非常に幸運なことにレッドソックスの上原浩治選手と一緒に写真を撮らせていただけて、人生でここまで嬉しいことはあるのかというほどの思いをさせていただきました。

他にも、ボストン美術館などの観光名所を訪れたり、クラムチャウダーやオイスター、ロブスターなどのボストンの有名な食べ物を味わったり、かつて魔女裁判が行われたことから「魔女の街」として知られるセーラムというボストン近郊の町をルームメイトとともに訪れてハロウィンイベントを楽しんだり、半年間という比較的長い期間滞在しただけあってたくさんの貴重な体験をいたしました。



フェンウェイパークにて

4. 次年度参加する学生へのアドバイスなど

私自身、半年間も海外に滞在すること自体が初めての体験だったということもあり、チャレンジの連続で苦労や失敗もたくさんしました。しかし、こうした苦労や失敗の経験も今となっては良い思い出ですし、むしろ苦労や失敗の分だけ学ぶことも大きかったように感じます。海外留学では新しいことにチャレンジするチャンスがたくさん転がっていますので、ぜひ楽しみながら色々なことにどんどん挑戦してみると良いと思います。

■ グローバル演習 3：国際共同ワークショップ・スタジオ、外国人特別講義／セミナー

2015年度の実績は以下のとおりである。

5/23 「シャピロ先生を囲んでの国際ワークショップ」

5月23日のコアセミナーで、セントルイスのワシントン大学・医学部長のシャピロ (Larry J. Shapiro) 先生をお招きし、ワークショップを開催した。当日のワークショップは、3部構成で行われ、GLAFSのプログラム担当者である樋口範雄先生 (英米法) の挨拶で始まった。第1部では、GLAFS学生による研究活動 (6つのグループ) の紹介。第2部は、シャピロ先生から「Introduction of research activities for elderly society in Washington University」と「International collaboration」で認知症の予防及び治療法、そして研究における国際的な連携の重要性などについて、第3部では、樋口先生から「Elder law in Japan: how it should be developed」についてお話いただいた。

6/27 日米国際ワークショップ「高齢社会と法—高齢社会のすまいと医療」

6月27日に開催した本ワークショップは、ミズーリ州立大学で高齢者法の教鞭をとっておられるデイビッド・イングリッシュ教授をお迎えし、高齢者の生活に密接に関わる「住まい」と「医療」の2つのテーマにつき、日米共通の課題やそれぞれの国での対応の違いを探った。住まいセッションでは、日米共通の話題として高齢者のコミュニティケアの課題と可能性、日本の都市部の高齢化とその解消に向けた地方移住の可能性などが示された。続く、医療セッションでは、日米共通の話題として、高齢者の意思を残すことの難しさや、高齢者層と若年者層の間での資源配分の観点から公平さとはなにかを問う議論がなされた。

コアセミナー

専攻での専門的研究が、現実の高齢社会問題の解決に資するものとなるよう、視野を広げ、発想を深める研究指導（CS1）と様々な現場で活動されている第一人者の方をお招きし、お話を伺い、ディスカッションするケーススタディ（CS2）を下記のような日程で行った。

	内容	テーマ	講演者と肩書 または研究指導	区分
4月18日	昨年度展開した6つの共同研究を報告。今年度のすすめ方について意見交換した後、高齢者体験セットを装着し、高齢者への支援方法を検討した。	高齢者体験	GLAFS 教員	CS1
4月25-26日	これまでの岩手県大槌町の取り組み・コミュニティ形成に関する講義と、住民参加型健康チェック、住民へのインタビューを実施。それらを通して超高齢社会のコミュニティ形成について学ぶ機会を設けた。	岩手県大槌町大ヶ口多世代交流会館演習	GLAFS 教員	CS1 CS2
5月9日	認知症の人がより良く生きていくための支援の在り方と、最先端の研究を紹介していただいた。その後、認知症支援の在り方についてアイデアを出し合うGWを実施。	認知症の人への支援を生み出す	永田久美子（認知症介護研究・研修東京センター研究部長）*	CS2
5月23日	ワシントン大学のShapiro先生をお招きし、国際WSを実施。	ワシントン大学での高齢社会研究	Larry J. Shapiro（ワシントン大学教授）	CS2
		Elder law in Japan how it should be developed	樋口範雄（法学政治学研究科教授）*	CS2
5月30日	学生による研究の進捗の発表と教員からのフィードバック。	個別研究指導	GLAFS 教員	CS1
6月6日	Grounded theory 法と、社会調査方法の講義。演習方式で、Quality of Life/ Community/ Society を測る研究プロジェクトに関するGWを実施。	質的研究の基礎	山本則子（医学系研究科教授）	CS2
		人・社会を「測定する」とは～社会調査法を中心に～	菅原育子（GLAFS 特任講師）*	CS2
6月20日	地域密着型サービス、一般介護予防・日常生活総合事業等、コミュニティでの暮らしを支える制度と具体的支援策について、お話を伺った。	地域包括ケアシステムの展望と次世代への期待	宮島俊彦（内閣官房社会保障改革担当室長前厚生労働省老健局長）*	CS2
		小規模多機能居宅介護支援事業の実態	柴田範子（NPO 法人「楽」理事長）	CS2

6月27日	(2期生) 新宿戸山団地「暮らしの保健室」の見学を通して、地域で支える訪問看護を現場学習。	地域を支える訪問看護	秋山正子 (株)ケアーズ 白十字訪問看護ステーション統括所長)*	CS2
	(1期生) 「住まい」と「医療」を中心に、日米の対応の共通点や課題を探るワークショップに参加。	日米国際ワークショップ 高齢社会と法—高齢者の住まいと医療、その他の課題	デイビッド・イングリッシュ (ミズーリ州立大学教授)	CS2
7月4日	世界の取り組みと秋田市の取り組みを比較し、活力のある超高齢社会について検討を行った。	WHOのエイジ・フレンドリー戦略について	狩野恵美 (WHO 神戸センター)	CS2
		秋田市のエイジ・フレンドリー・シティの取り組みについて	斉藤恵美子 (秋田市役所)	CS2
7月11日	コミュニティが主体となって行う日常生活支援・介護予防の全国事例を学習。		全国コミュニティケアサミット	CS2
7月18-19日	民生委員、保健師、自治会長、NPO 支援団体の方にインタビューをし、コミュニティ活動のファシリテーション案を立案した。	岩手県大槌町大ヶ口多世代交流会館演習	GLAFS 教員	CS1 CS2
7月25日	ロボティクス、情報技術などによる身体的・認知的支援の最前線、研究に関する講義。高齢者を支援する ICT について、GW を実施。また、実際にウェアラブル機器の体験を行った。	高齢者のいる現場を支援する ICT の現状	関根千佳 (同志社大学政策学部教授/株)ユーティット会長兼シニアフェロー)*	CS2
		高齢者を支援する最近の ICT の研究の状況	檜山敦 (情報理工学系研究科特任講師)*	CS2
10月3日	シニアを対象としたブログメディアのコンテンツについてお話を伺った。「シニア対象のブログメディアの課題とその解決方法」について GW を実施。	シニアにとってのメディアを考える	蛭川真夫 (株)ジェイ・キャスト代表取締役会長兼社長)	CS2
10月17日	日本版 CCRC と地域包括ケアのまちづくりについて、現場と政策立案の両方の立場からお話を伺った。「生涯活躍のまち」を考える GW を実施。	人がつながり、支えあい、ともに暮らすまちづくり	雄谷良成 (社会福祉法人佛子園理事長)	CS2
		地方創成と生涯活躍のまち	高橋和久 (前地方創生本部 CCRC 担当)	CS2
11月7日	高齢者のための新たなアミューズメントとして何が期待できるか、事業者側の立場からお話を伺った。GW では高齢者のためのゲーム / アミューズメントビジネスを、学生が企画した。	カラオケによる高齢者の健康維持・増進	戸塚圭介 (株)第一興商)	CS2
		ゲームビジネスとゲームにおけるシニアへの取り組み	車田貴之 (株)コナミデジタルエンタテインメント)	CS2
11月14日	生命保険事業を中心に、超高齢社会に対応するビジネスモデルのお話を伺った。学生による研究の進捗の発表と教員からのフィードバック。	超高齢社会の到来とビジネスモデルの考察～生命保険事業を中心に	野呂順一 (株)ニッセイ基礎研究所代表取締役社長)*	CS2
		個別研究指導	GLAFS 教員	CS1
11月21-22日	学生が立案したイベントプログラムを実施。その後、役場職員を交え、振り返りをした。	岩手県大槌町大ヶ口多世代交流会館演習	GLAFS 教員	CS1 CS2
11月28日	サービス付き高齢者向け住宅、有料老人ホーム、在宅ケアなど、具体的なケースを比較しつつ、高齢者の新しい住まい方に関してお話を伺い、GW を実施した。	脱施設化の意義と在宅ケアの方法	橋本俊明 (株)メッセージ会長)	CS2
		ベネッセスタイルケアの高齢者向けホーム	滝山真也 (株)ベネッセスタイルケア代表取締役社長)*	CS2
12月5日	日本の高齢者医療の変遷や、2025 年に向けての課題、現場で求められていること等についてお話を伺った。高齢者医療の今後に求めるもの、求められるものについて GW を実施。	日本の高齢者医療の進歩と課題—教育者としての見解—	大内尉義 (虎ノ門病院院長)*	CS2
		日本の高齢者医療の進歩と課題—現場からの見解—	太田秀樹 (医療法人アスム理事長)*	CS2

12月12日	超高齢社会の課題に対する大和ハウスグループの取り組みと、兵庫県三木市における団地再生のケースについてお話を伺った。結婚や就職などで居住選択をする場合に住みやすい街とはどういうものかを検討するGWを実施。	超高齢社会の課題に対する大和ハウスグループの取り組み	濱 隆 (大和ハウス工業(株)取締役常務執行役員)*	CS2
		団地再生の取り組みについて～三木市緑が丘・青山地区～	脇濱直樹 森田博昭 川崎将司 (大和ハウス工業(株)大阪都市開発部)	CS2
1月23日	川崎市と大田区の高齢者施策についてお話を伺った。地域の高齢者ネットワークづくりについてGWを実施。	川崎市の高齢者自立支援事業について	広岡真生 (川崎市総務局)	CS2
		大田区の高齢者見守り事業について	澤登久雄 (大田区地域包括支援センター)	CS2
2月13日	学生による研究の進捗の発表と教員からのフィードバック。	個別研究指導	GLAFS 教員	CS1
3月14日	学生による研究の進捗の発表と教員からのフィードバック。	個別研究指導	GLAFS 教員	CS1

*はプログラム担当者

3. 合宿

8月2日から3日にかけて、夏期合宿がKKR 熱海で開催された。今年度入学の2期生が加わり、昨年より20名以上多い86名の参加。1日目には「活力ある超高齢社会とは？どのような指標で測るか？」についてセミナーとグループワークが行われ、課題の共有化が図られた。2日目は午前・午後とも個人研究進捗状況の発表が中心で、担当教員やプログラム担当教員が個別に指導をした。

〈合宿スケジュール〉

1日目	
12:00	集合
12:30～12:40	開会の辞 全体スケジュール説明
	
	夏期合宿、全体会場の様子
12:40～13:20	<p>セミナー「コミュニティの活力」菅原育子 (高齢社会総合研究機構特任講師)</p> <p>菅原育子特任講師よりグループワークを行うにあたって、1. 自分たちの共同研究は「活力ある超高齢社会づくり」にどのようにアプローチするものか、2. 自分たちの共同研究の成果を示すためには、何を指標にとってどう測ればいいのか、というふたつの課題が与えられた。</p>

13：20～14：20	 <p data-bbox="389 846 1399 981">グループワーク「コミュニティの活力」 共同研究のテーマごとに8つのグループに分かれ、議論する様子。それぞれに内外のプログラム教員、講師、助教、研究員が付き、活発な意見が交わされた。約1時間の討議の後、再び大会議室に集まり、その成果が発表された</p>
14：20～14：30	休憩
14：30～15：30	グループワーク発表（1）
15：30～15：40	休憩
15：40～16：25	グループワーク発表（2）
16：25～16：45	休憩
17：00～17：40	講演1 森賢二（トヨタ自動車株・産学ネットワーク「ジェロントロジー」会員） 「超高齢社会におけるトヨタグループの取り組み」
17：40～18：20	講演2 渡邊峰生（ボッシュ株・産学ネットワーク「ジェロントロジー」会員） 「博士人材のキャリアパス」
18：20～19：00	休憩
19：00～21：00	夕食・懇談会
2日目	
7：30～9：30	朝食
9：30～11：05	コース生個人研究発表 4室に分かれて少人数で行われたため、教員との距離も近く、所属する専攻科以外の教員からアドバイスを受けるなど、リーディング大学院ならではの指導があった。
11：05～11：20	休憩
11：20～12：00	講演3 岩井晶佳（茅ヶ崎市企画経営課課長補佐） 「超高齢社会に向けた行政の取り組み」
12：00～13：00	昼食
13：00～14：40	コース生個人研究発表
14：40～15：00	大方潤一郎プログラム・コーディネーターの総括
15：00	解散

4. 国際・産学活動

国際セミナー・学会等参加状況

8/19 国際交流特別セミナー「中国高齢者法の現在とその課題」

香港中文大学法学部で高齢者法の教鞭をとっておられる Mimi Zou 氏と、共同研究者であるオックスフォード大学 Ethox センターで生命倫理を研究しておられる Michael Dunn 氏をお招きして、セミナーを開いた。2012年に中国で成立した高齢者の権利保護法と、近年成立予定の高齢者虐待防止法を軸に高齢者を社会の中でどのように捉えるかの視点からのお話をいただいた。質疑では、成人した子供に対し、高齢者の親の訪問を義務付ける高齢者の権利保護法が話題の中心となり、罰則規定の有無や一人っ子政策との整合性などについての論議が交わされた。

10/8 香港中文大学高齢社会研究所 創設記念会議「高齢者にやさしいコミュニティづくりをめざして」

秋山弘子特任教授が、香港中文大学高齢社会研究所の主催する国際会議「高齢者にやさしいコミュニティづくりをめざして」に日本の講演者として招待された。また、香港大学 SauPo 高齢社会研究センターを訪問。元ディレクターの Terry Lum 教授、現ディレクターの Vivian Wo 教授とそれぞれの大学の高齢社会研究、教育に関する国際連携等について意見交換をした。

10/19 第10回アジア・オセアニア国際老年学会 (IAGG)

第10回アジア・オセアニア国際老年学会 (The 10th International Association of Gerontology and Geriatrics - Asia/Oceania 2015 Congress: IAGG) がタイのチェンマイで開催され、秋山弘子特任教授、秋下雅弘教授が招待講演を行ったほか、飯島勝矢准教授と木全真理特任助教がそれぞれポスター発表を、共同研究1のグループが研究成果を発表した。今回のテーマは「Healthy Aging Beyond Frontiers」で、サブテーマは「Clinical Sciences」「Biological Sciences」「Behavioral and Social Sciences」「Policy, Planning and Practice」であった。

11/18~22 第68回アメリカ老年学会 (GSA)

第68回 GSA2015 (Gerontological Society of America) がフロリダのオーランドで開催され、Biological Sciences、Behavioral & Social Sciences、Health sciences、Social Research Policy & Practice、Interdisciplinary のセッションが行われた。本プログラムからは秋下雅弘教授、飯島勝矢准教授、村山洋史特任講師、孫輔卿特任助教、西野亜希子特任助教がポスター発表を、さらに共同研究3と5がポスター発表を行った。

8/26~28 IARU ALH Steering Committee

コペンハーゲンで開催されたIARU ALH (Aging, Longevity and Health) Steering Committeeに秋山弘子特任教授と飯島勝矢准教授が出席。飯島准教授がショート・プレゼンテーション「“Healthy Aging & Frailty Prevention” -Upstream preventive strategy for age-related sarcopenia」を行った。

産業界との共同研究

ボッシュ株式会社との共同研究

本年度より、高齢者の支援ニーズに関する研究を開始した。現在は、様々な身体・認知状況にある高齢者において必要な支援に関するニーズ調査を行った段階で、今後はこの知見を基に、高齢者の日常行動を支援するための技術検討を行っていく予定である。

5. シンポジウム

3/5 国内シンポジウム2016「ヘルシーエイジング社会をめざして」

東京大学浅野キャンパス武田ホールで開催した。第1部は学生による共同研究の成果発表、第2部前半はGLAFS内外の教員や関係者からの報告。後半では、上野千鶴子先生（東京大学名誉教授・NPO法人ウイメンズアクションネットワーク〈WAN〉理事長）の講演があり、上野先生には、その後のパネルディスカッションでも学生たちと意見交換を行っていただいた。

〈プログラム〉

第1部 GLAFS 共同研究成果報告 (10:00~12:30)

本プログラムでは学生が分野を超えてチームになり、高齢社会の重要テーマについて共同研究を行っているが、本年度で2年目となるその成果報告とともに、残された課題や今後の方針について意見交換を行った。

【各グループの発表テーマ (15分発表+質疑応答5分)】

グループ1「高齢者の終末期に向けた意思決定支援方法の検討」

グループ2「在宅介護サービス支援の適正な配分に関する研究」

グループ3「弱らない/弱っても暮らし続けられる住環境のデザイン」

グループ4、5「超高齢社会における地域課題解決に向けたコミュニティ活動のファシリテーション」

グループ6「有料老人ホーム入居高齢者の食形態と心身の健康に関する研究」

グループ7「高齢社会を支援するロボティクス」

第2部 ヘルシーエイジング社会をめざして（13：30～17：30）

■報告テーマ1：慢性疾患のケア・尊厳ある生活を支える方法について

在宅を含む地域包括ケアシステム、意思決定法学、安心・安全な住宅と住環境の整備、ロボット・工業技術等の分野から、報告と課題検討、今後の進め方について討議した。

【登壇者とテーマ】

「地域包括ケアの推進」辻哲夫（高齢社会総合研究機構特任教授）

「意思決定と法の役割」樋口範雄（法学政治学研究科教授）

「高齢者のケアと居住環境」永田智子（医学系研究科准教授）

「ヘルシーエイジング社会をめざして：安全・安心な暮らし—転倒予防の観点から」田中敏明（高齢社会総合研究機構特任教授）

「超高齢社会におけるロボット技術の活用」鎌田実（新領域創成科学研究科教授）

■報告テーマ2：健康増進・虚弱化予防・シニアアミューズメントの最前線

リビング・ラボ、生活習慣病予防・フレイル予防、高齢者向け生きがい創出産業、コミュニティ活動支援等の分野から、報告と課題検討、今後の進め方について討議した。

【登壇者とテーマ】

「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」秋山弘子（高齢社会総合研究機構特任教授）

「まちぐるみでの『フレイル予防』」飯島勝矢（高齢社会総合研究機構准教授）

「ICTを活用した中高年女性の虚弱化予防」檜山敦（情報理工学系研究科特任講師）

「雑誌づくりのヨコとタテ」上田啓介（榊木楽舎 経営企画室室長・広告部部長）

■特別講演「脱近代家族と選択縁のネットワーク」上野千鶴子（東京大学名誉教授、NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク〈WAN〉理事長）

家族に代わる代替ネットワークは何か。アソシエーション（共同の目標に向かって結集するような集団）、そこに属する「選択縁」の可能性についてお話しいただいた。

■GLAFS 学生主体パネルディスカッション

「閉じこもり高齢者へのアプローチ——GLAFS 学生は、如何なる超高齢社会をつくりたいか」

高齢者の閉じこもりという視点から、4人の学生による問題提起があった後、上野千鶴子先生と大方潤一郎教授を交え、意見交換がなされた。

【学生による論点】

「超高齢社会におけるコンビニの可能性」松本博成（医学系研究科・健康科学・看護学専攻 修士課程2年）

「高齢者の閉じこもりと地域医療」今枝秀二郎（工学系研究科・建築学専攻 修士課程1年）

「地域活動の場をデザインする」須藤誠（教育学研究科・生涯学習基盤経営コース 博士課程1年）

「望ましい高齢社会」内山瑛美子（情報理工学系研究科・知能機械情報学専攻 修士課程2年）



「GLAFS 学生主体パネルディスカッション」の様子

12/7 高齢者クラウドシンポジウム（後援）

日経カンファレンスルームで開催された東京大学主催の「高齢者クラウドシンポジウム」を後援した。超高齢社会における諸問題、特に「高齢者クラウド」の研究開発を取り巻く情勢、その社会実装について様々な議論が展開された。一般参加者は111名。Ustream 配信には37アクセスがあった。参加者の多くは研究所・大学・メーカーに所属する研究者であり、省庁勤務者、議員、ジャーナリスト、学生、退職した高齢者などからも参加があった。

6. 研究会・セミナー

イブニングセミナー

助教・研究員を中心とした若手研究者の最先端の研究や取り組みの成果の報告、及びそれらを共有する場として、2015年度からスタートした。全7回で、そのうち報告があったのは6回だった。

〈各回の話題提供者とテーマ〉

5/25 第1回 「高齢社会にコミュニティは必要か？」

後藤純特任講師、堤可奈子特任助教、福井廣貴特任助教

6/26 第2回 「高齢社会の活力と豊かさ：どう定義し、どう測るか？」

菅原育子特任講師、村山洋史特任講師、都市工学博士課程・似内遼一

10/1 第4回 「アクティブシニア向けの健康・スポーツプログラムについて」

森谷路子（株）コナミスポーツクラブ プロデューサー

「シニア向けフィットネスプログラムの体験」

内山忠夫（同プロデューサー）

- 10/5 第5回 「Growing Old with Japan」
J. C. Campbell (ミシガン大学名誉教授・客員教授)
- 11/30 第6回 「要介護認定がどのようにされるのか」
渡辺良明 (有)ヴァウ 訪問リハステーションとつくん所属・松戸市介護認定審査
会委員・柏市介護支援専門員協議会会長・千葉県介護支援専門員協議会理事・柏
市在宅リハビリテーション連絡会理事)
- 1/18 第7回 「VR (バーチャルリアリティ) 技術を利用し時空を超えてコミュニティのつなが
りを創り出す」
仲谷正史特任研究員

ジェロントロジー研究会

2015年度から始まった若手教員中心の研究交流会「ジェロントロジー研究会」では、特任助教から次のような研究発表があった。

〈各回の話題提供者とテーマ〉

- 12/14 第1回 「高齢者・障がい者を支援する情報技術」
三浦貴大(専門:福祉工学・ヒューマンインタフェース・アクセシビリティ音響工学)
「高齢者・障がい者の要求からみた住宅計画」
西野亜希子 (専門:建築計画・住宅改修)
「社会の変化に対応してきた訪問看護のニーズと実践の体系化の試み」
木全真理 (専門:在宅看護)
- 1/12 第2回 「生涯学習・社会参加を支援する基盤形成の方法」
荻野亮吾 (専門:社会教育・生涯学習)
「SNPを用いたC型肝癌感受性遺伝子の探索」
室山良介 (専門:消化器内科学)
- 2/9 第3回 「賃金変更問題における合意原則と合理的変更法理」, 「高年齢者をめぐる諸労働法
的問題」
朴孝淑 (専門:労働法)
「血管老化から理解する老年疾患の発症機序」
孫輔卿 (専門:老年医学)
- 3/8 第4回 「就業状態の変化と健康—パネルデータの二次分析から」
福井康貴 (専門:社会学)
「食品成分による筋肉萎縮へのアプローチ」
橋詰力 (専門:分子生物学・栄養学)

4. 若手研究者による研究成果

1. 論文等

2014年度

■ 後藤純（特任助教）

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 後藤純：「コミュニティを育むまちづくり」, Geriatric Medicine, 52(1), 43-46, 2014.
2. 後藤純, 辻哲夫：「震災復興になぜ医療・介護システムが重要か～都市部と被災地での経験からの提案」, Consultants, vol. 263, 6-9, 2014.

【著書、編著】

1. (共著) 後藤純：「4章4節 多職種間の構造的なギャップを乗り越えるために」「5章2節 顔の見える関係会議」「6章4節 住民が主体となる在宅医療を含む在宅ケアの市民啓発」, 東京大学高齢社会総合研究機構編著, 『地域包括ケアのすすめ 在宅医療推進のための多職種連携の試み』, 東京大学出版会, pp 61-62, 91-110, 160-190, 2014.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 木全真理, 飯島勝矢, 吉江悟, 後藤純, 井堀幹夫, 辻哲夫：「ケーススタディから創出された多職種連携ルールづくりによるネットワーク構築」, 第16回日本在宅医学会大会, 2014.
2. 後藤純：「超高齢社会の近隣住区論：公共・民間公益施設の立地を中心に」, 『都市計画の現代的トピックスから都市計画制度改正の方向性を探る』, 日本都市計画学会都市計画制度研究会, 第49回日本都市計画学会論文発表会大会ワークショップ, 2014.

■ 木全真理（特任助教）

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 木全真理：「超高齢社会のまちづくり・家づくり 臨床に役立つ Q&A 訪問看護が家づくり・まちづくりに関わる機能はありますか」, Geriatric Medicine 52 (1), 61-63, 2014.
2. 梅宮千穂, 吉田みどり, 真貝和江, 石原昌子, 木全真理, 吉江悟：「市町村が果たす医療・介護提供支援：柏市の訪問看護支援から」, 保健師ジャーナル, 70 (11), 966-973, 2014.

【著書、編著】

1. 辻哲夫, 飯島勝矢, 久保真人, 後藤純, 吉江悟, 木全真理, 土屋瑠見子, 山本拓真, 廣瀬雄一：東京大学高齢社会総合研究機構編著, 『地域包括ケアのすすめ 在宅医療推進のための多職種連携の試み』, 東京大学出版会, pp 123-153, 2014.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 木全真理, 飯島勝矢, 吉江悟, 後藤純, 井堀幹夫, 辻哲夫:「ケーススタディから創出された多職種連携ルールづくりによるネットワーク構築」, 第16回日本在宅医学会大会, 226, 第16回日本在宅医学会大会, 浜松, 2014.
2. 西野亜希子, 廣瀬雄一, 笈田幹弘, 木全真理, 後藤純, 大月敏雄, 西出和彦:「要介護度中重度になってもサポートを得ながら住み続けられる住宅のあり方に関する研究」, 『柏市における高齢者の在宅継続可能要因に関する研究(その1)』, 日本建築学会大会梗概集, 1173-1174, 2014.

■ 三浦貴大 (特任助教)

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文、著書】

1. 中山真里, 檜山敦, 三浦貴大, 矢富直美, 廣瀬通孝:「高齢者の柔軟な時間就労のための時間Mosaic形成支援システム」, 情報処理学会誌, 55(1), 177-188, 2014.
2. 上田麻理, 三浦貴大, 太田篤史:「何のためにその音があるのかを知らせること—視覚障害者の移動支援機器に対する非利用者の認知度—」, 日本音響学会誌, 70(5), 270-272, 2014.

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. K. Yabu, T. Miura, M. Sakajiri, M. Ueda, A. Hiyama, M. Hirose, T. Ifukube: “Accessibility information gathered by a field assessment using a social platform to share accessibility information among people with disabilities.” NTUT Education of Disabilities, Vol. 12, 1-5, 2014.

【国際会議における発表】

全て査読有

1. T. Miura, M. Sakajiri, M. Eljailani, H. Matsuzaka, J. Onishi, T. Ono: “Accessible Single Button Characteristics of Touchscreen Interfaces under Screen Readers in People with Visual Impairments.” Computers Helping People with Special Needs, Lecture Notes in Computer Science, 8547, 369-376, 2014. 7.
2. T. Miura, M. Sakajiri, H. Matsuzaka, M. Eljailani, K. Kudo, N. Kitamura, J. Onishi, T. Ono: “Usage Situation Changes of Touchscreen Computers in Japanese Visually Impaired People: Questionnaire Surveys in 2011-2013.” Computers Helping People with Special Needs, Lecture Notes in Computer Science, 8547, 360-368, 2014. 7.
3. T. Kojima, A. Hiyama, T. Miura, M. Hirose: “Training Archived Physical Skill through Immersive Virtual Environment.” Human Interface and the Management of Information, Information and Knowledge in Applications and Services, Lecture Notes in Computer Science, 8522, 51-58, 2014. 6.
4. M. Izumi, T. Kikuno, Y. Tokuda, A. Hiyama, T. Miura, M. Hirose: “Practical Use of a Remote Movable Avatar Robot with an Immersive Interface for Seniors.” Universal Access

in Human-Computer Interaction, Aging and Assistive Environments, Lecture Notes in Computer Science, 8515, 648–659, 2014. 6.

5. Y. Nagai, A. Hiyama, T. Miura, M. Hirose: “T-echo: Promoting Intergenerational Communication through Gamified Social Mentoring.” Universal Access in Human-Computer Interaction, Design for All and Accessibility Practice, Lecture Notes in Computer Science, 8516, 582–589, 2014. 6.
6. M. Ueda, T. Miura, A. Ota: “The recognition ratio of acoustic support systems for people with visual impairments in nonusers.” Proc. 11th International Congress on Noise as a Public Health Problem (ICBEN) 2014, 5 pages, Nara, Japan, 2014. 6.
7. J. Onishi, T. Miura, M. Sakajiri, T. Ono: “Real-time image sharing software for the blind.” Proc. IEEE SMC 2014, 1076–1081, 2014.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 北村直也, 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東: 「タッチスクリーン機器における視覚障害者に使いやすいボタン配置に関する検討」, 第13回 情報科学フォーラム, 427–428, 2014.
2. 小嶋泰平, 檜山敦, 三浦貴大, 長谷川広, 廣瀬通孝: 「高齢者のためのVR 歩行姿勢可視化システム」, 第19回 日本バーチャルリアリティ学会大会論文集, 278–281, 2014.
3. 山田浩史, 檜山敦, 三浦貴大, 長谷川広, 廣瀬通孝: 「ウェアラブルデバイスを用いた高齢者の歩行状態分析」, 第19回日本バーチャルリアリティ学会大会論文集, 632–635, 2014.
4. 三浦貴大, 工藤輝希, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東: 「視覚障害者におけるタッチスクリーン端末の習熟状況と利用方法に関するアンケート調査」, 第40回感覚代行シンポジウム, 4 pages, 産業技術総合研究所 臨海副都心センター, 2014. 12.

■ 荻野亮吾 (特任助教)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文、著書】

1. 荻野亮吾: 「母親の学校参加意思の規定要因の分析: 保護者の行動と認知に着目して」, SSJDA Research Paper Series, 53, 179–195, 2015.
2. 笹川孝一, 牧野篤, 荻野亮吾, 中川友理絵, 金宝藍: 「社会教育学の視点からESDを問い直す: 『社会教育としてのESD』プロジェクトの研究成果から」, 環境教育, 24 (3), 4–17, 2015. 査読有
3. 荻野亮吾: 「公民館を拠点とした社会関係資本の再構築の過程: 大分県佐伯市の『協育ネットワーク構築推進事業』を事例として」, 日本公民館学会年報, 11, 104–114, 2014. 査読有
4. 荻野亮吾: 「地域の学習資源を活かす社会教育施設の連携の形とは」, 社会教育, 10–15, 2014.

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 荻野亮吾: 「公民館をめぐる政策の動向」, 日本公民館学会年報, 11, 179–181, 2014.
2. 中村由香, 中川友理絵, 西川昇吾, 松尾有美, 荻野亮吾: 「公民館研究の動向」, 日本公民館学

会年報, 11, 173-178, 2014.

【著書、編著】

1. (共著) 荻野亮吾:「第5章 地域との連携:公共図書館や住民との連携」「第13章1 台湾の読書教育」, 立田慶裕(編),『読書教育の方法:学校図書館の活用に向けて』,学文社, pp 70-84, 189-196, 2014.
2. (共著) 荻野亮吾:「誰が民主政治に参加しないのか?:教育が投票に与える影響」, 田辺俊介(編),『民主主義の「危機」:国際比較調査からみる市民意識』, 勁草書房, pp 63-87, 2014.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 牧野篤, 李正連, 新藤浩伸, 荻野亮吾, 侯婷婷, 中村由香, 大山宏, 中川友理絵, 相良好美, 西川昇吾, 松田弥花, 松尾有美:「住民の社会参加と地域活動に関する調査研究」, 日本公民館学会第13回研究大会, 木更津市中央公民館(千葉県・木更津市), 2014. 12. 6.
2. 荻野亮吾:「地域におけるインフォーマルな学習についての理論的検討」, 日本社会教育学会第61回研究大会, 福井大学(福井県・福井市), 2014. 9. 27.
3. 荻野亮吾:「コミュニティと社会教育に関する社会関係資本の観点からの考察」, 日本教育社会学会第66回大会, 松山大学(愛媛県・松山市), 2014. 9. 14.
4. 荻野亮吾, 都甲友理絵:「ESDと社会教育を巡る論点の整理」, 2014年度日本社会教育学会6月集会(ラウンドテーブル), 神奈川大学(神奈川県・横浜市), 2014. 6. 8.
5. 荻野亮吾:「アメリカにおける成人学習論とナラティブ研究の動向」, 日本社会教育学会プロジェクト研究「社会教育研究における方法論の検討」第7回研究会, 筑波大学(東京都・文京区), 2014. 4. 20.

■ 孫輔卿(特任助教)

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文、著書】

1. Iijima K, Ito Y, Son BK, Akishita M, Ouchi Y: “Pravastatin and olmesartan synergistically ameliorate renal failure-induced vascular calcification.” J Atheroscler Thromb, 21(9): 917-29, 2014. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. Son BK, Suzuki T, Sawaki D, Aizawa K, Zhan H, Ishida J, Matsumura T, Friedman S.L., Nagai R, Komuro I: “Novel mechanism of aortic dissection involving regulation of dendritic cells and macrophage by granulocyte/macrophage colony stimulating factor.” 第78回日本循環器学会総会, 東京, 3. 21-23, 2014.
2. Zhan H, Suzuki T, Aizawa K, Sawaki D, Ishida J, Son BK, Manabe I, Miyagawa K, Nagai R, Komuro I: “Doxorubicin-induced Cardiotoxicity is Regulated by Ataxia Telangiectasia Mutated (ATM) in Cardiac Fibroblasts.” 第78回日本循環器学会総会, 東京, 2014. 3. 21-23.

■ 室山良介（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書】

全て査読有

1. Shibata, C., M. Ohno, M. Otsuka, T. Kishikawa, K. Goto, R. Muroyama, N. Kato, T. Yoshikawa, A. Takata and K. Koike: “The flavonoid apigenin inhibits hepatitis C virus replication by decreasing mature microRNA122 levels.” *Virology* 462-463: 42-48, 2014.
2. Sato, M., N. Kato, R. Tateishi, R. Muroyama, N. Kowatari, W. Li, K. Goto, M. Otsuka, S. Shiina, H. Yoshida, M. Omata and K. Koike: “Impact of PNPLA3 polymorphisms on the development of hepatocellular carcinoma in patients with chronic hepatitis C virus infection.” *Hepatol Res* 44(10): E137-144, 2014.
3. Sato, M., N. Kato, R. Tateishi, R. Muroyama, N. Kowatari, W. Li, K. Goto, M. Otsuka, S. Shiina, H. Yoshida, M. Omata and K. Koike: “IL28B minor allele is associated with a younger age of onset of hepatocellular carcinoma in patients with chronic hepatitis C virus infection.” *J Gastroenterol* 49(4): 748-754, 2014.
4. Ohno, M., M. Otsuka, T. Kishikawa, C. Shibata, T. Yoshikawa, A. Takata, R. Muroyama, N. Kowatari, M. Sato, N. Kato, S. Kuroda and K. Koike: “Specific delivery of microRNA93 into HBV-replicating hepatocytes downregulates protein expression of liver cancer susceptible gene MICA.” *Oncotarget* 5(14): 5581-5590, 2014.

【国際会議における発表】

1. Ryosuke Muroyama, Kaku Goto, Wenwen Li, Yasuo Matsubara, Ryo Nakagawa, Sayaka Ito, Naoya Kato: “HBV induces an “HBV-induced HCC associated gene MICA through transcriptional activation in SNPs dependent manner.” 2014 International Meeting on Molecular Biology of Hepatitis B Virus, Los Angeles, USA, 2014. 9. 4. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 室山良介, 後藤覚, 松田浩一, 田中靖人, 茶山一彰, 溝上雅史, 小俣政男, 小池和彦, 加藤直也: 「自然免疫を司る MICA の B 型および C 型肝炎における役割」, 第 50 回日本肝臓学会総会, 東京, 2014. 5. 30.

■ 福井康貴（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書】

1. 福井康貴: 「若年・壮年非正規労働者の生活実態—経済状況, 生活意識に着目して」, 『労働政策研究報告書 No. 164 壮年非正規労働者の仕事と生活に関する研究—現状分析を中心として』, 労働政策研究・研修機構, 147-178, 2014. 5.
2. 福井康貴: 「近現代日本の大卒労働市場に関する社会学的研究—選抜メカニズムに着目して」, 東京大学人文社会系研究科博士論文, 2014. 6. 査読有

3. 福井康貴：「個人の希望から社会の希望へ—社会意識のミクローマクロリンク」, 『理論と方法』, 数理社会学会, 第 29 卷 2 号, 307-22, 2014. 11. 査読有

■ 朴孝淑 (特任助教)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文、著書】

1. 朴孝淑：「합리적인 파견·도급의 구별기준에 관한 연구 (合理的な派遣・請負の区別基準に関する研究)」, 韓国雇用労働部, 95-151 頁, 2014. 11.
2. 朴孝淑：「일본의 취업규칙에 의한 근로조건의 불이익변경 법리—한국과 일본의 비교법적 관점에서— (日本の就業規則による労働条件の不利益変更法理—日韓の比較法的観点から—)」, 노동법학 (労働法学) 第 50 号, 67-105, 2014 年 6 月号. 査読有
3. 朴孝淑：「韓国における交渉窓口単一化制度—導入の意義と課題」, 労働問題リサーチセンター編『企業行動の変化と労働法政策の課題』, 186-211, 財団法人日本 ILO 協会, 2014.
4. 朴孝淑：「韓国における就業規則の不利益変更への集团的同意：不利益変更の『有効要件』なのか『拘束力要件』なのか」, 日本労働研究雑誌 643 号 [特別号], 105-114, 2014. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 朴孝淑：「韓国における就業規則の不利益変更への集团的同意：不利益変更の『有効要件』なのか『拘束力要件』なのか」, 日本労働研究雑誌 643 号 [特別号], 105-114, 日本労使関係研究協会, 慶応大学, 2014.
2. 朴孝淑：「일본의 취업규칙에 의한 근로조건의 불이익변경법리—한·일의 비교법적 관점에서 (日本の就業規則による労働条件の不利益変更法理—日韓の比較法的観点から—)」, 労働法学, 韓国労働法学会, 第 50 号, 67-105, 韓国漢陽大学 (労働法学会), 2014.

■ 畑中綾子 (特任助教)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文、著書】

1. 畑中綾子：「医療技術の発展と司法の政策形成・法創造機能—日米比較を基に」, お茶の水女子大学人間文化創成論叢, 17 卷, 201-210, 2015. 3. 査読有
2. 畑中綾子：(研究分担者)「我が国の医療事故調査制度の運用と今後の司法との関係」, 厚生労働科学研究費補助金「医療安全をめぐる応答的規制 (Responsive Regulation)：民事・刑事・行政の多元的な法的介入と医療安全対策の相互関係を探る」(研究代表者：岩田太), 平成 26 年度報告書, 2015. 3.
3. 畑中綾子：「製造物責任法における医薬品の指示・警告上の欠陥」, 年報医事法学 29, 155-160, 日本評論社, 2014. 9.
4. 畑中綾子：「医薬品の健康被害における国の賠償責任と政策の相互作用—国の『規制権限の不行使』が争われた事例に着目して」, 法学会雑誌, 55 卷 1 号, 205-246, 2014. 7.

【著書、編著】

1. 結城康博, 佐藤純子, 吉田輝美, 畑中綾子編著:「第二章高齢社会における医療保険制度」, 『入門社会保障制度～社会保障制度と税の一体改革でこう変わる』, ぎょうせい, pp 37-49, 2014. 10.

【国際会議における発表】

すべて査読有

1. Ryoko Hatanaka: “What does GLAFS aim to?” poster, Washington University in St.Louis, McDonnell international scholarship Academy, 5th international symposium, St.Louis, U.S, 2014. 10.
2. Ryoko Hatanaka: “Government Compensation Liability for Side-effect of Pharmaceutical Drugs-The lawsuit against the anti-cancer drug Iressa as an example-” World Association of Medical Law, Bali, Indonesia, 2014. 8.

■ 西野亜希子 (特任助教)

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文、著書】

1. 西野亜希子, 佃和憲, 岡本和彦, 西出和彦:「退院患者の在宅復帰に求められる住宅改修に関する研究 ある回復期リハビリテーション病院退院患者の事例を通して」, 日本建築学会計画系論文集, 巻号:700, 1283-1292, 2014. 6. 査読有
2. 西野亜希子, 廣瀬雄一, 西出和彦:「応急仮設住宅の高齢者向け手すり設置改修の効果と課題」, 日本インテリア論文報告集, 25号, 9-15, 2015. 3. 査読有
3. 西野亜希子, 廣瀬雄一, 笈田幹弘, 木全真理, 後藤純, 大月敏雄, 西出和彦:「要介護度中重度になってもサポートを得ながら住み続けられる住宅のあり方に関する研究」, 『柏市における高齢者の在宅継続可能要因に関する研究(その1)』, 日本建築学会大会梗概集, 1173-1174, 2014. 9.
4. 廣瀬雄一, 後藤純, 西野亜希子:「要介護高齢者の居住安定確保に向けた考察」, 『柏市における高齢者の在宅継続可能要因に関する調査研究(その2)』, 日本建築学会大会梗概集, 1175-1176, 2014. 9.
5. 金晃敏, 西野亜希子, 大島史也, 楊舒婷, 朴晟源, 廣瀬雄一, 大月敏雄, 西出和彦:「千葉県柏市の日常生活圏域における訪問・通所介護の利用実態に関する研究」, 日本建築学会大会(近畿)学術講演会・建築デザイン発表会, 2014. 9

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 西野亜希子:「最後まで自宅に住み続ける」, 一般社団法人日本住宅協会, vol. 64, 18-26, 2015. 1

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. Akiko Nishino: “Living conditions of the elderly in Kashiwa, Toyoshiki Complex Part2.” Urban Restructuring system: Relocation of Community Architectural Functions for super-aged societies, The University of Tokyo, 2015. 3

■ 橋詰力 (特任助教)

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 加藤あすか, 橋詰力, 及川彰, 清水誠, 井上順, 佐藤隆一郎: 「 β conglycinin による代謝改善効果の分子機構解析」, 日本アミノ酸学会第8回学術大会 (JSAAS2014), 東京, 2014. 11.

2015年度

■ 菅原育子 (特任講師)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文、著書】

1. Kobayashi, E., Liang, J., Sugawara, I., Fukaya, T., Shinkai, S., Akiyama, H.: “Associations between Social Networks and Life Satisfaction among Older Japanese. Does birth Cohort Make a Difference?” *Psychology and Aging*, 30, 952–966, 2015. 査読有

【国際会議における発表】

1. Mizuno-Shimatani, I., Sugawara, I., Okushima, N.: “Exploring effective policy and measures to secure labor force population in Japan: work-life balance gaps in every each life four domains.” The 10th IAGG Asia/Oceania Regional Congress, Chiang Mai, Thailand, 2015. 10. 19–22. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

全て査読有

1. 菅原育子, 室橋弘人, 前田展弘, 神山祥子, 黒崎恵子, 山口絢, 相田直樹, 秋山弘子: 「60代女性の健康と運動に関する意識と行動: 大都市圏インターネット調査による『家派』と『外派』の比較」, 日本老年社会科学会第57回大会 (大会抄録集 212), 横浜市, 2015. 6. 12–14.
2. 菅原育子, 高山緑, 石岡良子, 増井幸恵, 菅沼真樹, 小川まどか: 「後期高齢者における家族および友人のコンパニオンシップ: 『長寿社会の健康と暮らしに関する調査』より」, 日本心理学会第79回大会 (大会論文集 1087), 名古屋市, 2015. 9. 22–24.
3. 高山緑, 石岡良子, 菅原育子, 増井幸恵, 菅沼真樹, 小川まどか: 「後期高齢期・超高齢期の社会参加活動と主観的 well-being: 『長寿社会の健康と暮らしに関する調査』より」, 日本心理学会第79回大会 (大会論文集 1086), 名古屋市, 2015. 9. 22–24.
4. 菅原育子, 小林江里香: 「社会関係の加齢変化に対する時間展望感と移動能力の関連」, 日本社会心理学会第56回大会 (大会発表論文集 258), 東京女子大学, 2015. 10. 31–11. 1.

■ 村山洋史 (特任講師)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文、著書】

1. 西真理子, 吉田裕人, 藤原佳典, 深谷太郎, 天野秀紀, 熊谷修, 渡辺修一郎, 村山洋史, 谷口優, 野藤悠, 干川なつみ, 土屋由美子, 新開省二: 「高齢者向けの集団健診が余命および健康

- 余命に及ぼす影響—草津町介護予防事業 10 年間の効果評価の試み—」, 厚生 の 指 標, 2016; 63 (2): 2-11.
2. Murayama H, Bennett JM, Shaw BA, Liang J, Krause N, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S: “Does social support buffer the effect of financial strain on the trajectory of smoking in older Japanese? a 19-year longitudinal study.” *Journal of Gerontology: Psychological Sciences & Social Sciences*, 2015; 70(3): 367-376.
 3. Murayama H, Nofuji Y, Matsuo E, Nishi M, Taniguchi Y, Fujiwara Y, Shinkai S: “Are neighborhood bonding and bridging social capital protective against depressive mood in old age? a multilevel analysis in Japan.” *Social Science & Medicine*, 2015; 124: 171-179.
 4. Murayama H, Liang J, Bennett JM, Shaw BA, Botosaneanu A, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S: “Trajectories of body mass index and their association with mortality among older Japanese: Do they differ from those of Western populations?” *American Journal of Epidemiology*, 2015; 182(7): 597-605.
 5. Murayama H, Nishi M, Nofuji Y, Matsuo E, Taniguchi Y, Amano H, Yokoyama Y, Fujiwara Y, Shinkai S: “Longitudinal association between neighborhood cohesion and depressive mood in old age: A Japanese prospective study.” *Health & Place*, 2015; 34: 270-278.
 6. Seino S, Shinkai S, Iijima K, Obuchi S, Fujiwara Y, Yoshida H, Kawai H, Nishi M, Murayama H, Taniguchi Y, Amano H, Takahashi R: “Reference values and age differences in body composition of community-dwelling older Japanese men and women: A pooled analysis of four cohort studies.” *PLoS ONE* 2015; 10(7): e0131975.
 7. Taniguchi Y, Fujiwara Y, Nishi M, Murayama H, Nofuji Y, Seino S, Shinkai S: “Prospective study of arterial stiffness and subsequent cognitive decline among community-dwelling older Japanese.” *Journal of Epidemiology*, 2015; 25(9): 592-599.
 8. Kim MJ, Shinkai S, Murayama H, Mori S: “Comparison of segmental multi-frequency bioelectrical impedance analysis with dual-energy X-ray absorptiometry for the assessment of body composition in community-dwelling older population.” *Geriatrics & Gerontology International*, 2015; 15(8): 1013-1022.
 9. 谷口優, 藤原佳典, 篠崎智大, 天野秀紀, 西真理子, 村山洋史, 野藤悠, 清野諭, 成田美紀, 松尾恵理, 横山友里, 新開省二: 「Mini-Mental State Examination により評価した認知機能低下と将来の要介護発生との関連」, *日本老年医学会雑誌*, 2015; 52(1): 86-93.
 10. 谷口優, 清野諭, 藤原佳典, 野藤悠, 西真理子, 村山洋史, 天野秀紀, 松尾恵理, 新開省二: 「地域在住高齢者における身体機能・骨格筋量・サルコペニアと認知機能との横断的・縦断的な関連性」, *日本老年医学会雑誌*, 2015; 52(3): 269-277.
 11. 川畑輝子, 武見ゆかり, 村山洋史, 西真理子, 清水由美子, 成田美紀, 金美芝, 新開省二: 「地域在住高齢者に対する虚弱予防教室による虚弱及び食習慣の改善効果」, *日本公衆衛生雑誌*

誌, 2015; 64(4): 169-181.

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 村山洋史:「ソーシャルキャピタルの多面性：地域保健活動でいかに醸成を目指すか」, 老年社会科学, 2016; 37(4): 454-462.
2. 村山洋史:「高齢期における体格指数の加齢変化：推移パターンが死亡率に及ぼす影響とそれを規定する社会経済的背景の検討」, Aging & Health, 2016; 77: 38-41.
3. 村山洋史:「住民のコミュニティ意識」, 日本地域看護学会誌 2015; 18(2, 3): 91-94.

【国際会議における発表】

全て査読有

1. Murayama H, Liang J, Bennett JM, Shaw BA, Botosaneanu A, Kobayashi E, Akiyama H, Shinkai S: “Do Health Behaviors Affect the Trajectory of Body Mass Index Over Time? A 19-year Longitudinal Study of Older Japanese.” The Gerontological Society of America 68th Annual Science meeting, Orlando, 2015. 11. 17-22.
2. Yokoyama Y, Nishi M, Murayama H, Amano H, Taniguchi Y, Seino S, Kawano Y, Shinkai S: “Dietary Variety and Anemia among Community-dwelling Elderly Japanese.” The 67th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Florida, USA, 2015. 11. 18-22.
3. Seino S, Taniguchi Y, Nishi M, Murayama H, Amano H, Nofuji Y, Fujiwara Y, Shinkai S: “A prospective study on body composition indices and active life expectancy in older Japanese.” The 67th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Florida, USA, 2015. 11. 18-22.
4. Shinkai S, Nishi M, Taniguchi Y, Murayama H, Amano H, Nofuji Y, Seino S, Fujiwara Y, Ikeuchi T: “A public health approach for frailty prevention in community and its impact upon healthy aging in Japan.” The 67th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Florida, USA, 2015. 11. 18-22.
5. Taniguchi Y, Shinkai S, Nishi M, Murayama H, Amano H, Nofuji Y, Seino S, Fujiwara Y: “Trajectory Pattern of Grip Strength and Mortality Risk in a General Population of Older Japanese.” The 67th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Florida, USA, 2015. 11. 18-22.
6. Taguchi A, Murayama H, Miyao C, Yamaguchi T: “A new health education program on dietary variety for the community elderly: Implementation by health promotion volunteers.” The 143rd Annual Meeting & Exposition of the American Public Health Association, Chicago, IL, USA, 2015. 10. 31-11. 4.
7. Nishi M, Hasebe M, Murayama Y, Koike T, Suzuki H, Nonaka K, Murayama H, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S, Fujiwara Y: “The characteristics of social isolation in Japanese

- community-dwelling elderly – a comparison with isolated young and middle-aged adults –.” The 21th Congress of the International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG), Chiang Mai, Thailand, 2015. 10. 19–22.
8. Seino S, Nish M, Murayama H, Taniguchi Y, Amano H, Nofuji Y, Narita M, Yokoyama Y, Fujiwara Y, Shinkai S: “Body composition (fat mass and fat-free mass) indices and active life expectancy in community-dwelling older Japanese.” The 21th Congress of the International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG), Chiang Mai, Thailand, 2015. 10. 19–22.
 9. Murayama H: “Do Bonding and Bridging Social Capital Affect Self-rated Health, Depressive Mood and Cognitive Decline in Older Japanese? A Prospective Cohort Study.” The 7th annual meeting of International Society of Social Capital Research, Seoul, South Korea, 2015. 6. 1–2.
 10. Murayama H: “Does health education by community health workers foster social capital among elderly participants?” The 7th annual meeting of International Society of Social Capital Research, Seoul, South Korea, 2015. 6. 1–2.
 11. Yokoyama Y, Nishi M, Murayama H, Amano H, Taniguchi Y, Nofuji Y, Narita M, Matsuo E, Seino S, Kawano Y, Shinkai S: “A 7-year prospective study of anemia and loss of active life in older Japanese.” The 12th Asian Congress of Nutrition, Yokohama, Japan, 2015. 5. 15.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

13 以外，査読有

1. 宮尾智香子，田口敦子，村山洋史：「健康推進員組織の維持・活性化をめざした研修会の効果」，第 46 回滋賀県公衆衛生学会，大津，2016. 2. 21.
2. 西倉恵美子，村山洋史，菊池弘恵，田口敦子：「『食品摂取多様性』に焦点をあてた健康推進員主導の健康教室を実施して（第 1 報）」，第 46 回滋賀県公衆衛生学会，大津，2016. 2. 21.
3. 関谷幸子，田口敦子，山崎菜穂子，村山洋史：「『食品摂取多様性』に焦点をあてた健康推進員主導の健康教室を実施して（第 2 報）」，第 46 回滋賀県公衆衛生学会，大津，2016. 2. 21.
4. 村山洋史，谷口優，天野秀紀，西真理子，清野諭，横山友里，藤原佳典，新開省二：「体力指標が認知機能の軌跡に及ぼす影響：草津コホート研究」，第 26 回日本疫学会学術総会，米子，2016. 1. 21–23.
5. 谷口優，藤原佳典，西真理子，天野秀紀，村山洋史，清野諭，野藤悠，横山友里，新開省二：「地域在宅高齢者における糖化ヘモグロビンレベルと将来の認知機能低下に関する前向き研究」，第 26 回日本疫学会学術総会，米子，2016. 1. 21–23.
6. 藤原佳典，西真理子，深谷太郎，野中久美子，小池高史，長谷部雅美，鈴木宏幸，村山洋史，南潮，斉藤雅茂，小林江里香：「外出と交流の低下の重積が死亡に及ぼす影響：首都圏高齢者

- の地域包括的孤立予防研究 (CAPITAL study) より」, 第 26 回日本疫学会学術総会, 米子, 2016. 1. 21-23.
7. 村山洋史, 田口敦子, 山口拓洋:「健康推進員主導型の栄養改善プログラム:高齢期の食品摂取多様性への効果」, 第 74 回日本公衆衛生学会総会, 長崎, 2015. 11. 4-6.
 8. 新開省二, 吉田裕人, 藤原佳典, 天野秀紀, 西真理子, 村山洋史, 谷口優, 野藤悠, 清野諭, 岡部たづる, 干川なつみ:「草津町における介護予防共同研究事業からみた高齢者保健の課題」, 第 74 回日本公衆衛生学会総会, 長崎市, 2015. 10. 4-6.
 9. 成田美紀, 西真理子, 村山洋史, 野藤悠, 谷口優, 天野秀紀, 清野諭, 横山友里, 新開省二:「地域高齢者健康モニター事業による健康認識およびソーシャルキャピタル醸成効果の検討」, 第 74 回日本公衆衛生学会総会, 長崎市, 2015. 10. 4-6.
 10. 清野諭, 新開省二, 谷口優, 西真理子, 天野秀紀, 村山洋史, 野藤悠, 成田美紀, 横山友里, 藤原佳典, 大淵修一, 河合恒, 吉田英世, 飯島勝矢, 高橋龍太郎:「日本人高齢者向けのサルコペニア基準の提案と簡易チェックシステム作成の試み」, 第 74 回日本公衆衛生学会総会, 長崎市, 2015. 10. 4-6.
 11. 谷口優, 村山洋史, 清野諭, 野藤悠, 松尾恵理, 西真理子, 天野秀紀, 横山友里, 成田美紀, 藤原佳典, 新開省二:「認知機能の加齢変化パターンと認知症発症に関する前向き研究」, 第 74 回日本公衆衛生学会総会, 長崎市, 2015. 10. 4-6.
 12. 野中久美子, 長谷部雅美, 村山洋史, 藤原佳典:「地域包括支援センターのネットワークづくりに対する有効な自治体支援の在り方の検討」, 第 10 回日本応用老年学会大会, 東京, 2015. 10. 25.
 13. 村山洋史:「ソーシャルキャピタルの多面性:常に地域に恩恵をもたらし得るのか?」, 第 57 回日本老年社会学会大会, 2015. 6. 13.
 14. 村山洋史, 谷口優, 天野秀紀, 西真理子, 野藤悠, 清野諭, 松尾恵理, 深谷太郎, 藤原佳典, 新開省二:「体力指標は高齢期の認知機能の軌跡にどう影響するか? 10 年間の縦断データからの知見」, 第 57 回日本老年医学会学術集会, 横浜, 2015. 6. 12-14.
 15. 清野諭, 谷口優, 村山洋史, 西真理子, 天野秀紀, 成田美紀, 深谷太郎, 藤原佳典, 新開省二:「地域高齢者の健康余命に関する縦断研究—脂質異常症の影響—」, 第 57 回日本老年医学会学術集会, 横浜市, 2015. 6. 12-14.
 16. 天野秀紀, 西真理子, 村山洋史, 谷口優, 野藤悠, 松尾恵理, 清野諭, 藤原佳典, 吉田 裕人, 新開省二:「地域高齢者健診受診者における認知機能低下の促進・抑制要因」, 第 57 回日本老年医学会学術集会, 横浜市, 2015. 6. 12-14.
 17. 西真理子, 深谷太郎, 小池高史, 小林江里香, 野中久美子, 村山洋史, 鈴木宏幸, 新開省二, 藤原佳典:「客観的には孤立していても孤立感のない高齢者の特徴—首都圏高齢者の地域包括的孤立予防研究 (CAPITAL study) より—」, 第 57 回日本老年社会学会大会, 横浜市, 2015. 6. 12-14.

■ 後藤純（特任講師）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書】

全て査読有

1. 廣瀬雄一，後藤純：「活力ある低所得単身高齢者の住まいに関する基礎的考察」，日本建築学会住宅系研究報告会論文集，2015.
2. 後藤智香子，後藤純，小泉秀樹，成瀬友梨，猪熊純，似内遼一：「岩手県陸前高田市『りくカフェ』における住民主体の介護予防事業の意義」，都市計画論文集，50号-3，1180-1187，日本都市計画学会，2015.

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 東京大学高齢社会総合研究機構次世代まちづくり研究会：「超高齢社会の課題に対応する新しい試み」，都市計画雑誌，64(4)，6-9，日本都市計画学会，2015.
2. 後藤純，伊藤夏樹，似内遼一，堤可奈子，小泉秀樹，大方潤一郎：「超高齢社会のまちづくりのために：コミュニティ戦略型計画を目指して」，都市計画雑誌，64(4)，58-65，日本都市計画学会，2015.
3. 後藤純：「在宅医療 長寿社会のまちづくり：柏市・東大・URの取組について」，難病と在宅ケア21(6)，48-53，2015.
4. 後藤純：「超高齢化する団地の再生—つながりと絆の実践」，月刊福祉2015年3月号コミュニティ再生と福祉のこころ，98(3)，36-39，全国社会福祉協議会，2015.
5. 後藤純：「活力ある超高齢社会を共創する」，建築雑誌，vol. 136 No. 1667，12-13，社団法人日本建築学会，2015.

【著書、編著】

1. (共著) 平江良成，後藤純：「東急電鉄と横浜市の取り組み」，岡田晋吾・田城孝雄編著，『地域医療連携・多職種連携—シリーズ・スーパー総合医』，中山書店，2015.
2. (共著) 後藤純，辻哲夫：「釜石平田仮設の取り組み」，長純一・永井康徳編著，『大規模災害時医療—シリーズ・スーパー総合医』，中山書店，2015.

■ 木全真理（特任助教）

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 木全真理：「超高齢社会に向けた政策への展開 —柏市における在宅医療を含めた地域包括ケアシステム構築の試み—」，統計，20(10)，23-29，2015.
2. 木全真理：「多職種連携のなかで見えてきた地域での看護師の役割 —柏市で実践した多職種でのケース検討を通して—」，訪問看護と介護，20(11)，2015.

【国際会議における発表】

1. Kimata M，Iijima K，Yoshie S，Goto J，Tsuji T：“Clarifying information exchange between multidisciplinary healthcare providers in the home medical and nursing care setting.”

The 10TH Internarional Association Gerontology And Geriatrics Asia/Oceania 2015 Congress Final Program, 72, The International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania 2015 Congress, Chiang Mai, Thailand, 2015.

2. Nishino A, Hirose Y, Oida M, Kimata M, Otsuki T, Nishide K, Okata J: “Physical environments for independent living by older Japanese depending on frailty.” GSA’s 68th Annual Scientific Meeting, Orlando, USA, 2015.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 木全真理:「パネルディスカッション2（訪問看護）地域の“生き抜く力”を引き出す訪問看護の役割 社会の変化に対応する訪問看護師の実践とその手法」, 第17回日本在宅医学会もりおか大会, 229, 第17回日本在宅医学会大会, 盛岡, 2015.
2. 麦山亮太, 目麻里子, 木全真理, 福井康貴:「要介護高齢者の施設入所選択にはたらく世帯構成と経済状況の影響に関する計量分析」, 第74回日本公衆衛生学会総会, 長崎, 2015.
3. 黄銀智, 目麻里子, 長谷田真帆, 松本博成, 安藤絵美子, 麦山亮太, 木全真理, 福井康貴:「経過視点からみる要介護者の在宅療養継続要因の可視化の提案」, 第74回日本公衆衛生学会総会, 長崎, 2015.
4. 木全真理:「先駆的な訪問看護の実践に関する特性の検討」, 第35回日本看護科学学会学術集会講演集, 228, 第35回日本看護科学学会学術集会, 広島, 2015.

■ 堤可奈子（特任助教）

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 堤可奈子, 西野亜希子, 伊藤夏樹, 廣瀬雄一, 後藤純, 山地裕子, 目麻里子:「超高齢社会の課題に対する新しい試み」, 日本都市計画学会, vol. 316, 6-9, 2015. 8.

■ 三浦貴大（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書】

1. Takahiro Miura, Ken-ichiro Yabu, Masatsugu Sakajiri, Mari Ueda, Atsushi Hiyama, Michitaka Hirose, Tohru Ifukube: “Evaluation of crowdsourced accessibility information sharing.” Journal on Technology and Persons with Disabilities, vol. 3, 232-245, 2015.

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 三浦貴大, 藪謙一郎:「高齢者・身体障害者のためのバリアフリー情報共有基盤」, 地域ケアリング, 17(11), 84-93, 2015.

【国際会議における発表】

※全て査読あり

1. Takahiro Miura, Ken-ichiro Yabu, Atsushi Hiyama, Noriko Inamura, Michitaka Hirose, Tohru Ifukube: “Smartphone-Based Gait Measurement Application for Exercise and Its

Effects on the Lifestyle of Senior Citizens.” In Proceedings of Human-Computer Interaction – INTERACT 2015, Lecture Notes in Computer Science (LNCS) 9298, Springer, September 2015, 80–98, 2015. 9.

2. Junji Onishi, Masatsugu Sakajiri, Takahiro Miura, Tsukasa Ono: “Terminal Operation Learning Application for the Screen Reader Users.” Proc. IEEE SMC 2015, 2343–2348, 2015.
3. Miura T, Suzuki J, Yabu K, Ueda K, & Ifukube T: “Diagram presentation using loudspeaker matrix for visually impaired people: Sounds characteristics for their pattern recognition.” 2 pages, Proc. Augmented Human 2016, 2016. 2.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 小沢浩史, 古川政光, 三上那津子, 道吉誓子, 山本哲也, 藪謙一郎, 上田一貴, 三浦貴大, 伊福部達: 「運転時および車載情報機器操作時におけるワーキングメモリ課題を用いた認知負荷計測手法の検討」, 自動車技術会 2015 年春季大会学術講演会, 2242–2247, パシフィコ横浜, 2015. 5.
2. 小嶋泰平, 檜山敦, 三浦貴大, 酒井正光, 廣瀬通孝: 「VR 歩行姿勢可視化システムを用いた高齢者歩容の分析」, LIFE 2015, 3E1–06 (4 pages), 九州産業大学, 2015. 9.
3. 松政輝, 坂尻正次, 三浦貴大, 大西淳児, 小野東: 「全盲者のためのバリアフリーゲームにおける音だけで作図する地図エディタ」, LIFE 2015, 3C2–03(4 pages), 九州産業大学, 2015. 9.
4. 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東: 「視覚障害者におけるタッチスクリーン端末の使用動向」, LIFE 2015, 3C2–02 (4 pages), 九州産業大学, 2015. 9.
5. 大橋隆, 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東: 「視覚障害ユーザのためのタッチスクリーンインタフェースのアクセシブルなボタン配置」, LIFE 2015, 3C2–04 (4 pages), 九州産業大学, 2015. 9.
6. 上田麻理, 三浦貴大, 藪謙一郎: 「スマートフォンによる音環境アクセシビリティマップ作成の試み」, 日本音響学会 2015 年秋季研究発表会, 2 pages, 会津大学, 2015. 9.
7. 大橋隆, 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東: 「タッチスクリーン端末を利用する視覚障害ユーザのための音声フィードバックを活用した入出力インタフェース」, FIT 2015 (第 14 回情報科学技術フォーラム), 2 pages, 愛媛大学, 2015. 9.
8. 大橋隆, 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東: 「視覚障害ユーザのためのタッチスクリーン端末用音声フィードバック入出力インタフェース」, ライフサポート学会 視聴覚障害者バリアフリー技術研究会研究発表会, 1 page, すみだ産業会館サンライズホール, 2015. 11.
9. 三浦貴大, 藪謙一郎, 檜山敦, 稲村規子, 廣瀬通孝, 伊福部達: 「あゆログ: 高齢者のためのスマートフォンによる歩行計測・促進アプリケーション」, 第 41 回 (2015 年) 感覚代行シンポジウム, 4 pages, 産業技術総合研究所 臨海副都心センター, 2015. 12.

10. 上田麻理, 三浦貴大, 藪謙一郎:「スマートフォンによる音環境アクセシビリティマップ作成の試み:アプリケーションの試作」, 日本音響学会 騒音・振動研究会, 4 pages, 大濱信泉記念館, 2015. 12.
11. 松尾政輝, 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東:「全盲者のアクセシビリティに配慮した音だけで作図する地図エディタとアクションRPGの開発」, ライフサポート学会フロンティア講演会, 2016. 3.
12. 上田麻理, 三浦貴大, 藪謙一郎, 森原崇, 土田義郎:「音環境アクセシビリティマップ作成のための実験的検討」, 2016年日本音響学会春季学術講演会, 桐蔭横浜大学, 2016. 3.

■ 荻野亮吾 (特任助教)

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文、著書】

1. 荻野亮吾:「社会教育とコミュニティの構築に関する研究方法の検討:社会関係資本論に基づくアプローチ」, 社会教育学研究, 52(1), 56-58, 2016.
2. 荻野亮吾:「パートナーシップとイノベーションに関する先行研究」, 国立教育政策研究所(編), 多様なパートナーシップによるイノベティブな生涯学習環境の基盤形成に関する研究報告書(I):総論(平成26-27年度プロジェクト研究調査報告書), 15-34, 2016.
3. 荻野亮吾:「調査の枠組み」, 国立教育政策研究所(編), 多様なパートナーシップによるイノベティブな生涯学習環境の基盤形成に関する研究報告書(IV):中間支援組織調査(平成26-27年度プロジェクト研究調査報告書), 14-21, 2016.
4. 荻野亮吾, 中村由香:「調査結果の概要」, 国立教育政策研究所(編), 多様なパートナーシップによるイノベティブな生涯学習環境の基盤形成に関する研究報告書(IV):中間支援組織調査(平成26-27年度プロジェクト研究調査報告書), 22-55, 2016.
5. 荻野亮吾:「教育の領域における連携・協働の状況」, 国立教育政策研究所(編), 多様なパートナーシップによるイノベティブな生涯学習環境の基盤形成に関する研究報告書(IV):中間支援組織調査(平成26-27年度プロジェクト研究調査報告書), 96-105, 2016.
6. 荻野亮吾, 中村由香:「岩手県紫波町『オガールプロジェクト』:官民が連携した公共施設の建設」, 国立教育政策研究所(編), 多様なパートナーシップによるイノベティブな生涯学習環境の基盤形成に関する研究・事例集:国内及び海外の先進的事例調査(平成26-27年度プロジェクト研究調査報告書), 23-29, 2016.
7. 青山貴子, 荻野亮吾:「山梨県都留市『リツール』(Re:Tsuru):都留市活性化コンソーシアム」, 国立教育政策研究所(編), 多様なパートナーシップによるイノベティブな生涯学習環境の基盤形成に関する研究・事例集:国内及び海外の先進的事例調査(平成26-27年度プロジェクト研究調査報告書), 30-37, 2016.
8. 中村由香, 荻野亮吾:「特定非営利活動法人ファザリングジャパン:父親としての経験を新規

- ビジネスの開拓へつなげる」, 国立教育政策研究所 (編), 多様なパートナーシップによるイノベーティブな生涯学習環境の基盤形成に関する研究・事例集: 国内及び海外の先進的事例調査 (平成 26-27 年度プロジェクト研究調査報告書), 97-101, 2016.
9. 中村由香, 荻野亮吾: 「日本財団『ママプロ』チーム: 母親の社会参加を支えるプロジェクト」, 国立教育政策研究所 (編), 多様なパートナーシップによるイノベーティブな生涯学習環境の基盤形成に関する研究・事例集: 国内及び海外の先進的事例調査 (平成 26-27 年度プロジェクト研究調査報告書), 102-108, 2016.
 10. 荻野亮吾, 中村由香: 「長野県飯田市川路地区『通学合宿』: 公民館を媒介にした地域の子育て体制づくり」, 国立教育政策研究所 (編), 多様なパートナーシップによるイノベーティブな生涯学習環境の基盤形成に関する研究・事例集: 国内及び海外の先進的事例調査 (平成 26-27 年度プロジェクト研究調査報告書), 132-138, 2016.
 11. 荻野亮吾, 中村由香: 「長野県飯田市『地域人教育』: 高校と公民館、大学が連携した地域での教育」, 国立教育政策研究所 (編), 多様なパートナーシップによるイノベーティブな生涯学習環境の基盤形成に関する研究・事例集: 国内及び海外の先進的事例調査 (平成 26-27 年度プロジェクト研究調査報告書), 139-144, 2016.
 12. 荻野亮吾: 「国内事例の論点別整理」, 国立教育政策研究所 (編), 多様なパートナーシップによるイノベーティブな生涯学習環境の基盤形成に関する研究・事例集: 国内及び海外の先進的事例調査 (平成 26-27 年度プロジェクト研究調査報告書), 215-220, 2016.
 13. 荻野亮吾: 「海外事例の概要」, 国立教育政策研究所 (編), 多様なパートナーシップによるイノベーティブな生涯学習環境の基盤形成に関する研究・事例集: 国内及び海外の先進的事例調査 (平成 26-27 年度プロジェクト研究調査報告書), 221-223, 2016.
 14. 荻野亮吾: 「調べる学習で身についた力」, 国立教育政策研究所・公益財団法人図書館振興財団 (編), 図書館と学校が地域をつくる: 確かな学力形成と豊かな人生に向けて (「図書館を使った 調べる学習コンクール」報告書), 54-65, 2016.
 15. 荻野亮吾: 「効果的な取組を支える連携の方法」, 国立女性教育会館 (編), 地域における女性の活躍推進実践ガイドブック: 地方公共団体や男女共同参画センターの新たな連携と役割, 26-36, 2016.
 16. 荻野亮吾: 「シブヤ大学における生涯学習とまちづくりをつなぐ論理: 企業との連携を中心に」, 社会教育, 827, 54-64, 2016.

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 荻野亮吾: 「公民館をめぐる政策の動向」, 日本公民館学会年報, 12, 145-148, 2015.
2. 荻野亮吾, 園部友里恵: 「生涯学習・社会参加の支援に高等教育機関が果たす役割 (2): 高齢者への学習支援の方法」, 文部科学教育通信, 371, 26-28, 2015.
3. 荻野亮吾: 「生涯学習・社会参加の支援に高等教育機関が果たす役割 (1): 高齢者の学習の場づくり」, 文部科学教育通信, 370, 26-28.

【著書、編著】

1. (共訳) 荻野亮吾：「序文 編集ノート (訳)」 「第2章 身体化された学習と患者教育：看護師の自覚から患者のセルフケアへ (訳)」 「あとがき」, ランディ・リップソン・ローレンス (編), 立田慶裕, 岩崎久美子, 金藤ふゆ子, 佐藤智子, 荻野亮吾, 園部友里恵 (訳), 『身体知：成人教育における身体化された学習』, 福村出版, pp 3-16, 29-42, 128-129, 2016.
2. (共著) 荻野亮吾：「あとがき」, 日本社会教育学会 (編), 『社会教育としてのESD：持続可能な地域をつくる』, 東洋館出版社, pp 259-265, 2015.

【国際会議における発表】

1. Okada H, Tsuchiya R, Fujii F, Sugimoto M, Okuyama A, Mikoshiha N, Ogino R, Nishigami O, Nagata S, Higuchi N: “Knowledge, Attitudes, Behavior Regarding Advance Directives Among Japan’s Elderly.” International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania, Cheng Mai, Thailand, 2015. 10. 19-22.
2. Tsuchiya R, Okada H, Sugimoto M, Fujii F, Okuyama A, Mikoshiha N, Ogino R, Hatanaka R, Nagata S, Higuchi N: “Family caregiving experience and advance directives.” International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania, Cheng Mai, Thailand, 2015. 10. 19-22.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 荻野亮吾：「社会教育を通じたコミュニティの構築過程：長野県飯田市における分館活動の事例研究から」, 日本質的心理学会第12回大会（一般公開シンポジウム）, 宮城教育大学（宮城県・仙台市）, 2015. 10. 4.
2. 荻野亮吾：「社会教育とコミュニティの構築に関する研究方法の検討：社会関係資本論に基づくアプローチ」, 2015年度日本社会教育学会六月集会, 立教大学（東京都・豊島区）, 2015. 6. 7.
3. 荻野亮吾：「社会教育とコミュニティの構築に関する研究方法の検討」, 日本社会教育学会プロジェクト研究「社会教育における方法論の検討」第11回研究会, 東京大学（東京都・文京区）, 2015. 4. 12.

■ 孫輔卿（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書】

全て査読有

1. Akiyoshi T, Ota H, Iijima K, Son BK, Kahyo T, Setou M, Ogawa S, Ouchi Y, Akishita M: “A novel organ culture model of aorta for vascular calcifications”. *Atherosclerosis*. 244 : 51-58, 2016.
2. Yamada Y, Eto M, Ito Y, Mochizuki S, Son BK, Ogawa S, Iijima K, Kaneki M, Kozaki K, Toba K, Akishita M, Ouchi Y: “Suppressive Role of PPAR γ -Regulated Endothelial Nitric Oxide Synthase in Adipocyte Lipolysis”. *PLoS One*. 10 (8) : e0136597. Doi : 10. 1371,

2015.

3. Son BK, Sawaki D, Tomida S, Fujita D, Aizawa K, Aoki H, Akishita M, Manabe I, Komuro I, Friedman SL, Nagai R, Suzuki T: “Granulocyte macrophage colony-stimulating factor is required for aortic dissection/intramural haematoma.” *Nat Commun.* 29 ; 6 : 6994. doi : 10.1038/ ncomms7994, 2015.
4. Sawaki D, Hou L, Tomida S, Sun J, Zhan H, Aizawa K, Son BK, Kariya T, Takimoto E, Otsu K, Conway SJ, Manabe I, Komuro I, Friedman SL, Nagai R, Suzuki T: “Modulation of Cardiac Fibrosis by Krüppel-like Factor 6 through Transcriptional Control of Thrombospondin 4 in Cardiomyocytes.” *Cardiovasc Res.* 107 (4) : 420-30, 2015.

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 孫輔卿, 秋下雅弘 : 「CKD 『病理生理』 『血管石灰化』」, 診断と治療の ABC, 94-102, 2016.
2. 孫輔卿, 秋下雅弘 : 「テストステロンの最新医学— low testosterone and cognitive impairment」, *Progress in Medicine*, 35 (6):1017-1020, 2015.
3. 孫輔卿 : 「血管平滑筋細胞のアポトーシスと血管石灰化」, *The Lipid.* 26 (3): 39-44, 2015.
4. 孫輔卿, 秋下雅弘 : 「テストステロンの抗酸化・アンチエイジング効果」, *Nephrology&Urology*, 2 (1):34-38, 2015.

【国際会議における発表】

全て査読有

1. Son BK, Iijima K, Ogawa S, Akishita M: “Thrombomodulin, a novel molecule regulating arterial calcification via phenotype transition and apoptosis.” the Gerontological Society of America., Orlando, USA, 11.
2. Matsumoto H, Uchiyama E, Yoshida S, Kim K, Miki K, Son BK, Nishino A: “Designing built environments to prevent falls, fall-related fractures, and post-fall home confinement.” the Gerontological Society of America., Orlando, USA, 11.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 孫輔卿 : 「大動脈解離における慢性炎症の役割と分子機序」, 第 47 回 日本動脈硬化学会, 仙台, 7. 9-10, 2015
2. 七尾道子, 孫輔卿, 橋詰剛, 小川純人, 秋下雅弘 : 「血管平滑筋細胞の石灰化に対する Ginsenoside Rb1 の抑制作用」, 第 47 回日本動脈硬化学会, 仙台, 7. 9-10, 2015.

■ 室山良介 (特任助教)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文、著書】

1. Li, W., K. Goto, Y. Matsubara, S. Ito, R. Muroyama, Q. Li and N. Kato: “The characteristic changes in hepatitis B virus x region for hepatocellular carcinoma: a comprehensive analysis based on global data.” *PLoS One* 10 (5): e0125555, 2015. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. Kato, N., R. Nakagawa, K. Goto, R. Muroyama and Y. Matsubara: “Development status of DAA against hepatitis C.” Nihon Rinsho 73 Suppl 9: 262–268, 2015.
2. Kato, N., R. Muroyama and K. Goto: “Hepatitis C virus induced hepatocellular carcinoma associated genes.” Nihon Rinsho 73 (2): 333–338, 2015.

【国際会議における発表】

1. Ryosuke Muroyama, Kaku Goto, Yasuo Matsubara, Ryo Nakagawa, Sayaka Ito, Sayuri Morimoto, Naoya Kato: “Fusion HBx translated from hepatitis B virus integrant might alter ER stress response and play an important role in hepatocarcinogenesis.” 2015 International Meeting on Molecular Biology of Hepatitis B Virus, Dolce, Germany, October 7, 2015. 査読有

■ 福井康貴（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書】

1. 福井康貴：「非正規雇用から正規雇用への移動における企業規模間格差—二重構造論からのアプローチ」, 社会学評論, 日本社会学会, 第 66 巻第 1 号（通号 261 号）, 73–88, 2015. 6. 査読有
2. 福井康貴：「入社経路が転職に果たす役割の検討—職業経歴データを用いて」, 労働政策研究報告書, No. 180 壮年非正規雇用労働者の仕事と生活に関する研究—経歴分析を中心として, 労働政策研究・研修機構, 247–273, 2015. 9.
3. 福井康貴：「男性労働者における非正規雇用への転職—若年期と壮年期の違いに着目して」, 労働政策研究報告書 No. 180 壮年非正規雇用労働者の仕事と生活に関する研究—経歴分析を中心として, 労働政策研究・研修機構, 154–167, 2015. 9.

【著書、編著】

1. (単著) 福井康貴：『歴史のなかの大卒労働市場—就職・採用の歴史社会学』, 勁草書房, 2016. 3.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. (口頭発表) 福井康貴：「入職経路が転職結果に与える影響—職場定着と雇用形態」, 第 88 回日本社会学会大会, 早稲田大学, 2015. 9. 査読有
2. (口頭発表) 麦山亮太, 目麻里子, 木全真理, 福井康貴：「要介護高齢者の施設入所選択にはたらく世帯構成と経済状況の影響に関する計量分析」, 第 74 回日本公衆衛生学会総会, 長崎新聞文化ホール, 2015. 11.
3. (口頭発表) 黄銀智, 目麻里子, 長谷田真帆, 松本博成, 安藤絵美子, 麦山良太, 木全真理, 福井康貴：「経過的視点から見る要介護者の在宅療養継続要因可視化の提案」, 第 74 回日本公衆衛生学会, 長崎新聞文化ホール, 2015. 11.

■ 朴孝淑（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書】

1. 朴孝淑：「日韓における高年齢者雇用政策と定年制をめぐる不利益変更問題について」, ソフトロー研究, 第25号掲載予定(2015年8月). 査読有
2. 朴孝淑：「韓国における非正規労働者に対する『差別是正制度』について」(第2部担当), 労働政策研究・研修機構, 韓国における労働政策の展開と政労使の対応—非正規労働者問題の解決を中心に—, JILPT 資料シリーズ155号, 35-61, 2015. 5.
3. 朴孝淑：「[[特別企画] 再建型倒産手続下における整理解雇の有効性——韓国大法院2判決の紹介と日本法への示唆」(共著), 88巻2号, 2016.
4. 朴孝淑：「[[특집] 일본 관례를 중심으로 본 취업규칙 불이익변경 문제 ([[特集] 日本の判例を中心にみた就業規則の不利益変更問題)」, 労働法律, 2016年3月号, 64-67, 2016.

■ 西野亜希子（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書】

1. 金旻敏, 西野亜希子, 大島史也, 大月敏雄, 西出和彦：「利用者と事業所間の位置関係から見た訪問・通所介護の日常生活圏域に関する研究 柏市の訪問・通所介護の利用実態を中心に」, 建築計画, 2015年度大会(関東)学術講演会(選抜梗概), 1343-1344, 2015. 9. 抄録査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 堤可奈子, 西野亜希子, 伊藤夏樹, 廣瀬雄一, 後藤純, 山地裕子, 目麻里子：「超高齢社会の課題に対する新しい試み」, 日本都市計画学会, vol. 316, 6-9, 2015. 8.

【国際会議における発表】

全て査読有

1. Akiko Nishino, Yuichi Hirose, Mikihiro Oida, Mari Kimata, Toshio Otsuki, Kazuhiko Nishide, Junichiro Okata : “Physical environments for independent living by older Japanese depending on frailty.” The Geological Society of America, Orlando, USA, 2015. 11.
2. Emiko Uchiyama, Hiroshige Matsumoto, Marina Hamada, Mio Choki, Chie Suzuki, Yufei Fu, Akiko Nishino : “Designing built environments to prevent falls, fall-related fractures, and post-fall home confinement.” The Geological Society of America, Orlando, USA, 2015. 11.
3. Hiroshige Matsumoto, Emiko Uchiyama, Shingo Yoshida, Kyoungmin Kim, Kouhei Miki, Bokyung Son, Akiko Nishino : “Designing built environments to prevent falls, fall-related fractures, and post-fall home confinement.” The Geological Society of America, Orlando, USA, 2015. 11.
4. Kyoungmin Kim, Akiko Nishino, Toshio Otsuki, Kazuhiko Nishide: “Geographical Factors in Siting Providers of Long-term Care in Japanese Municipalities.” The Geological Society

of America Orlando, USA, 2015. 11.

■ 橋詰力 (特任助教)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文、著書】

1. Li, J., Inoue, J., Choi J.M., Nakamura, S., Yan, Z., Fushinobu, S., Kamada, H., Kato, H., Hashidume, T., Shimizu, M., Sato, R.: "Identification of the flavonoid luteolin as a repressor of the transcription factor hepatocyte nuclear factor 4 α ." J. Biol. Chem. 290, 24021–24035. 2015. 査読有

【国際会議における発表】

1. Tsutomu Hashidume, Asuka Kato, Akira Oikawa, Makoto Shimizu, Jun Inoue, Ryuichiro Sato: "Effect of beta-conglycinin ingestion in mice." ACN2015, 709, Kanagawa, 2015. 5. 査読有

2. 受賞歴

■ 村山洋史 (特任講師)

- 「2015年度 長寿科学賞」(高齢期における体格指数の加齢変化：推移パターンが死亡率に及ぼす影響とそれを規定する社会経済的背景の検討)

■ 後藤純 (特任講師)

- 「2015年度 グッドデザイン賞」(コミュニティカフェ りくカフェ)

■ 三浦貴大 (特任助教)

- 「LIFE2015 バリアフリーシステム開発財団奨励賞」(松尾政輝, 坂尻正次, 三浦貴大, 大西淳児, 小野東:「全盲者のためのバリアフリーゲームにおける音だけで作図する地図エディタ」)
- 「LIFE2015 若手プレゼンテーション賞」(松尾政輝, 坂尻正次, 三浦貴大, 大西淳児, 小野東:「全盲者のためのバリアフリーゲームにおける音だけで作図する地図エディタ」)
- 「ライフサポート学会フロンティア講演会 奨励賞」(2016) (松尾政輝, 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東:「全盲者のアクセシビリティに配慮した音だけで作図する地図エディタとアクション RPG の開発」)

3. コース生による研究成果

2014年度

【学術雑誌に発表した論文、著書】

全て査読有

- ・ 浜田麻里奈, 後藤春彦, 山村崇. テーマ型カフェを媒介とする地域活動ネットワークの展開に関する研究: 国分寺市カフェスローとその関連団体が関わる地域イベント活動に着目して. 都市計画論文集, 2014; 49(3): 783-788.
- ・ Itoko T, Arita S, Kobayashi M, Takagi H. Involving senior workers in crowdsourced proofreading. Universal Access in Human-Computer Interaction. Aging and Assistive Environments, 2014; 106-117.
- ・ Kobayashi M, Arita S, Itoko T, Saito S, Takagi H. Motivating Multi-Generational Crowd Workers in Social-Purpose Work. Proceedings of the 18th ACM Conference on Computer Supported Cooperative Work & Social Computing, 2014; 1813-1824.
- ・ 鳴海拓志, 鈴木智絵, 谷川智洋, 廣瀬通孝. 鼻部への冷温覚提示による食味認知変化手法. 日本バーチャルリアリティ学会論文誌, 2014; 19(4): 439-448.
- ・ 福田吉治, 可知悠子, 安藤絵美子. 非正規雇用をめぐる健康課題. 連載にあたって. 産業衛生学雑誌, 2014; 56(6): 286-288.
- ・ Tajima M, Lee JS, Watanabe E, Park JS, Tsuchiya R, Fukahori A, Mori K, Kawakubo K. Association Between Changes in 12 Lifestyle Behaviors and the Development of Metabolic Syndrome During 1 Year Among Workers in the Tokyo Metropolitan Area. Circulation Journal, 2014; 78(5): 1152-1159.
- ・ Okuhara T, Ishikawa H, Okada H, Kiuchi T. Identification of gain- and loss-framed cancer screening messages that appeared in municipal newsletters in Japan. BMC Research Notes, 2014; 7(1): 896.
- ・ 菊池良太, 目麻里子, 水越真衣, 佐藤伊織, 福澤利江子, 池田真理, 上別府圭子. 家族看護の介入研究における「家族」の捉え方と介入効果の評価. 家族療法研究, 2014; 31(2): 165-175.
- ・ 小南友里, 渡辺学, 鈴木徹. 魚類筋肉組織の死後変化が凍結時の氷結晶生成に及ぼす影響. 日本冷凍空調学会論文集, 2014; 31(2): 47-56
- ・ Yang L, Wang J, Ando T, Kubota A, Yamashita H, Sakuma I, Chiba T, Kobayashi E. Vision-based endoscope tracking for 3d ultrasound image-guided surgical navigation. Com-

【国際会議における発表】

全て査読有

- Mugiyama R, Hirotsugu Y. The Future of Integration in Asia. Analyses of Students' Asian Identity and Threat Perception" International Conference (RICAS Seminar), Tokyo, 2015. 2.
- Itoko T, Arita S, Kobayashi M, Takagi H. Involving senior workers in crowdsourced proofreading. Human-Computer Interaction International Conference, Crete, 2014. 6.
- Kojima T, Hiyama A, Miura T, Hirose M. Training Archived Physical Skill through Immersive Virtual Environment. Proceedings of HCI International 2014 (Part II), Heraklion, Crete, 2014. 6.
- Suzuki C, Takei Y, Takahata T, Matsumoto K, Shimoyama I. Measuring the propagating teeth vibration of human chewing. The 27th IEEE International Conference on Micro Electro Mechanical Systems (MEMS2015), Estoril, Portugal, January, 2015. 1.
- Suzuki C, Narumi T, Tanikawa T, Hirose M. Affecting tumbler: affecting our flavor perception with thermal feedback. Proc. ACM ACE' 14, New York, 2014. 11.
- Tsuchiya R, Okada H, Yoshie S, Nishida K, Watanabe Y. The difficulties faced by the long-term care managers in planning home-visit rehabilitation in Kashiwa city under the Comprehensive Special Zones, a qualitative study. KOREA-JAPAN 2nd JOINT CONFERENCE for the partnership between KPTA and JPTA, Busan, 2014. 11.
- Watanabe T, Yagata H, Saito M, Okada H, Takayama T, Imai H, Yoshida Y, Tamai N, Nozawa K, Yajima T, Shimozawa K. National survey of chemotherapy-induced appearance issues in breast cancer patients. The 38th San Antonio Breast Cancer Symposium (SABCS), 2014. 12.
- Yagata H, Watanabe T, Okada H, Saito M, Takayama T, Imai H, Yoshida Y, Tamai N, Nozawa K, Yajima T, Shimazawa K. National survey of long-term recovery from chemotherapy-induced hair loss in patients with breast cancer. The 38th San Antonio Breast Cancer Symposium (SABCS), New York, 2014. 12.
- Kobayashi R, Kato A, Arii J, Kwaguchi Y. The HSV-1 capsid protein VP26 is functionally regulated by phosphorylation *in vitro* and *in vivo*. The 39th Annual International Herpesvirus Workshop, Kobe, 2014. 7.
- Miki K, Masamune K. Robotic Device for Acquisition of Wide and High Resolution MRI Image Using a Small RF Coil, Information Processing in Computer-Assisted Interventions. Lecture Notes in Computer Science, Fukuoka, 2014. 6.
- Kaneko K, Gomi T, Fujisawa K, Watanabe H, Umezawa H, Shikata S, Itoh K, Ishi. J Si-

multaneous control of position, density, preferential orientation of nitrogen-vacancy centers in CVD-grown diamond thin film on micropatterned substrate, QON-III-3. 32nd International Conference on the Physics of Semiconductors (ICPS-32), Austin Convention Center, Austin, Texas, 2014. 8.

- Kubota A, Yang L, Wang J, Ando T, Yamashita H, Sakuma I, Chiba T, Kobayashi E. Contrast enhancement between vasculature and placenta using narrow band images for TTTS surgery. Computer Assisted Radiology and Surgery 28th International Congress and Exhibition, Fukuoka, 2014. 6.
- Ando T, Kubota A, Kobayashi E, Sakuma I. A new tool tracking system for laparoscopic surgery based on inertial sensor. Computer Assisted Radiology and Surgery 28th International Congress and Exhibition, Fukuoka, 2014. 6.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

全て査読有

- 吉田真悟, 八木洋憲. 都市農家の農業及び不動産事業に対する主観的評価—JA 東京あおば管内の事業満足度アンケートによる—. 2014年度日本農業経営学会, 東京, 2014. 9.
- 吉田真悟, 八木洋憲, 木南章. 都市農家の長期的土地利用選択に関する研究. 日本地域学会第51回年次大会, 千葉, 2014. 10.
- Suzuki M, Fujii E, Saito Y, Hagiwara A, Yamamoto N. End-of-life care education in entry-level programs in Japan: A syllabi survey. 第34回日本看護科学学会学術集会, 愛知, 2014. 11.
- 松本博成, 成瀬昂, 阪井万裕, 永田智子. 中年期成人の要介護状態を想定したときの転居意向とその関連要因. 第73回日本公衆衛生学会. 栃木, 2014. 11.
- 金晃敏, 西野亜希子, 大島史也, 楊舒婷, 朴晟源, 廣瀬雄一, 大月敏雄, 西出和彦. 千葉県柏市の日常生活圏域における訪問・通所介護の利用実態に関する研究. 2014年度日本建築学会大会(近畿)学術講演会, 2014. 9
- 土屋瑠見子, 吉江悟, 川越正平, 平原佐斗司, 大西弘高, 村山洋史, 西永正典, 成瀬昂, 永田智子, 飯島勝矢, 辻哲夫. 開業医・他職種との協働に対する意識と在宅医療への自信との関連—在宅医療推進多職種連携研修会参加者における検討—. 第19回日本在宅ケア学会学術集会, 福岡, 2014. 11.
- 吉江悟, 土屋瑠見子, 飯島勝矢, 辻哲夫, 三浦久幸, 鳥羽研二, 大島伸一. 地域における在宅医療介護連携推進のための多職種研修会の普及に向けた汎用構造の検討. 第73回日本公衆衛生学会総会. 宇都宮, 2014. 11.
- 飯島勝矢, 土屋瑠見子, 吉江悟, 大西弘高, 孫大輔, 玉井杏奈. 大学—地域間連携の基盤を踏まえた地域医療における多職種協働での参加型医学教育の取り組み. 第46回日本医学教育学会大会, 和歌山, 2014. 7.

- ・ 吉江悟, 土屋瑠見子, 飯島勝矢, 辻哲夫, 三浦久幸, 鳥羽研二, 大島伸一. 在宅医療多職種連携研修会: 研修運営ガイドの作成と普及. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014. 6.
- ・ 飯島勝矢, 秋山弘子, 辻哲夫, 吉江悟, 土屋瑠見子, 大方潤一郎. ジェロントロジー (老年学) から「い・しょく・じゅう」を考える: 柏モデルを通じての超高齢社会への挑戦. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014. 6.
- ・ 飯島勝矢, 土屋瑠見子, 吉江悟, 大西弘高, 孫大輔. 大学—地域間連携を基盤とした在宅医療・地域医療への参加型医学教育の先進的取り組み. 第56回日本老年医学会学術集会, 福岡, 2014. 6.
- ・ 岡田宏子, 石川ひろの, 木内貴弘, 大橋靖雄. がん臨床試験のインフォームドコンセントでの使用を目的としたタブレット端末を用いた Decision Aid の開発. 日本ヘルスコミュニケーション学会第5回学術集会, 広島, 2014. 9.
- ・ 岡田宏子. 乳がん術後化学療法を受ける患者の苦痛—年齢層による認識の違い—. 日本看護科学学会第34回学術集会, 愛知, 2014. 11.
- ・ 安藤絵美子. 非正規雇用の労働と生活環境が次世代にもたらす影響 若年者における非正規雇用就労の現状と課題. 第82回日本衛生学会総会, 岡山, 2014. 5.
- ・ 小林由佳, 江口尚, 安藤絵美子, 川上憲人. 経営理念における産業保健活動に関する記載の分析. 第87回日本産業保健学会, 岡山, 2014. 5.
- ・ 島津明人, 窪田和巳, 安藤絵美子, 今井幸太郎, 江口尚, 黒田玲子, 小林由佳, 島田恭子, 津野香奈美, 難波克行, 原雄二郎, 川上憲人. 職場活性化のためのヒント集 (ポジティブ版メンタルヘルスアクションチェックリスト) の作成. 第87回日本産業保健学会, 岡山, 2014. 5.
- ・ 津野香奈美, 安藤絵美子, 井上彰臣, 栗岡住子, 井上彰臣. 病院職場におけるインシビリティと離職意識との. 第54回近畿産業衛生学会, 大阪, 2014. 11.
- ・ Haseda M, Kondo N, Ashida T, Tani Y, Kondo K. Community factors associated with income-based inequality in depressive symptoms among older adults. 第25回日本疫学会学術総会, 名古屋, 2015. 1.
- ・ Ashida T, Kondo N, Haseda M, Kondo K, JAGES project. What health measures show large disparity by income levels? : prioritizing the targets of long-term care prevention. 第25回日本疫学会学術総会, 名古屋, 2015. 1.
- ・ Tani Y, Kondo N, Sasaki Y, Haseda M, Kondo K. Joint effect of eating alone and cohabitation status on depressive symptoms among older women and men: The JAGES survey. 第25回日本疫学会学術総会, 名古屋, 2015. 1.
- ・ 小林亮介, 加藤哲久, 有井潤, 川口寧. HSV-1 キャプシドタンパク質 VP26 のリン酸化はウイルス増殖および病態発現に寄与する. 第62回日本ウイルス学会学術集会, 横浜, 2014. 11.
- ・ 三木康平, 正宗賢. 小型半球コイルを用いた高解像度 MR 画像計測デバイスの開発. 第23回日本コンピュータ外科学会大会, 大阪, 2014. 11.

- ・ 王天天, 転換期中国における郊外住宅地の形成と住民のライフヒストリー—北京市の事例—. 日本地理学会 2015 年春季学術大会, 東京, 2015. 3.
- ・ Zhang M, Narumi R, Azuma T, Okita K, Takagi S, Matsumoto Y. Focus Control Aided by Numerical Simulation in Soft Heterogeneous Media for High-Intensity Focused Ultrasound Treatment. 13th meeting of Japanese Society for Therapeutic Ultrasound (JSTU), Sendai, 2014. 11.
- ・ 金子和樹, 五味朋寛, 藤澤康二, 渡邊幸志, 梅澤仁, 鹿田真一, 伊藤公平, 早瀬潤子. 高均一配向軸を有するダイヤモンド NV 中心集合体を用いた磁場センシング. 日本物理学会第 69 回年次大会, 神奈川, 2014. 3.
- ・ 楊量景, 王君臣, 安藤岳洋, 窪田章宏, 山下紘正, 千葉敏雄, 佐久間一郎, 小林英津子. 双胎間輸血症候群の手術ナビゲーションにおける内視鏡自己位置提示の設計. 生活生命支援医療福祉工学系学会連合大会 2014, 北海道, 2014. 9.
- ・ 窪田章宏, 楊量景, 王君臣, 安藤岳洋, 山下紘正, 千葉敏雄, 佐久間一郎, 小林英津子. 狭帯域画像を使った双胎間輸血症候群手術のための画像マッピング. 日本コンピュータ外科学会, 大阪, 2014. 11.
- ・ 川野博子, 中川慶之, 太田誠一, 伊藤大知. コハク酸化キトサン／ヒドロキシアパタイト／ポリリン酸修飾スターポリマーハイブリッドゲルの開発. 日本膜学会第 37 年会, 東京, 2015. 5.
- ・ 吉永葉月, 金子元, 潮秀樹, 高橋伸一郎, 佐藤秀一. リジン過剰飼料がニジマスの脂質代謝に及ぼす影響. 平成 27 年度日本水産学会春季大会, 東京, 2015. 3.
- ・ 吉永葉月, 大場萌未, 金子元, 潮秀樹, 高橋伸一郎. ゼブラフィッシュにおけるリジン欠乏の脂質蓄積機構. 平成 27 年度日本水産学会春季大会, 東京, 2015. 3.
- ・ 吉永葉月, 金子元, 潮秀樹, 高橋伸一郎. リジン過剰飼料がゼブラフィッシュの脂質代謝に及ぼす影響. 平成 27 年度日本水産学会春季大会, 東京, 2015. 3.

2015 年度

【学術雑誌に発表した論文、著書】

全て査読有

- ・ 吉田真悟, 八木洋憲. 都市農家の農業及び不動産事業に対する主観的評価—JA 東京あおば管内の事業満足度アンケートによる—. 農業経営研究, 2015; 53(2): 31-36.
- ・ 吉田真悟, 八木洋憲, 木南章. 都市農家の長期的土地利用選択に関する研究—東京都練馬区における土地利用別土地純収益の事例分析—. 地域学研究, 2015; 45(3): 305-316.
- ・ Naruse T, Sakai M, Matsumoto H, Nagata S. Diseases that precede disability among latter-stage elderly individuals in Japan. BioScience Trends, 2015; 9(4): 270-274.
- ・ Matsumoto H, Naruse T, Sakai M, Nagata S. Who prefers to age in place? Cross-sectional

- survey of middle-aged people in Japan. *Geriatrics & Gerontology International*, 2016; 16 (5): 631–637.
- Naruse T, Tsuchiya R, Yamamoto N, Nagata S. Identifying Characteristics of Adults Absent from a Metabolic Syndrome Checkup in Japan Using CHAID Dendrograms and Insurance Claim Data. *Health*, 2015; 7: 1841–1846.
 - 木村琢磨, 吉江悟, 土屋瑠見子, 川越正平, 平原佐斗司. 在宅医療における医師・訪問看護師による胃瘻交換に関する調査. *日本在宅医学会雑誌*, 2015; 17(1): 11–19.
 - Fujita S, Kawakami N, Ando E, Inoue A, Tsuno K, Kurioka S, Kawachi I. The association of workplace social capital with work engagement of employees in health care settings: a multilevel cross-sectional analysis. *J Occup Environ Health*, 2016; 58(3): 265–71.
 - 安藤絵美子. 健康から考える非正規雇用の課題と対策 キャリア初期の非正規雇用就労が労働者にもたらす健康影響. *産業衛生学雑誌*, 2015; 57(5): 258–262.
 - Okuhara T, Ishikawa H, Okada H, Kiuchi T. Readability, suitability, and health content assessment of cancer screening announcements in municipal newsletters in Japan. *Asian Pacific Journal of Cancer Prevention*, 2015; 16(15): 6719–27.
 - 目麻里子, 上別府圭子. 働く女性のメンタルヘルスと家族看護学. *産業精神保健*, 2015; 23 (特別号): 128–131.
 - Sakka M, Sato I, Ikeda M, Hashizume H, Uemori M, Kamibeppu K. Family-to-work spillover and appraisals of caregiving by employed women caring for their elderly parents in Japan. *Industrial Health*, 2016; 54: 1–10.
 - Tani Y, Sasaki Y, Haseda M, Kondo K, Kondo N. Eating alone and depression in older men and women by cohabitation status: The JAGES longitudinal survey. *Age Ageing*, 2015; 44(6): 1019–26.
 - Miki K, Masamune K. High-resolution small field-of-view magnetic resonance image acquisition system using a small planar coil and a pneumatic manipulator in an open MRI scanner. *International Journal of Computer Assisted Radiology and Surgery*, 2015; 10 (10): 1687–1697.
 - 松田弥花. スウェーデンの Socialpedagogik 概念にみる教育・福祉・コミュニティの関係性に関する考察. *社会教育学研究*, 2015; 52(1): 23–32.
 - Yang L, Wang J, Ando T, Kubota A, Yamashita H, Sakuma I, Chiba T, Kobayashi E. Self-contained image mapping of placental vasculature in 3D ultrasound-guided fetoscopy. *Surgical Endoscopy*, 2015: 1–14.
 - Yang L, Wang J, Ando T, Kubota A, Yamashita H, Sakuma I, Chiba T, Kobayashi E. Towards scene adaptive image correspondence for placental vasculature mosaic in computer assisted fetoscopic procedures. *The International Journal of Medical Robotics and*

Computer Assisted Surgery, 2015, published online.

- Nakagawa Y, Amano Y, Nakasako S, Ohta S, Ito T. Biocompatible Star Block Copolymer Hydrogel Cross-linked with Calcium Ions. *ACS Biomaterials Science and Engineering*, 2015; 1(10): 914–918.
- Taniguchi S, Mizuno H, Kuwahara M, Ito K. Early attenuation of long-term potentiation in senescence-accelerated mouse prone 8. *Exp Brain Res*, 2015; 233(11): 3145–52
- Taniguchi S, Kuwahara M, Ito K. Chronic administration of N-acetyl-D-mannosamine improves age-associated impairment of long-term potentiation in the senescence-accelerated mouse. *Neurosci Lett*, 2015; 598: 41–6.
- Kanazawa T, Kitamura A, Nakagami G, Goto T, Miyagaki T, Hayashi A, Sasaki S, Mugi-ta Y, Iizaka S, Sanada H. Lower temperature at the wound edge detected by thermogra-phy predicts undermining development in pressure ulcers: a pilot study. *Int Wound J*, 2015.
- Ono S, Ishimaru M, Matsui H, Fushimi K, Yasunaga H. Effect of Hospital Volume on Outcomes of Surgery for Cleft Lip and Palate. *J Oral Maxillofac Surg*, 2015; 73(11): 2219–24.
- Yamana H, Ono S, Yasunaga H. Problems with study on secondhand smoke and chil-dren's tooth enamel. *BMJ*, 2015; 14; 351: h6759.
- Ono S, Ishimaru M, Ono Y, Matsui H, Fushimi K, Yasunaga H. Impact of Body Mass In-dex on the Outcomes of Open Reduction for Mandibular Fractures. *J Oral Maxillofac Surg* 2016; pii: S0278–2391(16)00023–9.
- Ono Y, Ono S, Yasunaga H, Matsui H, Fushimi K, Tanaka Y. Factors Associated With Mortality of Thyroid Storm: Analysis Using a National Inpatient Database in Japan. *Medicine (Baltimore)*, 2016; 95(7): e2848.
- Ono Y, Fujita M, Ono S, Ogata S, Tachibana S, Tanaka Y. A rabbit model of fatal hypo-thyroidism mimicking established by microscopic total thyroidectomy. *Endocr J*, 2016.
- Ueha S, Yokochi S, Ishiwata Y, Ogiwara H, Chand K, Nakajima T, Hachiga K, Shichino S, Terashima Y, Toda E, Shand FH, Kakimi K, Ito S, Matsushima K. Robust Antitumor Effects of Combined Anti-CD4-Depleting Antibody and Anti-PD-1/PD-L1 Immune Checkpoint Antibody Treatment in Mice. *Cancer Immunology Research*, 2015.
- Htun NC, Ishikawa-Takata K, Kuroda A, Tanaka T, Kikutani T, Obuchi SP, Hirano H, Ii-jima K. Screening for malnutrition in community dwelling older Japanese: preliminary development and evaluation of the Japanese Nutritional Risk Screening Tool (NRST). *J Nutr Health Aging*, 2016; 20(2): 114–20.
- Kuroda A, Tanaka T, Hirano H, Ohara Y, Kikutani T, Furuya H, Obuchi SP, Kawai H,

Ishii S, Akishita M, Tsuji T, Iijima K. Eating Alone as Social Disengagement is Strongly Associated With Depressive Symptoms in Japanese Community-Dwelling Older Adults. *J Am Med Dir Assoc*, 2015; 16(7): 578-85.

- ・ 田中弥生, 本川住子, 中澤優, 田中友規, 横山典子, 渡部厚一, 宮川哲夫, 久野譜也. タブレット端末を使用した在宅酸素療養患者のセルフマネジメントの有用性について. *日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌*, 2015; 25(3): 446-452.

【国際会議における発表】

全て査読有

- ・ Mugiyama R, Attitude Mapping of Asian People toward Integration in Asia: Regional Similarities and Differences of Asian Identity and Threat Perception. International Workshop, Changing Attitudes of the Students and the Future of Asia: Analysis of Asian Student Survey Integrated Dataset, Philippines, 2016. 2.
- ・ Eunji HWANG. Possibility of Existence of Informal Care-Management on Long-term Care Insurance in Korea: In Comparison with Japan. IARU Graduate Student Conference 2014, Copenhagen, 2015. 6.
- ・ Yoshida S, Hamada M, Choki M, Goto J. Farming to Enrich the Lives of Older People: An Exploratory Study in Japan. The Gerontological Society of America 68th Annual Scientific Meeting, Orlando (GSA), 2015. 11.
- ・ Takai Y, Yamamoto-Mitani N, Igarashi A, Saito Y, Fujii F. Health care staff's perceptions and attitudes toward quality of care at long-term care facilities in Japan: Identification of resources to improve quality of care for older patients. The 4th Global Congress for Qualitative Health Research (GCQHR), Dialogues and Bridges for Intercultural Health, Merida, 2015. 3.
- ・ Fujii F, Okuyama A, Okada H, Tsuchiya R, Sugimoto M, Mikoshiba N, Hatanaka R, Makino A, Nagata S, Higuchi N. Content analysis of factors behind changes in elderly people's views of advance directives. The 21th Congress of the International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG), Cheng Mai, 2015. 10.
- ・ Mikoshiba N, Okada H, Tsuchiya R, Fujii F, Okuyama A, Sugimoto M, Yamaguchi T, Sato M, Nagata S, Higuchi N. Development of a decision making tool for advanced care planning in Japan. The 21th Congress of the International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG), Cheng Mai, 2015. 10.
- ・ Hatanaka R, Tsuchiya R, Okada H, Sugimoto M, Fujii F, Mikoshiba N, Nishigami O, Nagata S, Higuchi N. A comparative study of the written instruction about medical care and the asset. The 21th Congress of the International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania, Cheng Mai, 2015. 10.

- Tsuchiya R, Okada H, Sugimoto M, Fujii F, Okuyama A, Mikoshiha N, Ogino R, Hatana-ka R, Nagata S, Higuchi N. Family caregiving experience and advance directives. International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG), Cheng Mai, 2015. 10.
- Okada H, Tsuchiya R, Fujii F, Sugimoto M, Okuyama A, Mikoshiha N, Ogino R, Nishigami O, Nagata S, Higuchi N. Knowledge, Attitudes, Behavior Regarding Advance Directives Among Japan's Elderly. The 21th Congress of the International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG), Cheng Mai, 2015. 10.
- Sugimoto M, Okuyama A, Okada H, Fujii F, Tsuchiya R, Mikoshiha N, Nishigami O, Makino A, Nagata S, Higuchi N. Factors that inhibit implementation of advance directives among elderly of Kashiwa city. The 21th Congress of the International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG), Cheng Mai, 2015. 10.
- Matsumoto H, Naruse T, Sakai M, Nagata S. The need for nursing homes at the municipality level in Japan, The 6th International Conference on Community Health Nursing. Seoul, 2015. 8.
- Nagata S, Naruse T , Matsumoto H, Continuity of care after discharge from a hospital that is within or beyond the patients' living area, The 6th International Conference on Community Health Nursing. Seoul, 2015. 8.
- Takanashi S, Sakka M, Sato I, Watanabe S, Tanaka S, Ooshio A, Saito N, Kamibeppu K. Factors related to openness of mother-child communication about a father suffering from neurobehavioural sequelae after stroke or traumatic brain injury. 12th International Family Nursing Conference, Odense, 2015. 8.
- Uchiyama E, Matsumoto H, Hamada M, Choki M, Suzuki C, Fu Y, Nishino A. Falling, fractures, and changing lifestyles for elderly Japanese: A qualitative exploratory study, The gerontological Society of American 68th Annual Scientific Meeting (IAGG), Orland, 2015. 11.
- Matsumoto H, Uchiyama E, Yoshida S, Kim K, Miki K, Son B, Nishino A, Designing built environments to prevent falls, fall-related fractures, and post-fall home confinement, The gerontological Society of American 68th Annual Scientific Meeting (IAGG), Orland, 2015. 11.
- Kojima T, Hiyama A, Kobayashi K, Kamiyama S, Ishii N, Hirose M, Akiyama H, EXILE: Experience based Interactive Learning Environment, Proc. ACM Augmented Human 2016, Geneva, 2016.
- Kim K, Nishino A, Otsuki T, Nishide A, Geographical Factors in Siting Providers of Long-Term Care in Japanese Municipalities, The gerontological Society of American 68th Annual Scientific Meeting (IAGG), Orlando, 2015. 11.

- Matsumoto Y, Yoshie S, Tsuchiya R, Kawagoe S, Hirahara S, Onishi H, Yamanaka T, Iijima K, Tsuji T. Development of a Homecare Interdisciplinary Team Training Program for Health Care Professionals in Japan. The gerontological Society of American 2015 Annual Scientific Meeting (IAGG), Orland, 2015. 11.
- Tsuchiya R, Lee J, Watanabe E, Park J, Fukahori A, Mori K, Kawakubo K. Socio-demographic characteristics and daily physical activity among rural Japanese residents with back pain and knee pain. World confederation of Physical Therapy congress 2015, Singapore, 2015. 5.
- M Noguchi-Watanabe, T Yamanaka, K Sakurai, A Tamai, R Tsuchiya, H Hirano, S Yoshie, Y Matsumoto, K Iijima, M Akishita. A review of home care in Asia. The 21th International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) 2015, Chiang Mia, Thailand, 2015. 10.
- Ando E, Kawakami N. The association of involuntary non-permanent employment status with psychological distress. The 13rd International Congress on Behavioural Medicine, Groningen, 2015. 9.
- Ando E, Kawakami N, Shimazu A, Odagiri Y, Shimomitsu T. Reliability and validity of the English version of the New Brief Job Stress questionnaire. The 31th International Congress of Occupational Health, IC-0793, Seoul, 2015. 5.
- Ando E, Kawakami N. Getting Bullied at school, involuntary precarious employment, and psychological distress in adulthood: evidence from community-based data in Japan. Society for Longitudinal and Lifecourse Studies Conference 2015, Dublin, 2015. 10.
- Ando E, Nomura T, Aida J, Hikichi H, Inoue K, Hosaka, Tabata T, Kondo K. The association of pet ownership with depression among the older in Japan: Are dogs good friends with the older? World Psychiatry Association, Section on Epidemiology and Public Health 2016, Munich, 2016. 3.
- Yagata H, Watanabe T, Okada H, Saito M, Takayama T, Imai H, Yoshida Y, Tamai N, Nozawa K, Yajima T, Sangai T, Yoshimura A, Hasegawa Y, Doi T, Ohashi Y, Shimozuma K. The difference of long-term hair recovery among chemotherapeutic regimens in breast cancer patients. The 2015 American Society of Clinical Oncology (ASCO) Annual Meeting. 2015. 5-6.
- Yoshida Y, Watanabe T, Yagata H, Okada H, Saito M, Takayama T, Imai H, Tamai N, Nozawa K, Yajima T, Sangai T, Yoshimura A, Hasegawa Y, Doi T, Ohashi Y, Shimozuma K. Patients' recognition of long-term chemotherapy-related changes in their hair and differences among drugs. Annual Meeting on Supportive Care in Cancer (MASCC/ISOO) 2015. 6.

- Kobayashi R, Kato A, Arii J, Kwaguchi Y. The herpes simplex virus type 1 (HSV-1) capsid protein VP26 is functionally regulated by phosphorylation in vitro and in vivo. The 14th Awaji International Forum on Infection and Immunity, Awaji, 2015. 10.
- Okatani T, Takahashi H, Noda K, Takahata T, Matsumoto K, Shimoyama I. A tactile sensor for simultaneous measurement of applied forces and friction coefficient. The 29th IEEE International Conference on Micro Electro Mechanical Systems (MEMS2016), Shanghai, 2016. 1.
- Suzuki K, Yokoyama M, Kinoshita Y, Mochizuki T, Yamada T, Sakurai S, Narumi T, Tanikawa T, Hirose M. Enhancing Effect of Mediated Social Touch between Same Gender by Changing Gender Impression. The 7th Augmented Human (AH2016), 2016. 3.
- Suzuki K, Yokoyama M, Kinoshita Y, Mochizuki T, Yamada T, Sakurai, S. Enhancing Effect of Mediated Social Touch between Same Gender by Changing Gender Impression. In Proceedings of the 7th Augmented Human International Conference 2016, 2016. 2.
- Matsuda Y. The Differences in “Social Pedagogy” between Sweden and Japan: Considerations of using the Theory of “Education Welfare”, Nordic Educational Research Association 2016, Helsinki, 2016. 3.
- Tiantian W. The Formation of Suburban Residential Area in Chinese Cities under the Economic Transition: A Case Study of Beijing. The 10th China-Japan-Korea Joint Conference on Geography, Shanghai, 2015. 10.
- Zhang M, Azuma T, Okita K, Qu X, Narumi R, Furusawa H, Shidooka J, Takagi S, Matsumoto Y. Temperature distribution analysis for High Intensity Focused Ultrasound Breast Cancer Treatment by Numerical Simulation. 2015 IEEE International Ultrasonics Symposium. Taipei. 2015. 10.
- Yang L, Wang J, Ando T, Kubota A, Yamashita H, Sakuma I, Chiba T, Kobayashi E. Towards Collaborative Ultrasound-Guided Fetoscopic Surgical Navigation using Minimally Invasive Kinematic Constraints, The 11th Asian Conference on Computer Aided Surgery (ACCAS 2015), 2015. 7.
- Nakagawa Y, Ohta S, Ito T. Synthesis of Hyaluronic Acid Grafted with Polyacrylic Acid and Formation of Its Biocompatible Calcium Salt. Biomaterials International 2015, Kenting, 2015. 6.
- Doke M, Matsuwaki T, Yamanouchi K, Nishihara M. Progranulin deficiency attenuates estrogen-induced increase of adult neurogenesis in the hippocampus. Neuroscience 2015, SfN's 45th annual meeting, Chicago, 2015. 10.
- Goto T, Tamai N, Nakagami G, Naito A, Hirokawa M, Amemiya A, Kitamura A, Koyano Y, Sanada H. Nerve growth factor and S100A8/A9 in exudates from venous leg ulcers

are associated with wound pain status. EWMA 2015, London, 2015. 3.

- Goto T, Nakagami G, Naresh R, Minematsu T, Sanada H. Different effects of various N-acyl-homoserine lactones on healing process of full-thickness wounds in diabetic rats. TIWCC 2015, Taiwan, 2015. 1.
- Goto T, Nakagami G, Takehara K, Nakamura T, Kawashima M, Tsunemi Y, Sanada H. Examination of the accuracy of visual inspection for screening tinea pedis and tinea unguium in aged care facility residents. The 21th International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG), Chiang Mai, 2015. 10.
- Takehara K, Nakagami G, Goto T, Tsunemi Y, Ikeda M, Sanada H, Takemura Y. Screening of plantar tinea pedis by morphological characteristics of scale in aged care facility residents. The 21th International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG), Chiang Mai, 2015. 10.
- Goto T, Nakagami G, Tamai N, Kitamura A, Naito A, Hirokawa M, Shimokawa C, Sanada H. The relationship between wound pain and general and dermatologic quality of life in venous leg ulcer patients. The 19th East Asia Forum of Nursing Scholars, Chiba, 2016. 3.
- Iijima K, Tanaka T, Kuroda A, Kozaki K, Toba K, Akishita M, Tsuji T. Comprehensively Preventive Approach Including Social Engagement for Sarcopenia in the Elderly. The Gerontological Society of America 68th Annual Science meeting (GSA), Orlando, 2015. 11.
- Iijima K, Tanaka T, Kuroda A, Hirano H, Ohara Y, Kikutani T, Furuya H, Akishita M, Tsuji T. Upstream preventive strategy for age-related sarcopenia in the elderly: Verification of the process of frailty with multi-faced factors. The 21th International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG), Chiangmai, 2015. 10.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

全て査読有

- 麦山亮太, 目麻里子, 木全真理, 福井康貴. 要介護高齢者の施設入所選択にはたらく世帯構成と経済状況の影響に関する計量分析. 第74回日本公衆衛生学会総会, 長崎, 2015. 11.
- 黄銀智, 目麻里子, 長谷田真帆, 松本博成, 安藤絵美子, 麦山亮太, 木全真理, 福井康貴. 経過的視点からみ. 要介護者の在宅療養継続要因の可視化の提案. 第74回日本公衆衛生学会総会, 長崎, 2015. 11.
- 吉田真悟, 八木洋憲, 木南章. 都市農業における新規参入者の経営資源獲得プロセスに関する研究—東京都を事例として—. 日本地域学会第52回年次大会, 岡山, 2015. 10.
- 吉田真悟, 八木洋憲, 木南章. 新規就農者の経営者能力の獲得プロセス—都市農業における自営就農者と新規参入者の比較研究—. 2016年度日本農業経済学会大会, 秋田, 2016. 3.
- 山本則子, 五十嵐歩, 高井ゆかり, 齋藤弓子, 藤井文香, 二見朝子. 療養病床におけるケアの

- 質向上にむけた管理的な工夫. 第 23 回日本慢性期医療学会, 名古屋, 2015. 9.
- ・ 高井ゆかり, 山本則子, 五十嵐歩, 齋藤弓子, 藤井文香, 二見朝子. 長期療養施設に勤務する職員によるケアの質向上にむけた工夫: 部門を越えた協働. 第 23 回日本慢性期医療学会, 名古屋, 2015. 9.
 - ・ 齋藤弓子, 藤井文香, 二見朝子, 五十嵐歩, 高井ゆかり, 山本則子. 医療療養型病床におけるケアの質に関する職員の認識—多職種へのインタビュー調査をもとに—. 第 20 回日本老年看護学会学術集会, 横浜, 2015. 6.
 - ・ 松本博成, 成瀬昂, 蔭山正子, 永田智子. 地域アセスメントにおけるフォトボイス (photo-voice) の導入: 文献レビュー. 日本地域看護学会第 18 回学術集会, 神奈川, 2015. 8.
 - ・ 松本博成, 成瀬昂, 阪井万裕, 土屋瑠見子, 山本なつ紀, 永田智子. 市町村レベルの訪問看護供給構造の可視化の試み: (1) アクセシビリティ指標の開発, 第 74 回日本公衆衛生学会, 長崎, 2015. 11.
 - ・ 成瀬昂, 松本博成, 阪井万裕, 土屋瑠見子, 山本なつ紀, 永田智子. 市町村レベルの訪問看護供給構造の可視化の試み: (2) 構造の可視化と実用性の検討. 第 74 回日本公衆衛生学会, 長崎, 2015. 11.
 - ・ 渡辺隆紀, 矢形寛, 齊藤光江, 岡田宏子, 矢嶋多美子, 三階貴史, 権藤なおみ, 長谷川善枝, 土井卓子, 下妻晃二郎. 乳癌補助化学療法における脱毛の実態に関する多施設アンケート調査. 第 23 回日本乳がん学会学術総会, 東京, 2015. 7.
 - ・ 矢形寛, 渡辺隆紀, 岡田宏子, 齊藤光江, 高山智子, 三階貴史, 権藤なおみ, 長谷川善枝, 土井卓子, 下妻晃二郎. 乳癌化学療法レジメン別にみた頭髪の長期的回復—全国アンケート調査から—. 第 23 回日本乳がん学会学術総会, 東京, 2015. 7.
 - ・ 岡田宏子, 渡辺隆紀, 矢形 寛, 齊藤光江, 高山智子, 今井博久, 吉田悠子, 玉井奈緒, 野澤桂子, 矢嶋多美子, 下妻晃二郎. 乳癌の化学療法に起因した脱毛に対する予防的介入: システムティックレビュー. 第 23 回日本乳がん学会学術総会, 東京, 2015. 7.
 - ・ 黄銀智. 韓国の老人長期療養保険におけるケアマネジメントの可能性. 第 13 回福祉社会学会, 名古屋, 2015. 6.
 - ・ 黄銀智. 韓国の老人長期療養保険の実践におけるケアマネジメントの主体, 第 130 回社会政策学会, 東京, 2015. 6.
 - ・ 金晃敏, 西野亜希子, 大島史也, 大月敏雄, 西出和彦. 利用者と事業所間の位置関係から見た訪問・通所介護の日常生活圏域に関する研究—柏市の訪問・通所介護の利用実態を中心に—. 2015 年度日本建築学会大会, 神奈川, 2015. 9
 - ・ 中溝量子, 小南友里, 中久保泰起, 中谷操子, 岡田茂, 松岡洋子, 植木暢彦, 万建栄, 渡部終五, 潮秀樹. ギス肉の加熱ゲル形成と戻りについて I. 平成 27 年度日本水産学会秋季大会, 仙台, 2015. 9.
 - ・ 小南友里, 中溝量子, 中久保泰起, 中谷操子, 岡田茂, 松岡洋子, 植木暢彦, 万建栄, 渡部終

- 五, 潮 秀樹. ギス肉の加熱ゲル形成と戻りについて II. 平成 27 年度日本水産学会秋季大会, 仙台, 2015. 9.
- ・ 飯島勝矢, 吉江悟, 松本佳子, 土屋瑠見子, 川越正平, 平原佐斗司, 大西弘高, 山中崇, 辻哲夫. 在宅医療推進のための多職種連携研修会受講者の反応および意識・知識・実践の変化. 第 74 回日本公衆衛生学会総会, 長崎, 2015. 11.
 - ・ 松本佳子, 吉江悟, 土屋瑠見子, 川越正平, 平原佐斗司, 大西弘高, 山中崇, 飯島勝矢, 辻哲夫. 「在宅医療推進のための多職種連携研修会」受講者の職種間連携活動の変化. 第 74 回日本公衆衛生学会総会, 長崎, 2015. 11.
 - ・ 吉江悟, 松本佳子, 土屋瑠見子, 川越正平, 平原佐斗司, 大西弘高, 山中崇, 飯島勝矢, 辻哲夫. 「在宅医療推進のための多職種連携研修会」開業医の受講 1 年後の診療報酬算定状況. 第 74 回日本公衆衛生学会総会, 長崎, 2015. 11.
 - ・ 木村琢磨, 吉江悟, 土屋瑠見子, 川越正平, 平原佐斗司. 在宅医療における医師・訪問看護師による胃瘻交換に関する調査. 第 6 回プライマリ・ケア連合学会学術大会, 筑波, 2015. 6.
 - ・ Yokoyama H, Tamai A, Kusumoto N, Tsuchiya R, Sakurai K, Yamanaka T. Medication use and comorbidities among those in the hospital rehabilitation unit with fractures. 第 6 回プライマリ・ケア連合学会学術大会, 筑波, 2015. 6.
 - ・ 楠本直紀, 玉井杏奈, 横山晴子, 渡邊紋子, 藤原拓也, 土屋瑠見子, 櫻井桂子, 山中崇. 高齢転倒骨折患者に対する住環境調査の必要性を判断する要因の検討. 第 6 回プライマリ・ケア連合学会学術大会, 筑波, 2015. 6.
 - ・ 土屋瑠見子, 吉江悟, 山中崇, 永田智子, 飯島勝矢. 訪問リハビリテーションサービス提供者における共感的態度—臨床経験と勤務状況に着目した探索的研究—. 第 29 回日本老年学会総会合同大会, 横浜, 2015. 6.
 - ・ 吉江悟, 土屋瑠見子, 野口麻衣子, 小林唯浩, 松本直樹, 辻哲夫. 後期高齢者における在宅患者訪問診療料算定状況と要介護度等との関連. 第 17 回日本在宅医学会もりおか大会. 盛岡, 2015. 4.
 - ・ 野口麻衣子, 山中崇, 土屋瑠見子, 平野央, 玉井杏奈, 飯島勝矢. 医学部学生に対する在宅医療を中心とした地域医療学実習の効果に関する検討—キャリア選択上の在宅医療への関心—. 第 17 回日本在宅医学会もりおか大会. 盛岡, 2015. 4.
 - ・ 川上憲人, 安藤絵美子, 島津明人. 健康いきいき職場づくり 8 つのステップ: 国際標準に基づいたポジティブメンタルヘルスの方法論の開発. 第 88 回日本産業衛生学会総会, 大阪市, 2015. 5.
 - ・ 安藤絵美子, 可知悠子, 川上憲人, 福田吉治, 川田智之. 非正規雇用と循環器疾患リスクの関連: 国民生活基礎調査と国民健康栄養調査. 第 74 回日本公衆衛生学会総会, 長崎, 2015. 11. 5.
 - ・ 長谷田真帆, 近藤尚, 芦田登代, 高木大資, 谷友香子, 尾島俊之, 近藤克則. 介護予防担当職

- 員のソーシャル・キャピタルと施策化能力：JAGES 市町村担当者調査。第 74 回日本公衆衛生学会総会，長崎，2015. 11.
- ・ 近藤尚己，長谷田真帆，芦田登代，谷友香子，高木大資，尾島俊之，近藤克則。介護予防における地域診断と部門・職種間連携の効果：JAGES 介入研究プロトコル。第 74 回日本公衆衛生学会総会，長崎，2015. 11.
 - ・ 芦田登代，近藤尚己，長谷田真帆，尾島俊之，近藤克則。介護予防における地域間格差是正に向けた地域診断：JAGES プロジェクト。第 74 回日本公衆衛生学会総会，長崎，2015. 11. 4-6.
 - ・ 長谷田真帆，近藤尚己，高木大資，近藤克則。ソーシャル・キャピタルは高齢者の抑うつ格差を縮小するか：JAGES 横断データを用いたマルチレベル分析。第 26 回日本疫学会学術総会，米子，2016. 1.
 - ・ 吉野太基，村本由紀子。追求者・満足者における希望が逐次的意思決定に与える影響。日本社会心理学会第 56 回大会，東京，2015. 10-11.
 - ・ 馬場絢子。娘における「母親の人生を背負わされる」過程に関する検討，日本心理学会第 79 回大会，名古屋，2015. 9.
 - ・ 寺本千恵，茂寿枝，永田智子。救急外来受診後に帰宅した患者の中で年に複数回受診する患者像：年齢グループ別の検討。平成 27 年日本公衆衛生学会総会，長崎，2015. 11.
 - ・ 蔭山正子，成瀬昂，飯坂真司，永田智子，川上文子，角川由香，前田明里，茂寿枝。Photo-voice の保健師・看護師教育における活用可能性を探る。日本地域看護学会第 18 回学術集会，神奈川，2015. 8.
 - ・ 角川由香。在宅移行期における家族支援～退院支援看護師の立場から～。第 28 回日本サイコロジロジー学会総会，広島，2015. 9. 9.
 - ・ 寺本千恵，横田慎一郎，角川由香，前田明里，永田智子。救急外来に年間 5 回以上の受信を繰り返す患者の特徴。年齢グループ別の検討。第 35 回日本看護科学学会学術集会，広島，2015. 12.
 - ・ 大園康文，福井小紀子，清水準一，戸村ひかり，角川由香，石橋史子。大学病院における終末期がん患者の退院支援（第 1 報）支援開始後早期退院を促す要因。第 35 回日本看護科学学会学術集会，広島，2015. 12.
 - ・ 清水準一，福井小紀子，大園康文，角川由香，戸村ひかり，石橋史子。大学病院における終末期がん患者の退院支援（第 2 報）—退院支援内容と在宅死との関連—。第 35 回日本看護科学学会学術集会，広島，2015. 12.
 - ・ 永田智子，蔭山正子，成瀬昂，飯坂真司，川上文子，角川由香。Intervention Wheel の日本への応用—保健師活動の国際的議論に向けて—。第 4 回日本公衆衛生看護学会学術集会，東京，2016. 1.
 - ・ 王天天。中国における都市空間構造の再編と都市住民ライフスタイルの変化。日本地理学会 2015 年秋季学術大会，松山，2015. 9.

- ・ 金子和樹, 梅田靖. 個人化を目的とした設計方法論の構築に向けた事例分析, 2016年度精密工学会春季大学学術講演会, 東京理科大学, 2016. 3. 17.
- ・ 谷口紗貴子, 滝本明佳, 伊藤公一, 桑原正貴. アセチル-L-カルニチンが老化促進モデルマウスの海馬シナプス長期増強に及ぼす影響. 第158回日本獣医学会学術集会, 青森, 2015. 9.
- ・ 後藤大地, 玉井奈緒, 仲上豪二郎, 峰松健夫, 北村言, 内藤亜由美, 広川雅之, 下川千佐子, 真田弘美. 静脈性下腿潰瘍の滲出液中の神経成長因子およびS100A8/A9は創傷の痛みと関係する. 第24回日本創傷・オストミー・失禁管理学会, 千葉, 2015. 5.
- ・ Goto T, Tamai N, Nakagami G, Kitamura A, Naito A, Hirokawa M, Shimokawa C, Sanada H. Nerve growth factor as a pain biomarker in exudate from venous leg ulcers is associated with inflammation along with temperature increase evaluated by infrared thermographic assessment. 第24回日本創傷・オストミー・失禁管理学会, 千葉, 2015. 5.
- ・ 金澤寿樹, 仲上豪二郎, 後藤大地, 野口博史, 大江真琴, 宮垣朝光, 林明辰, 佐々木早苗, 真田弘美. スマートフォン装着型の携帯サーモグラフィによる褥瘡と糖尿病足病変の潜在的炎症評価の有用性の検討. 第17回日本褥瘡学会学術集会, 宮城, 2015. 8.
- ・ 禰屋光男, 峰松健夫, 松林武生, 中村真理子, 池田真一, 後藤大地, 土肥美智子. スキンプロットティング法を利用した高強度運動時の局所的筋動態の評価. 第70回日本体力医学会, 和歌山, 2015. 9.
- ・ 後藤大地, 仲上豪二郎, 金澤寿樹, 峰松健夫, 真田弘美. 糖尿病モデルラット皮膚全層欠損創に対してアシル鎖長の異なるアシルホモセリンラクトンが及ぼす影響. 第45回日本創傷治療学会, 東京, 2015. 11.
- ・ 大野洋介, 大野幸子, 康永秀生, 田中祐司. DPCデータベースを用いた、粘液水腫性昏睡の疫学と死亡関連因子の解析. 第88回日本内分泌学会学術総会, 2015. 4.
- ・ 石丸美穂, 大野幸子, 康永秀生, 小池創一. 「医師・歯科医師・薬剤師調査」データを用いた歯科医師数の将来予測. 第74回日本公衆衛生学会総会, 2015. 10.
- ・ 大野幸子, 石丸美穂, 松居宏樹, 康永秀生. 唇裂・口蓋裂の施設別手術件数 (hospital volume) と術後アウトカムの関連 第60回日本口腔外科学会 2015. 11.
- ・ 大野幸子, 石丸美穂, 大野洋介, 松居宏樹, 伏見清秀, 康永秀生. Impact of body mass index on the outcomes of open reduction for mandibular fracture. 第26回日本疫学会学術総会 2016. 1.
- ・ 田中友規, 黒田亜希, 飯島勝矢. サルコペニアに至る構造モデルの構築—千葉県柏市在住高齢者における横断検討—第31回日本静脈経腸栄養学会学術集会. 福岡, 2016. 2.
- ・ 田中友規, 黒田亜希, 高橋競, 飯島勝矢. 身体計測によるサルコペニアスクリーニング能の部位比較・基準値の探索—千葉県柏市在住高齢者における検討. 第31回日本静脈経腸栄養学会学術集会, 福岡, 2016. 2.
- ・ 田中友規, 黒田亜希, 辻哲夫, 飯島勝矢. 「指輪っかテスト」はサルコペニア発症リスクの予

- 測因子である— COX 比例ハザードモデル—. 第 57 回日本老年医学会学術集会, 横浜, 2015. 5.
- ・ 田中友規, 黒田亜希, 菊谷武, 平野浩彦, 古屋裕康, 小原由紀, 辻哲夫, 飯島勝矢. 舌運動の力と四肢骨格筋肉量およびサルコペニアとの関連性の検討—千葉県柏市による大規模調査より—. 第 57 回日本老年医学会学術集会, 横浜, 2015. 5.
 - ・ 田中友規, 黒田亜希, 高橋競, 飯島勝矢. 地域高齢者の組織参加と低四肢骨格筋量の関連—傾向スコア逆転重み付け法による疑似無作為化比較試験. 第 22 回日本未病システム学会学術集会, 札幌, 2015. 10.
 - ・ 高橋競, 田中友規, 黒田亜希, 飯島勝矢. 地域在住高齢者における口腔巧緻性と社会参加の関連—千葉県柏市における大規模健康調査から—. 第 22 回日本未病システム学会学術集会. 札幌, 2015. 10.
 - ・ 高橋競, 田中友規, 黒田亜希, 飯島勝矢. 地域在住高齢者における食事摂取量と口腔機能の関連—千葉県柏市における大規模健康調査から—. 第 31 回日本静脈経腸栄養学会学術集会, 福岡, 2016. 2.
 - ・ 田中弥生, 横山典子, 田中友規, 中澤優, 久野譜也. タブレット端末を使用した在宅酸素療養患者のセルフマネジメントの有用性. 第 31 回日本静脈経腸栄養学会学術集会. 福岡, 2016. 2.
 - ・ 黒田亜希, 田中友規, 飯島勝矢. 地域在住高齢者のサルコペニア有症別からみた社会性とうつ傾向の関連: 柏スタディーから. 第 57 回日本老年医学会学術集会, 横浜, 2015. 5.
 - ・ 飯島勝矢, 田中友規, 黒田亜希. 「栄養 (食/口腔)・運動・社会性」三位一体型の新たなフレイルフロー概念: 包括的フレイル予防戦略を目指して. 第 57 回日本老年医学会学術集会, 横浜, 2015. 5.
 - ・ 飯島勝矢, 田中友規, 黒田亜希. サルコペニア早期予防を見据えた『指輪っかテスト』の有用性: フレイルとの関連. 第 57 回日本老年医学会学術集会, 横浜, 2015. 5.

4. コース生受賞歴

()内は年度

■ 安藤絵美子

- 「平成 26 年度日本老年学的评价研究 (J-AGES) 研究ワークショップ, 研究テーマ最優秀賞」(2014)

■ 岡田宏子

- 「日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会ポスター発表, 奨励賞」(2014)

■ 鈴木智絵

- 「The 11th International Conference on Advances in Computer Entertainment Technology (ACM ACE 2014), ACE Gold Paper Award」(2014)

■ 内山瑛美子

- 「第 20 回 IFToMM 会議シンポジウム, Young Investigator Award Best Paper 賞 Finalist」(2014)
- 「The 12th IEEE Transdisciplinary-Oriented Workshop for Emerging Researchers, WIE Best Award」(2015)

■ 吉田真悟

- 「日本地域学会第 51 回年次大会, 最優秀発表賞」(2014)
- 「平成 27 年度東京大学大学院農学生命科学研究科長賞」(2015)

■ 窪田章宏

- 「日本生体医工学会関東支部若手研究者発表会, 優秀論文発表賞」(2014)
- 「The 11th Anniversary Asian Conference on Computer Aided Surgery, Best Paper Award」(2015)

■ 金子和樹

- 「日本学術会議第 4 回先端フォトンクスシンポジウム, 人気ポスター賞」(2014)

■ 鈴木啓太

- 「マルチメディア・仮想環境基礎研究会 (MVE 研究会), MVE 賞」 (2015)
- 「The 7th Augmented Human International Conference 2016 (ACM AH 2016), Third Best PaperAward」 (2015)

■ 木下由貴

- 「The 7th Augmented Human International Conference 2016, Third Best Paper-Award」 (2015)

■ 谷口紗貴子

- 「第 158 回日本獣医学会学術集会, 生理学・生化学分科会奨励賞」 (2015)

■ 田中友規

- 「第 31 回日本静脈経腸栄養学会学術集会, フェローシップ賞」 (2015)

■ 吉永葉月

- 「第 15 回東京大学生命科学シンポジウム, ポスター賞」 (2015)

5. 広報活動

1. プログラム・パンフレット

GLAFS パンフレット

2014年度、2015年度共にプログラム・パンフレット（28ページ）を作成。各研究科の研究室・事務室、プログラム教員、産学連携企業等、関係者に配布した。



2. 学生募集チラシ・ポスター

コース生募集ポスター

東京大学大学院・博士課程教育リーディング・プログラム



**「活力ある超高齢社会を共創する
グローバル・リーダー養成プログラム」**

コース生(入学・編入)を募集します

■ プログラムの目的
博士課程から博士後期課程までの一貫した教育を行い、各研究科・専攻における教育を通じて「高度な専門的研究能力」を育成するとともに、本プログラム固有の教育カリキュラムを通じて、「高齢社会問題に関する「洞察力」と、国際に社会を捉える「実践力」を育成し、もって、日本や世界各地の実況の動向において、活力ある超高齢社会を実現する取り組みを主導する世界レベルの博士人材を育成すること。

■ プログラムの履修要件と学位
本プログラムを履修する学生(コース生)は、所屬専攻の履修要件を満たすと同時に、本プログラムの提供する高齢社会総合研究学に関する共通科目について所定の単位を取得し、所屬専攻における博士論文の審査に合格し、本プログラム固有の博士論文の審査に合格した場合は、「高齢社会総合研究プログラム修了証」が交付されるとともに、所屬専攻が授ける博士の学位記に「高齢社会総合研究プログラム修了」という認定が付記されます。

■ 応募資格
下記の専攻の博士課程および博士課程に平成26(2014)年4月入学申込の者で、高齢社会の諸問題の解決に資する研究により博士の学位を取得しようとする者。

- ・工学系研究科: 社会基盤学専攻、建築学専攻、都市工学専攻、機械工学専攻、情報工学専攻、化学システム工学専攻、先端工学専攻
- ・人文社会系研究科: 社会文化研究専攻
- ・教育学研究科: 総合教育学専攻、学校教育高度化専攻
- ・法学政治学研究科: 総合法政専攻
- ・総合文化研究科: 広域科学専攻
- ・農学生命科学研究科: 生産・資源生物学専攻、応用生命化学専攻、水産生物学専攻、農業・食品経済学専攻、生物・環境工学専攻、応用動物科学専攻、獣医学専攻
- ・医学系研究科: 社会医学専攻、生体・環境・先端医学専攻、外科学専攻、健康科学・看護学専攻
- ・新領域創成科学研究科: 先端エネルギー工学専攻、メカニカルシステム専攻、人間環境学専攻、社会文化連携学専攻
- ・情報理工学系研究科: 先端機械情報学専攻

■ 奨学金の支給
博士前期課程(博士課程)2年次のコース生には、概ね授業料に相当する額の学習奨励金、博士後期課程のコース生には、学業成績等に応じ、月額20万円～15万円の学習奨励金を支給します。

■ 募集人員: 概ね40名。

■ 選考方法
書類審査・面接を総合的に判断して行います。詳細については「募集要項」を参照のこと。
募集要項は、GLAFS事務局(高齢社会総合研究機構)工学部8号館7階701号室にて配布中。
また、募集要項は下記のURLでダウンロードできます。
<http://www.glafts.u-tokyo.ac.jp/resources/doc/application.pdf>

平成26年度コース生募集

応募
締め切り

平成26年
2月28日
(金)




3. ホームページ

2014年度、開講時に GLAFS ホームページを立ち上げ、学生、教員、スタッフのみならず、学外に向けても最新情報を発信し、共有化を図るように努めている。http://www.glafs.u-tokyo.ac.jp/



4. シンポジウム・ポスター

2014年度国内シンポジウム・ポスター



東京大学・博士課程教育リーディング・プログラム
 活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム



 **国際シンポジウム2014**

活力ある超高齢社会へのロードマップ 2030/2060

中国国勢は、2030年に65歳以上の高齢者人口が約1.7億を占め、75歳以上の高齢者割合も人口の約1/5を占める超高齢社会が形成されます。また、韓国、シンガポールも、近年に半導体で2040年には超高齢者人口が1/3を占め、中国でも2050年には高齢者人口の約1/3に達することが見込まれています。

こうした超高齢人口増加の傾向に対応し、健康、介護、住宅政策、医療、教育、地域社会の構築や都市整備など、様々な分野における取り組みを総合的に組み立てることは国家の課題となっています。また、健康と生き生きとした暮らしを実現することには、活力ある超高齢社会を創出することにもつながります。

この課題に世界的視野を持って取り組む

いかに高齢、世界に先駆けてその解決策の先進的モデルを生み出すことが求められています。

そのために、東京大学では2014年4月に「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」を開催します。健康、経済的リターン、社会的参加を重視して、活力ある超高齢社会のイメージを、多様な社会に共通する土壌の構築、政策、制度の策定について、分野横断的なディスカッションを通じて検討していきます。あわせて、本シンポジウムの意義に関わってアワードを授与いたします。このシンポジウムの目的を達成することといたします。

超高齢社会の構築は、すべての人と関わる課題です。ご専門の領域だけでなく、広く市民の参加が望まれます。

日時 2014.3.15 (土)
10:00~19:00 (受付9:30~)

会場 東京国際フォーラム
ホールB5 (入場無料・事前登録制)

主催 同シンポジウム実行委員会
(事務局：東京大学高齢社会総合研究機構)
〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1 (工学部5号館701)
<http://www.glafts.u-tokyo.ac.jp/> ① glafts@holog.jp

プログラム

10:00~10:30 オープニングセッション

10:30~11:50 第1部 基調講演

11:50~13:30 昼休み

13:20~13:40 第2部/パネルディスカッション
活力ある超高齢社会のイメージと到達への道筋

・テーマ1: 社会的包摂・社会参加・ソーシャル・フレンドリー
・テーマ2: 次世代の地域包括ケアシステムと社会包摂と生活支援
・テーマ3: Age-friendly Societyの生活空間と生活支援政策

13:40~19:00 クロージングセッション

19:10~20:30 レセプション(晚餐別)

定員 800人・入場無料(事前登録制)

申込 申込登録申込ページ
http://www.simul.jp/gemolm/conf/gemolmlogy_smpm2014/magstam2014/

お問い合わせ 株式会社サイマル・インターナショナル内シンポジウム事務局
TEL: 03-3524-3134
glafts@holog.jp
http://www.u-tokyo.ac.jp/gemolmlogy_symposium/index.html



講演者

Prof. Jackson, John (カリフォルニア大学)

西村 隆三 (国立社会政策・人口政策研究所)

パネリスト

Prof. Beck, Thomas (スタンフォード大学)

Prof. em. Campbell, John (スタンフォード大学)

Associate Prof. Chan, Wu-Ming (スタンフォード大学)

Prof. English, David (スタンフォード大学)

Prof. Guhler, Asher (スタンフォード大学)

Prof. Han, Gyounghee (ソウル大学)

高 原 浩 (慶応義塾)

溝根 純弘 (京大超高齢社会センター 総合研究員)

松下 真弘 (東京大学高齢社会総合研究機構・政策部長 / 大学院工学系研究科・教授)

秋山 弘平 (東京大学高齢社会総合研究機構・教授)

大竹 新一郎 (東京大学高齢社会総合研究機構・政策部長 / 大学院工学系研究科・教授)

大野 尚彦 (東京大学大学院情報学術院 総合研究員・教授)

辻 哲夫 (東京大学高齢社会総合研究機構・総合教授)

前田 新 (東京大学大学院工学系研究科 教授・准教授)

山口 康雄 (東京大学大学院工学系研究科 教授)

藤原 謙平 (東京大学大学院情報工学系研究科 教授)

佐野 繁 (東京大学高齢社会総合研究機構・政策部長 / 大学院工学系研究科 教授)

佐 野 繁 (東京大学高齢社会総合研究機構・政策部長 / 大学院工学系研究科 教授)



International Symposium 2014

2014年国際シンポジウム

“Aging in transition: the Dutch experience”

「転換期におけるエイジング：オランダの経験に学ぶ」



Date: October 29 2014(13:00-16:30) 日時:10月29日(水)13時～16時30分
Place: Lecture Room, 1st floor of Engineering Building #11, Hongo Campus
 場所: 東京大学工学部 11号館 1階講堂
Map(地図): http://www.u-tokyo.ac.jp/en/about/documents/Hongo_CampusMap_E.pdf (No.84)
Registration(申込み): seminar@glafs.u-tokyo.ac.jp
 email us the information below.
 Name, Academic Affiliation, Position, e-mail address (氏名、所属、役職、メールアドレスを添えてお送りください)
Language: English, Japanese-English simultaneous translation is provided. The slides will be translated into Japanese.
 言語: 英語 (同時通訳あり・スライドは日本語と英語で表示されます)

Program

13:00 – 13:10 Welcome 開会の挨拶
 Prof. Junichiro Okata, Institute of Gerontology director
Brief introduction of the program 概要説明
 Prof. John Campbell, moderator

13:10 – 14:10 New ideas on caring for frail older people in the community
 地域における脆弱高齢者のケア：新たな考え方
 a) Where do we stand and where do we go in the Netherlands? オランダの現状と方向性
 Prof. dr. Ruud Westendorp, Medical Delta
 Prof. dr. Jacques Allegro, StadsdorpZuid
 b) Buurtzorg: A sustainable community care model Buurtzorg:持続可能なコミュニティケアモデル
 Mr. Jos de Blok, Buurtzorg Nederland
 c) Our challenges toward community-based integrated care: Lessons from Buurtzorg
 地域包括ケアに向けた日本のチャレンジ—Buurtzorgから学ぶこと
 Dr. Satoko Hotta, Japan Institute for Labour Policy and Training

14:10 – 14:50 Audience questions, comments and discussion, speakers and moderator on stage
 フロアと登壇者による質疑応答・討論

14:50 – 15:10 Coffee break 休憩

15:10 – 15:55 Innovative insights and new technologies for active and healthy aging
 アクティブ&ヘルシー・エイジングのための革新的な考え方とテクノロジー
 a) Concepts for Lifestyle Improvement 生活習慣改善のためのコンセプト
 Prof. dr. Gerjan Navis, UMCG
 b) Dutch approach towards integrated care 統合ケアに向けたオランダ・アプローチ
 Ir. Eras Draaijers, IMDI
 Prof. dr. Ir. Onno van Schayck, IMDI-CCTR
 c) From less-able to active society contributant 「弱者」から「社会に貢献するアクティブシニア」へ
 Ir. Frank Neuwenshul, COO Motekforce Link

15:55 – 16:25 Audience questions, comments and discussion, speakers and moderator on stage
 フロアと登壇者による質疑応答・討論

16:25 – 16:30 Brief ceremonial close 閉会の挨拶

Sponsored
 Graduate Program in Gerontology, The University of Tokyo : Global Leadership Initiative for an Age-Friendly Society
 東京大学大学院・博士課程教育リーディングプログラム「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」

Co-sponsored
 The Embassy of the Kingdom of the Netherlands, オランダ大使館

About Contact
 Institute of Gerontology, The University of Tokyo
 Faculty of Engineering Bldg. 8, #713, 7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo
 +81-3-5841-1662 (TEL/FAX) ✉ seminar@glafs.u-tokyo.ac.jp
<http://www.glafs.u-tokyo.ac.jp/>



国際ワークショップ・ポスター

GLAFS
Graduate Program in Gerontology

国際国際ワークショップ
International Workshop

「高齢社会と法—高齢者の住まいと医療、その他の課題」
“Aging Society and the Law”
 Housing and Health Care for the Elderly

日時：2015年6月27日(土) 13:00～16:00
 Date: 27th June 2015, Saturday, 13:00～16:00

会場：東京大学本郷キャンパス内総合教育棟(ボクス棟)101号教室
 Venue: Room 101, Law School Building (plex tower), main gate of Hongo Campus, The University of Tokyo

地図：http://www.u-tokyo.ac.jp/composmap/cam01_01_06_1.html
 Map: <http://www.u-tokyo.ac.jp/maestro/400028141.pdf>

言語：英語
 Language: English

主催：東京大学大学院・博士課程教育リーディングプログラム「活力ある超高齢社会を共創するグローバルリーダー養成プログラム」(GLAFS)
 Sponsored by the Graduate Program in Gerontology (GLAFS), The University of Tokyo Global Leadership Initiative for an Age-Friendly Society

共催：東京大学大学院法学政治学専攻政策実践ビジネスセンター、比較法政研究センター
 Co-sponsored by the International Center for Comparative Law and Politics (ICCLP), The University of Tokyo

趣旨
 48 nations of the world are faced with urgent problems of the aging society. Professor David English of the University of Missouri is a leading expert on elder law. He will lead a workshop on aging and the law, with a focus on housing and health care for older people, including US-Japan comparisons.

申込・連絡先
 申込：「6/27 日本国際ワークショップ申込み」と題の上、6月25日(木)までに eventlog@glaf.u-tokyo.ac.jp 宛にメールにてお申し込みください。なお、英語事項も記載いたします。

Registration
 If convenient, please apply by June 25 by email: eventlog@glaf.u-tokyo.ac.jp

プログラム
 12:40 開場
 13:00～13:05 開会の言葉

第一部 高齢者の住まい
 13:05～13:35 デビッド・イングリッシュ教授(ミズーリ州立大学)
 「高齢者における住まいの質——米国におけるアーシングホーム運動を中心に」
 13:35～13:55 小野久一氏(国立社会福祉人口学研究所)
 「高齢者の住まいにおける日本の課題」
 13:55～14:10 休憩

第二部 高齢者と医療
 14:30～14:50 デビッド・イングリッシュ教授(ミズーリ州立大学)
 「高齢者の医療と法的課題」
 14:50～15:10 堀川健策教授(東京大学法学部)
 「終末期の医療と意思決定」
 15:10～15:30 ディスカッション
 コメント 眞山和子教授(慶応義塾大学)
 15:50 閉会の言葉 ジョン・キャンベル名誉教授(ミシガン大学)

13:40 13:45 Opening remark
 13:55～14:05 Professor David English, University of Missouri School of Law
 “Housing for the Elderly and Nursing Home Regulation in the US”
 14:05～14:25 Mr. Takumi Ono, National Institute of Population and Social Security Policy
 “Issues of Housing for the Elderly in Japan”
 14:25～14:30 break

Session 2: Health care and the Elderly
 14:30～14:50 Professor David English, University of Missouri School of Law
 “Health care for the Elderly and legal issues”
 14:50～15:10 Professor Norio Harauchi, The University of Tokyo
 “End-of-Life Care and the Decision-Making Process”
 15:10～15:30 Discussion: Comment from Professor Fumiko Inai, Yokohama National University
 15:30 Closing remark: Emeritus Professor John Campbell, University of Michigan

GLAFS (Institute of Gerontology, The University of Tokyo) Faculty of Engineering Bldg. #J112, 7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo.

【添付資料】

2015 年度

学生募集要項

平成27(2015)年度
東京大学大学院博士課程教育リーディング・プログラム
「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」
コース生（入学・編入）第1次募集・募集要項

1. プログラムの概要

(1) 本プログラムの教育研究上の目的

本プログラムは、修士課程から博士後期課程までの一貫した教育を行い、各研究科・専攻における教育を通じて「**高度な専門的研究能力**」を育成するとともに、本プログラム固有の教育カリキュラムを通じて、高齢社会問題に関する「**倫理力**」と、現実社会を変える「**実践力**」を育成し、もって、日本や世界各地の課題の現場において、**活力ある超高齢社会**を実現する取組みを主導する**世界レベルの博士人材**を育成することを目的としています。

(2) 養成する人材像

活力ある超高齢社会を共創する人材。すなわち、高齢社会問題に関する幅広い総合的知識と、特定分野における専門的研究能力に加え、分野横断的専門家チームを率いて課題解決に向けた協働能力を備えた、博士レベルの人材。

(3) 本プログラムの履修要件と学位

本プログラムを履修する学生（以下、コース生と呼ぶ）は、所属専攻の履修要件を満たすと同時に、本プログラムの提供する高齢社会総合研究学に関する共通科目について20単位（講義10単位・演習10単位）以上、ただし、4年制博士課程に所属するコース生は18単位（講義10単位・演習8単位）以上を修得し、所属専攻における博士論文の審査に合格し、本プログラム固有の博士論文の審査に合格した場合、「高齢社会総合研究プログラム修了証」が授与されるとともに、所属専攻が授与する博士の学位に「高齢社会総合研究プログラム修了」という認定が記されます。なお、博士前期課程（修士課程）において（4年制博士課程においては22年度次年度末まで）12単位（講義8単位・演習4単位）以上を取得する必要があります。

2. 申請資格

コース生に応募できる者は、下記の専攻の修士課程または博士課程に2015年4月に入学予定の者で、高齢社会の諸問題の解決に資する研究により博士の学位を取得しようとする者に限られます。なお、同専攻の修士課程または博士課程に2014年10月に入学予定の者でコース生に応募することを希望する者は、本募集要項の末尾の「秋入学者の応募について」を参照のこと。

工学系研究科: 社会基盤学専攻、建築学専攻、都市工学専攻、機械工学専攻、精密工学専攻、化学システム工学専攻、先端工学専攻

人文社会科学系研究科: 社会文化研究専攻

教育学研究科: 総合教育学専攻、学校教育高度化専攻

法政学系研究科: 総合法政専攻

総合文化研究科: 広域科学専攻

農学生命科学研究科: 生産・環境生物学専攻、応用生命化学専攻、水圏生物学専攻、農業・資源経済学専攻、生物・環境工学専攻、応用動物科学専攻、獣医学専攻

医学系研究科: 社会医学専攻、生体・発達・加齢医学専攻、外科学専攻、健康科学・看護学専攻

新領域創成科学研究科: 先端エネルギー工学専攻、メディアアルゴリズム専攻、人間環境学専攻、社会文化環境学専攻

情報理工学系研究科: 知能機械情報学専攻

3. 選抜方法

コース生の選抜は、申請書類（申請者情報、研究計画、参加動機と将来構想に関するエッセイ、指導教員等の意見書）、面接（注1）を総合的に判断して行います。

なお、今回の応募により選抜されたコース生のうち修士課程または医学系等の4年生博士課程に入学する者については、平成28(2016)年2月に資格試験(Q2-1)を行い、2年次以降、引き続きプログラム履修が許可される学生を選抜します。3年制の博士課程（博士後期課程）に入学する者、すなわちコースの博士後期課程への編入者については、平成28(2016)年2月に博士論文着手資格審査(Q2-3)を行い、本コースの4年次への選抜が許可される学生を選抜します。

(注1) 面接の日時は応募者の都合に合わせて設定します。

4. 募集人員

今回(第1次募集)の募集人員は、修士入学予定者25名、博士入学予定者5名です。
なお、平成27(2015)年2月に第2次募集を行います。

5. 申請手続

(1) 申請方法

ア. 申請方法 申請書類を下記(ウ)宛に郵送または直接持参すること。
イ. 受付期間 平成26(2014)年9月16日(月)から10月20日(月)17:00まで(必着)。
ウ. 受付窓口 東京都文京区本郷7丁目3番1号・工学部8号館7階713
東京大学高齢社会総合研究機構
リーディング・プログラム GLAFS 担当
問い合わせ先 info@ghs.u-tokyo.ac.jp

(2) 申請書類等

ア. 履修申請書 所定の用紙に所要事項を記入したものを。
イ. 教員の意見書 所定の用紙に指導教員または専攻のプログラム担当教員が記載し、密封したもの。

6. 選抜結果発表表及び採用手続

(1) 選抜結果の発表は、平成26(2014)年10月31日(金)13:00に高齢社会総合研究機構掲示板に掲示するとともに、申請者全員に対し、選抜の結果をメールまたは郵送で連絡します。

(2) 採用手続書類は、平成26(2014)年10月31日(金)13:00から、高齢社会総合研究機構で配付を開始します。採用内定者は、採用手続書類により、平成26(2014)年11月14日までに必要な採用手続(採用手続書類の提出)を行ってください。所定の期間内に採用手続を行わない場合は、採用内定を辞退したものと取り扱います。

7. 奨励金の支給

博士前期課程（修士課程）2年次のコース生には、概ね授業料に相当する額の学習奨励金、博士後期課程のコース生には、**学業成績等に応じ**、月額20万円～15万円の学習奨励金を支給することを予定しています。ただし、他の奨学金等を得ているコース生は本コースの奨励金を支給することができません。また、奨励金を支給するコース生は原則としてアルバイト等が禁じます。ただし、選考時を前提として、TA/RA、および本の専門的業務能力の向上に資すると認められる業務（たとえば医師資格を持つコース生が臨床実習に従事する場合）に従事することは認められます。

なお、奨励金は雑所得扱いとなるので所得税の確定申告が必要となります。また、年間所得に応じ、健康保険等の扶養家族から外れることもあることに留意してください。プログラムを履修する場合も、奨励金の受給を辞退することができます。また、本人の意思により奨励金の減額を申し出ることができます。なお、学習奨励金の額については、本プログラムの予算削減等により、やむをえず減額することがあります。

8. 注意事項

- (1) 受付期間中に必要書類が不備な申請は、受理しない。
- (2) 申請手続完了後は、どのような事情があっても、書類の変更は認めない。
- (3) 事情により、申請手続等について変更することがある。変更があった場合は、改めて通知する。
- (4) 申請に当たって知り得た氏名、住所その他の個人情報については、①履修者選抜(申請処理、選抜実施)、②採用者発表、③採用手続業務を行うために利用する。また、個人情報情報は、採用者のみ④学務関係(学籍、修業等)、⑤学生支援関係(就職支援、授業料免除申請等)に関する業務を行うために利用する。
- (5) 申請書における記載内容について虚偽の記載をした者は、採用後においても選考コース生であることを撤回することがある。

9. 秋入学者の応募について

- (1) 本プログラムに参加する専攻の修士課程または博士課程に平成26(2014)年10月に入学予定の者でコース生に応募することを希望する者は、申請書類を平成26(2014)年9月24日(水)17:00までに提出してください。
- (2) 選抜結果の発表は、平成26(2014)年9月30日(水)13:00に高齢社会総合研究機構掲示板に掲示するとともに、申請者全員に対し、選抜の結果をメールまたは郵送で連絡します。
- (3) 採用手続書類は、平成26(2014)年9月30日(水)13:00から、高齢社会総合研究機構で配付を開始します。採用内定者は、採用手続書類により、平成26(2014)年10月18日(水)までに必要な採用手続(採用手続書類の提出)を行ってください。所定の期間内に採用手続を行わない場合は、採用内定を辞退したものと取り扱います。

平成26(2014)年9月16日

様式 1

平成 27 年度 東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム
活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム
Graduate Program in Gerontology: Global Leadership Initiative for an Age-Friendly Society (GLAIFS)
コース生 履修申請書

1. 申請者情報等

(フリガナ) 氏名		男女
国籍		
生年月日		

現住所	〒 電話: E-mail:			
学歴	平成 年 月 大学 学部 学科卒	平成 年 月 大学院 研究科 専攻	専攻修士課程 博士課程	
平成 27 年 4 月 入学予定専攻名	東京大学大学院 研究科 専攻 修士課程・博士課程 (所属する研究所・センター:)			
学籍番号				
指導教員	所属部局		氏名	
副指導教員の希望	所属入名、又はそのような分野・人かを幅広く記述し可 ① ② ③			
他のリーディング大学院 にも申請している場合 は、申請先を右欄に記入				
研究課題				

(これからの研究計画が続き)

【年次計画】 (※博士後期課程編入志望者のみ)
(1 年目)

(2 年目)

(3 年目以降)

3. 研究と高齢社会の諸問題の解決との関連

自分が研究が、高齢社会の諸問題解決にどのように関連するのめを詳しく記述してください。

申請者氏名 _____

2. これからの研究計画 (図表を含めることも可。10 ポイント以上の文字で記入。種別の変更・追記は不可(印刷用))

以下の点について記述をできるだけの内容を記述してください。

- ① これまでの研究背景とその問題点について参考文献をお示しください。
- ② 研究目的、研究計画、研究内容について記述してください。
- ③ 本研究の特色、着眼点、独創性など、本研究が示した場合のインパクトなどについて記述してください。
- ④ どのような設備で、何をどこまで明らかにしようとするのか、具体的に記述してください。

申請者氏名 _____

4. 本プログラムに参加する動機と将来のキャリアについての構想

本リーディング大学院プログラムに参加する理由、博士課程終了後のキャリア (職、学、官など) の構想について記述してください。活力ある超高齢社会の实现に向けて、自身のキャリアがどのように貢献したいと考えているのかという点についても記載してください。また、自分の強みや特長と想われる事項 (研究発表、特化した学位取得、受賞歴、留学経験、特色ある学外活動) などの自己評価についても記述してください。

申請者氏名 _____

5. 研究活動の状況

- (1) 現在までの研究活動について記述してください。卒業研究やそれに準ずるもの（修論・課題、理論研究など）を含めても構いません。以下の項目にふさわしい申請者が**個人的な役割を担ったもののみ**、項目に区分して記載してください。その際、通し番号を付すこととし、該当のない項目は「なし」と記載してください。申請者にオンラインを付してください。
- (2) **国内学会・シンポジウム・国際会議等における発表**（口頭・ポスター等、要約の有無を区分して記載してください）
本人が発表したもののみ、著者（申請者を含む全員の名前を、宛先とは同一欄で記載してください。ただし、著者が多数の場合は上掲欄は、他〇〇名として一部を省略可とします。）、題名、発表した学会名、論文等の番号、発表日・年を記載してください。（発表予定のものも除く。ただし、発表申し込みが受理されたものは記載しても構いません。その場合は、それを証明できるものを添付してください。）
- (3) **学術雑誌等に発表した論文、著書**（印刷または採録決定のものに限ります。また、査読の有無を区分して記載してください。）
著者（申請者を含む全員の名前を、論文と同一欄で記載してください。ただし、著者が多数の場合は上掲欄は、他〇〇名として一部を省略可とします。）、題名、掲載誌名、発行所、巻号、頁、発行年をこの順で記入してください。採録決定のものについては、それを証明できるものを添付してください。
- (4) **その他**（任意欄）

申請者氏名 _____

様式 2

リーディング大学院申請者に関する意見書

このページは指導教員が作成し、封筒に入れて封をしてください（表に応募者の名前と所属専攻を明記）。

① 申請者氏名	
② 研究課題（申請書の「研究課題」を記入）	
③ 申請者に対する評価	
④ 総合評価 申請者の研究能力を総合的に評価し、該当する項目に○印をつけるとともに、推薦の順位を記してください。	(1) これまで指導した学生の中で a. 上位10%程度 b. 上位25%程度 c. 上位50%程度 d. 上位50%以下 (2) 推薦する学生____名中____番目

評価者の所属機関：東京大学 _____ 研究科・研究所 _____
 職： _____ 氏名： _____
 (印)

発 行 者：東京大学 高齢社会総合研究機構

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 工学部 8 号館 7 階

発 行 日：2016 年 10 月 10 日

印刷・製本：理想社

© Institute of Gerontology, The University of Tokyo